

南陽市遺跡分布調査報告書 (8)

市内遺跡分布調査
第二次長岡南森遺跡確認調査 (概報)

2020 年 3 月

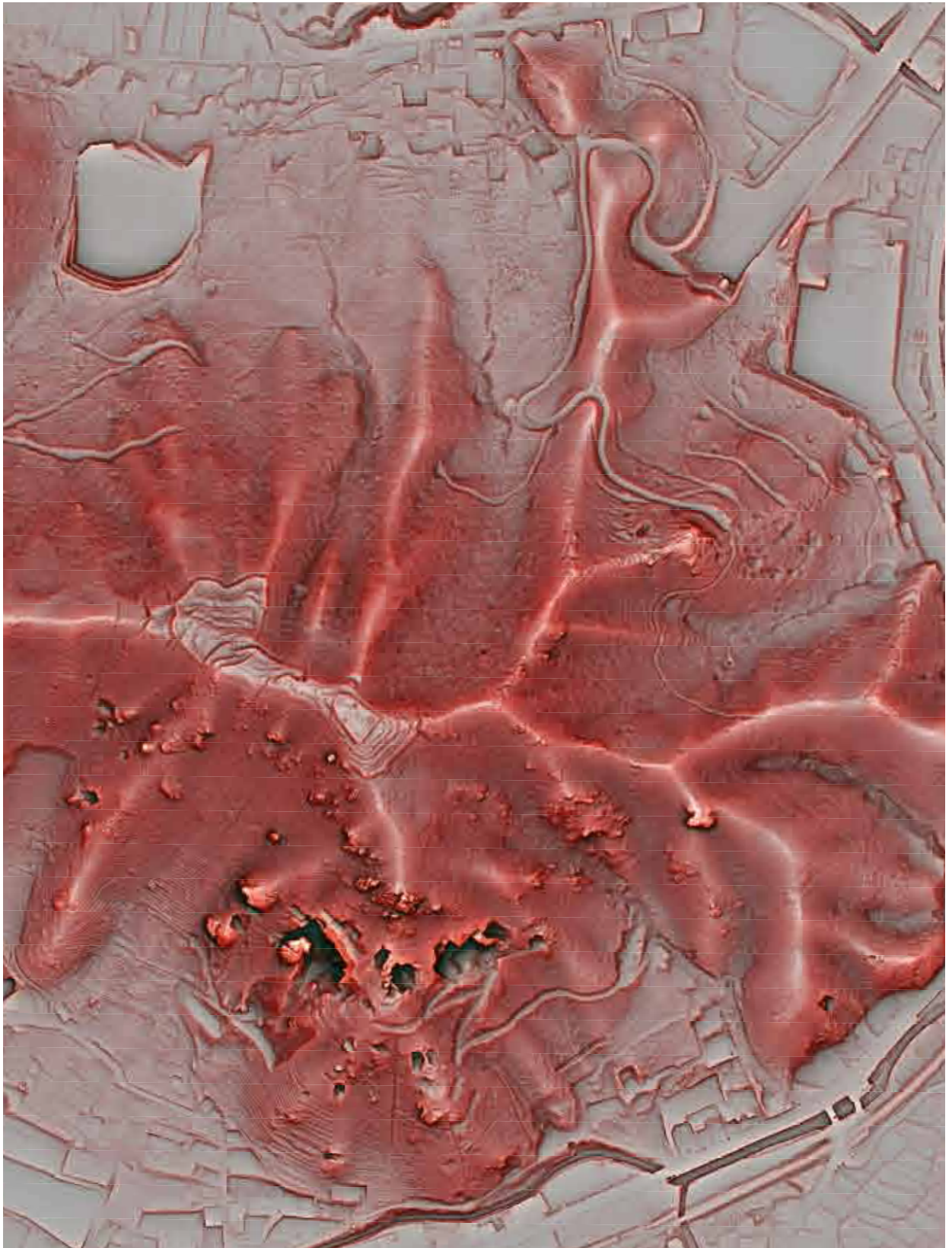
南陽市教育委員会

南陽市遺跡分布調査報告書（8）

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 20 集
市内遺跡分布調査
第二次長岡南森遺跡確認調査（概報）

令和 2 年 3 月

南陽市教育委員会





147 图 17



146 图 9

序

この度、「南陽市遺跡分布調査報告書（8）」を発行する運びとなりました。本書は、南陽市教育委員会が、平成31（令和元）年度に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として各種の開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るために実施した踏査、試掘調査、立会調査等の分布調査の成果及び第2次長岡南森遺跡確認調査の成果概要をまとめたものです。

本市は、肥沃な農地が多く葡萄やさくらんぼなどの果樹栽培や稲作が盛んであり、また市内赤湯地区を中心に豊富な温泉が湧き、米沢藩（上杉家）との関わりも深い土地であります。市内全域には、旧石器時代から中世に至るまで数多くの遺跡がございます。

遺跡は、その土地や地域の歴史を明らかにする貴重な宝です。この宝は、世代を越えて歴史と文化を伝え、故郷を愛する心やそこに生きる人々の誇りを育む心の糧となるものであり、大切に守っていかねばなりません。

近年の開発事業の傾向としては、大規模開発は減少しているものの、集合住宅や市街地での個人住宅建設、宅地分譲地の造成等、市民に身近なところでの開発は継続しております。「埋蔵文化財」の保護と各種開発との調整は日常的な業務となり、その積み重ねが地域の歴史の解明へとつながっていきます。

冒頭にも申し上げましたとおり、本書におきましては各種開発事業に伴う分布調査の成果の他、昨年度から調査を開始しました長岡南森遺跡の第2次確認調査の成果概要を掲載しております。大型古墳の可能性も含めて本市古墳時代の様相を知る上で非常に重要な調査となり、次年度も調査を継続する予定でございます。引き続き市民の皆様の御理解と御協力、ならびに関係各位の御指導をお願いいたします。

結びになりますが、本報告書作成にあたり、各種調査に御指導と御協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和2年3月

南陽市教育委員会

教育長 長濱 洋美

目 次

市内遺跡分布調査	23	沢田遺跡（2）	40
I 調査の概要		IV 立会調査	
1 調査の目的と概要	1	1 沢田遺跡	41
2 調査方法	1	2 宮内字黒木一	42
II 踏査		3 萩生田字宮之内	43
1 郡山字前田	7	4 新田字銀山	44
2 池黒字弁天	8	5 宮内字穴田（字大清水）	45
3 野添館跡	9	6 三間通字壇之越	46
4 ヌゲツポ遺跡	10	7 長岡山東遺跡	47
5 竜樹山古墳群	11	8 俎柳字内城	48
6 松沢古墳群1号墳	12	9 赤湯字湯尻二	49
III 試掘調査		10 俎柳字東畑二	50
1 馬場遺跡	13	11 砂塚字西寺田・東寺田	51
2 斎藤館跡	14	12 宮内字阿弥陀堂	52
3 沢田遺跡（1）	15	13 二色根字根小屋	53
4 島貫字上西原	17	14 俎柳字中丸、中ノ目下	54
5 小岩沢字萱ヶ作	18	15 萩生田遺跡	55
6 植木場一遺跡	19	16 赤湯字川尻	57
7 中落合遺跡	20	17 三間通字稲荷	58
8 高梨字西屋敷	22	18 中ノ目字北ノ前田	59
9 萩生田八景（中屋敷）	23	19 大橋字地藏浦東	60
10 矢ノ目館跡	24	V 測量調査	
11 二色根館跡	25	1 馬の墓古墳測量調査	61
12 大清水遺跡	26	2 中川地区の城館跡（岩部山館跡）等 測量調査	62
13 宮内字清水二	27	第二次長岡南森南森遺跡確認調査（概報）	
14 二色根字山崎	28	I 調査の経緯と目的	73
15 観音堂遺跡	29	II 遺跡の位置と環境	79
16 長岡山東遺跡	30	III 調査の概要	80
17 俎柳字東畑	32	IV 理化学分析	106
18 郡山字荒田	33	V 調査結果	111
19 二色根字の場	34	VI まとめと課題	113
20 二色根字大日浦	36		
21 長岡山遺跡	37		
22 三間通字一丁場	38		

図 版

第1図	調査位置図(1)……………	2	第43図	二色根館跡試掘ピット設定図……………	25
第2図	調査位置図(2)……………	3	第44図	二色根館跡試掘坑柱状図……………	25
第3図	調査位置図(赤湯地区松沢)……………	4	第45図	大清水遺跡試掘調査地……………	26
第4図	調査位置図(中川地区)……………	4	第46図	大清水遺跡試掘ピット設定図……………	26
第5図	郡山字前田踏査地……………	7	第47図	大清水遺跡試掘坑柱状図……………	26
第6図	池黒字弁天踏査地……………	8	第48図	宮内字清水二試掘調査地……………	27
第7図	野添館跡踏査地……………	9	第49図	宮内字清水二試掘ピット設定図……………	27
第8図	ヌゲツポ遺跡踏査地……………	10	第50図	宮内字清水二試掘坑柱状図……………	27
第9図	竜樹山古墳群踏査地……………	11	第51図	二色根字山崎試掘調査地……………	28
第10図	松沢古墳群1号墳調査地……………	12	第52図	二色根字山崎試掘トレンチ設定図……………	28
第11図	松沢古墳群1号墳石室実測図……………	12	第53図	二色根字山崎試掘坑柱状図……………	28
第12図	馬場遺跡試掘調査地……………	13	第54図	観音堂遺跡試掘調査地……………	29
第13図	馬場遺跡試掘トレンチ設定図……………	13	第55図	観音堂遺跡試掘ピット設定図……………	29
第14図	馬場遺跡試掘坑柱状図……………	13	第56図	観音堂遺跡試掘坑柱状図……………	29
第15図	斎藤館跡試掘調査地……………	14	第57図	長岡山東遺跡試掘調査地……………	30
第16図	斎藤館跡試掘坑柱状図……………	14	第58図	長岡山東遺跡試掘トレンチ設定図……………	30
第17図	斎藤館跡試掘ピット設定図……………	14	第59図	長岡山東遺跡掘坑柱状図……………	30
第18図	沢田遺跡試掘調査地……………	15	第60図	俎柳字東畑試掘調査地……………	32
第19図	沢田遺跡試掘坑柱状図……………	15	第61図	俎柳字東畑試掘ピット設定図……………	32
第20図	沢田遺跡試掘トレンチ設定図……………	15	第62図	俎柳字東畑試掘坑状図……………	32
第21図	島貫字上西原試掘調査地……………	17	第63図	郡山字荒田試掘調査地……………	33
第22図	島貫字上西原試掘トレンチ設定図……………	17	第64図	郡山字荒田試掘トレンチ設定図……………	33
第23図	島貫字上西原試掘坑柱状図……………	17	第65図	郡山字荒田試掘坑柱状図……………	33
第24図	萱ヶ作試掘調査地……………	18	第66図	二色根字的場試掘調査地……………	34
第25図	萱ヶ作試掘ピット設定図……………	18	第67図	二色根字的場試掘ピット設定図……………	34
第26図	萱ヶ作試掘坑柱状図……………	18	第68図	二色根字的場試掘坑柱状図……………	35
第27図	植木場一遺跡試掘調査地……………	19	第69図	二色根字大日浦試掘調査地……………	36
第28図	植木場一遺跡試掘ピット設定図……………	19	第70図	二色根字大日浦試掘ピット設定図……………	36
第29図	植木場一遺跡試掘坑柱状図……………	19	第71図	二色根字大日浦試掘坑柱状図……………	36
第30図	中落合遺跡試掘調査地……………	20	第72図	長岡山遺跡試掘調査地……………	37
第31図	中落合遺跡試掘ピット設定図……………	20	第73図	長岡山遺跡試掘ピット設定図……………	37
第32図	中落合遺跡試掘坑柱状図……………	20	第74図	長岡山遺跡試掘坑柱状図……………	37
第33図	高梨字西屋敷試掘調査地……………	22	第75図	三間通字一丁場試掘調査地……………	38
第34図	高梨字西屋敷試掘ピット設定図……………	22	第76図	三間通字一丁場試掘トレンチ設定図……………	38
第35図	高梨字西屋敷試掘坑柱状図……………	22	第77図	三間通字一丁試掘坑柱状図……………	38
第36図	萩生田八景試掘調査地……………	23	第78図	沢田遺跡(2)試掘調査地……………	40
第37図	萩生田八景試掘ピット設定図……………	23	第79図	沢田遺跡(2)試掘トレンチ設定図……………	40
第38図	萩生田八景試掘坑柱状図……………	23	第80図	沢田遺跡(2)試掘坑柱状図……………	40
第39図	矢ノ目館跡試掘調査地……………	24	第81図	沢田遺跡立会調査地……………	41
第40図	矢ノ目館跡試掘トレンチ設定図……………	24	第82図	宮内字黒木一立会調査地……………	42
第41図	矢ノ目館跡試掘坑柱状図……………	24	第83図	宮内字黒木一立会調査柱状図……………	42
第42図	二色根館跡試掘調査地……………	25	第84図	萩生田字宮之内立会調査地……………	43

第 85 図	萩生田字宮之内立会調査柱状図	43	第 122 図	鷹戸山館主郭略図	66
第 86 図	新田字銀山立会調査地	44	第 123 図	鷹戸山東館主郭略図	66
第 87 図	宮内字穴田立会調査地	45	第 124 図	日影館・日影小館略図	66
第 88 図	三間通字壇之越立会調査地	46	第 125 図	北日影館略図	67
第 89 図	三間通字壇之越立会調査柱状図	46	第 126 図	岩部山館跡周辺遺跡配置図	67
第 90 図	長岡山東遺跡立会調査地	47	第 127 図	長岡南森遺跡 G 配置 (1)	74
第 91 図	長岡山東遺跡立会調査柱状図	47	第 128 図	長岡南森遺跡 G 配置 (2)	75
第 92 図	俎柳字内城立会調査地	48	第 129 図	長岡南森遺跡遺跡位置図	81
第 93 図	俎柳字内城立会調査柱状図	48	第 130 図	T 3 平坦面遺構平面	83
第 94 図	赤湯字湯尻二立会調査地	49	第 131 図	T 1 (P10 グリッド拡張部) 北壁 断面図	84
第 95 図	赤湯字湯尻二立会調査柱状図	49	第 132 図	T 1 (M10 グリッド拡張部) 北壁 断面図	84
第 96 図	俎柳字東畑二立会調査地	50	第 133 図	T 1 西壁断面図	85
第 97 図	俎柳字東畑二立会柱状図	50	第 134 図	T 1 南壁断面図	85
第 98 図	砂塚字西寺田・東寺田立会調査地	51	第 135 図	T 1 南壁 (拡張前) 断面図	86
第 99 図	宮内字阿弥陀堂立会調査地	52	第 136 図	T 1 b 南壁断面図	86
第 100 図	二色根字根小屋立会調査地	53	第 137 図	T 1 a 平面図・断面図	87
第 101 図	俎柳字中丸・中ノ目下立会調査地	54	第 138 図	T 1-M10s・T 1-M10n 平面図・ 遺物出土図	87
第 102 図	俎柳字中丸・中ノ目下立会調査柱状図	54	第 139 図	T 1-M10s、T 1-M10n 断面図	89
第 103 図	萩生田遺跡立会調査地	55	第 140 図	G10 ~ I10 の遺構断面図 (1)	92
第 104 図	萩生田遺跡立会調査柱状図	55	第 141 図	G10 ~ I10 の遺構断面図 (2)	93
第 105 図	萩生田遺跡試掘トレンチ遺構平面図	56	第 142 図	T 3 平坦面 (二段目) 遺構平面図・ 遺物出土状況 (古墳時代・古代)	94
第 106 図	萩生田遺跡試掘トレンチ設定図	56	第 143 図	T 3 平坦面遺構平面図・遺物出土状況 (縄文時代)	95
第 107 図	赤湯字川尻立会調査地	57	第 144 図	T 3 平坦面遺構平面図・遺物出土状況 (古墳時代)	96
第 108 図	赤湯字川尻立会調査柱状図	57	第 145 図	T 3 平坦面遺構平面図・遺物出土状況 (古代)	97
第 109 図	三間通字稲荷立会調査地	58	第 146 図	トレンチ出土遺物 (1)	100
第 110 図	三間通字稲荷立会調査柱状図	58	第 147 図	トレンチ出土遺物 (2)	101
第 111 図	中ノ目字北ノ前田立会調査地	59	第 148 図	トレンチ出土遺物 (3)	102
第 112 図	中ノ目字北ノ前田立会調査柱状図	59	第 149 図	山形県内器台出土遺物例	104
第 113 図	大橋字地藏浦東立会調査地	60	第 150 図	平成 30 年度調査出土および表採土器	105
第 114 図	大橋字地藏浦東立会調査柱状図	60			
第 115 図	馬の墓古墳測量図	61			
第 116 図	計測飛行範囲図	62			
第 117 図	岩部山館全体図	63			
第 118 図	岩部山館主郭略図	63			
第 119 図	岩部山館東郭略図	64			
第 120 図	虚空蔵山館略図	64			
第 121 図	鷹戸山・鷹戸山東館位置図	65			

表

表1 平成31年度(令和元)年度埋蔵文化財分布・試掘・ 立会調査実施一覧(地区別)……………	5	表4 遺物観察表(1)……………	103
表2 グリッド数値……………	74	表5 遺物観察表(2)……………	104
表3 土層対応表……………	89	表6 尾根中軸から傾斜変換点までの距離(北壁計測値)	113
		表7 各部位の幅比較表……………	113

長岡南森遺跡発掘調査写真図版

巻頭写真1	岩部山館跡赤色立体図	写真図版9	トレンチ出土遺物(1)
巻頭写真2	長岡南森遺跡出土土器第147図17 長岡南森遺跡出土土器第146図9	写真図版10	トレンチ出土遺物(2)
写真図版1	調査前風景	写真図版11	トレンチ出土遺物(3)
写真図版2	トレンチ1(1)	写真図版12	トレンチ出土遺物(4)
写真図版3	トレンチ1(2)	写真図版13	トレンチ出土遺物(5)
写真図版4	トレンチ1(3)	写真図版14	トレンチ出土遺物(6)
写真図版5	トレンチ3(1)	写真図版15	トレンチ出土遺物(7)
写真図版6	トレンチ3(2)	写真図版16	トレンチ出土遺物(8)
写真図版7	トレンチ3(3)	写真図版17	トレンチ出土遺物(9)
写真図版8	トレンチ3(4)	写真図版18	トレンチ出土遺物(10)・ 平成30年度調査出土遺物

市内遺跡分布調査

本報告は、文化庁の補助を受けて平成31（令和元）年度に南陽市教育委員会が実施した開発事業との調整、遺跡台帳（遺跡地図）整備に関する市内遺跡分布査報告である。

調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

凡 例

調査主体	南陽市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係	
調査期間	平成31年4月1日から令和2年3月31日	
発掘調査担当者	社会教育課長	板垣幸広
	調査主任	角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）
	埋蔵文化財係主任	高橋 徹
	埋蔵文化財係嘱託	斉藤紘輝
整理作業担当者	埋蔵文化財係嘱託	吉田江美子
	埋蔵文化財係嘱託	山田 渚

- 1 本報告書の執筆は角田朋行が担当し、遺物整理作業は山田渚、報告書デジタル編集・構成作業は吉田江美子、山田渚が担当した。
- 2 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 3 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。
SD・・・溝跡 SK・・・掘立柱建物跡 SP・・・ピット
TT・・・テストトレンチ TP・・・テストピット
- 4 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 5 本調査にあたっては、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申上げる。
（五十音順・敬称略）
青山博樹、菊池芳朗、菊池強一、佐藤鎮雄、佐藤庄一、門叶冬樹、長井謙治、柳沼賢治、吉野一郎

I 調査の概要

1 調査の目的と概要

近年は、住宅地造成と集合住宅建設が増加傾向にあり、各種開発との調整を図り遺跡の保護を図るための試掘調査及び立会調査を実施した。

本市では令和元年度現在で 307 ケ所の遺跡を把握している。遺跡台帳の整備も順調に進んでおり、分布調査の成果が上がってきているが、未調査地域はまだ残されている。特に市域の 7 割を占める山間地は殆ど手つかずで、古くからの住宅地も未調査地域が多い。また、周知の遺跡でも情報が少ない遺跡が存在するため、それらも含めて遺跡台帳整備のための調査を継続している。

周知の遺跡でも、古墳である可能性が生じた長岡南森遺跡や貴重な縄文草創期の低湿地遺跡であることが判明した北町遺跡など、その再評価が進んだ。保存目的や学術目的による調査も開始され、長岡南森遺跡確認調査は今年度が 2 年目となる。

平成 31 年 4 月から令和元年 12 月までの開発行為に伴う遺跡所在の有無に関する照会は計 74 件であった。踏査は 12 件、試掘調査は 22 件、工事立会は 18 件である。試掘調査は、埋蔵文化財包蔵地及びその隣接地・分布調査未実施地において実施に努めた。工事立会は、工期に余裕がない場合や工事面積が狭い場合、埋蔵文化財を破壊する恐れが少ないと判断された場合及び分布調査未実施地において実施した。

2 調査方法

(1) 踏査及び分布調査

踏査は、開発事業計画地の範囲内及びその周辺の踏査を行い遺跡の範囲と開発予定区域の平面的な関係を確認する調査である。分布調査は、主に遺跡台帳整備のための踏査である。いずれも事前・事後に周知の資料により、地形状況や従来の報告等の内容を確認している。GPS 付のカメラやスマートフォンを活用し、簡易な位置情報を記録しながら踏査した。遺跡台帳の整備を図るため重要遺跡の測量調査を行った。

(2) 試掘調査

試掘調査は、埋蔵文化財の有無を確認するための部分的な発掘調査である。本市では遺構や遺物の平面的な分布範囲や遺構確認面までの深さ等を把握し、遺跡内容の把握を行う確認調査の側面も有する。開発予定地内にグリッドを設定のうえ試掘溝あるいは試掘坑を配し、表土を人力や重機で除去後、堆積土を人力で除去し、遺構の有無を確認した。

(3) 立会調査

立会調査は、基本的に開発事業による遺跡への影響が軽微な場合に、工事施工に立ち会って実施し、遺構や遺物が発見された場合には記録保存を行う調査である。工事の進捗にあわせ、土工事を行う際に立ち会いを行い、遺構・遺物の確認及び土層の確認を行った。掘削深度は工事の掘底面である。遺跡未確認地の場合もできるだけ工事立ち会いを行い遺跡の把握に努めた。

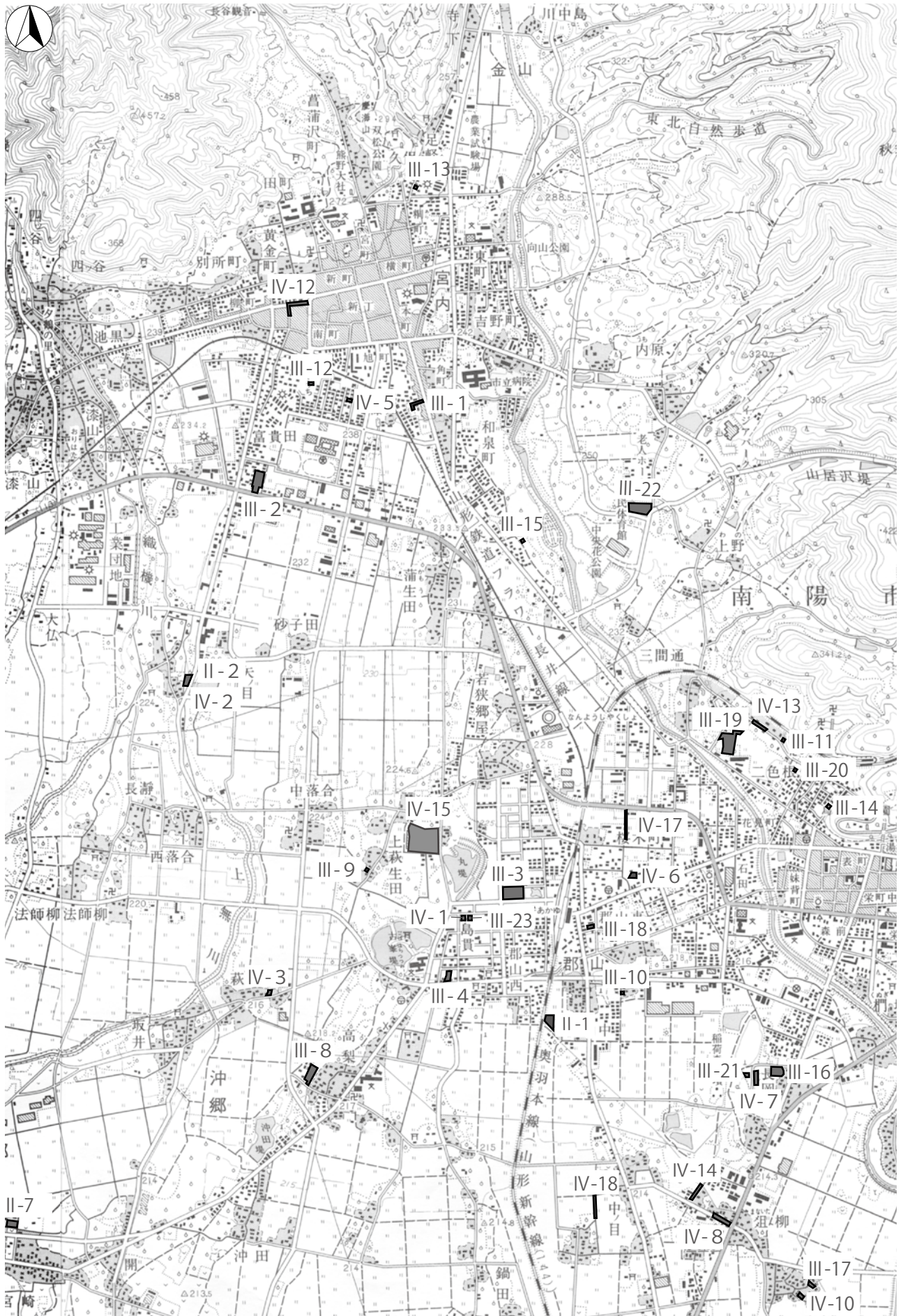
(4) 確認調査

埋蔵文化財包蔵地の範囲・性格内容等の概要を把握する部分的な発掘調査である。古墳時代の重要遺跡である長岡南森遺跡について実施した。



第1図 調査位置図(1)

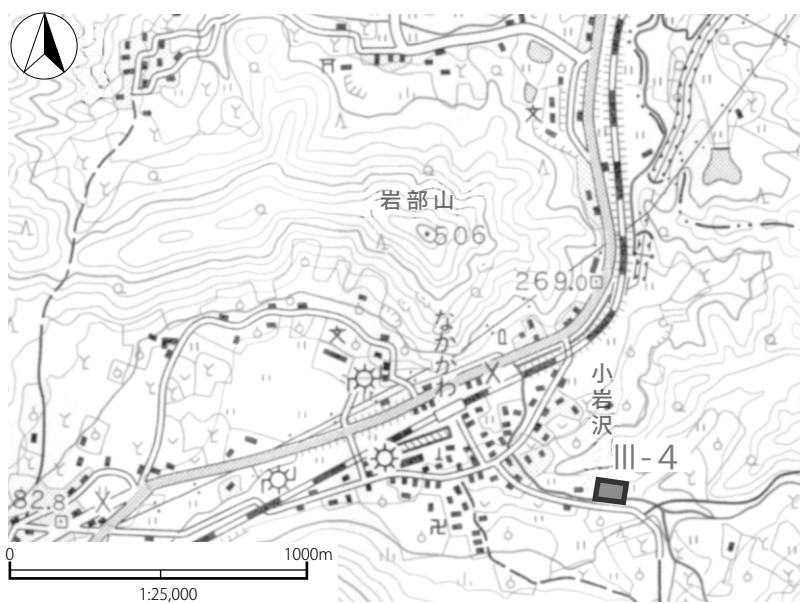
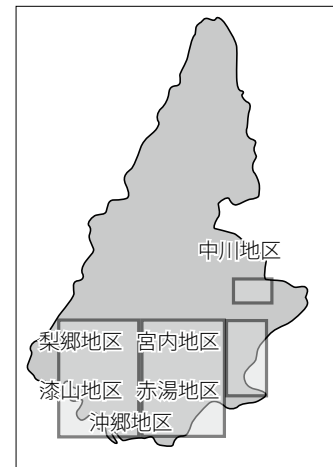
国土地理院発行「赤湯」「羽前小松」2万5千分の1を使用



第2図 調査位置図 (2)



第3図 調査位置図(赤湯地区松沢)



国土地理院発行「赤湯」5万分の1を200%拡大して使用

第4図 調査位置図(中川地区)

表1 平成31(令和元)年度埋蔵文化財分布・試掘・立会調査実施一覧(地区別)

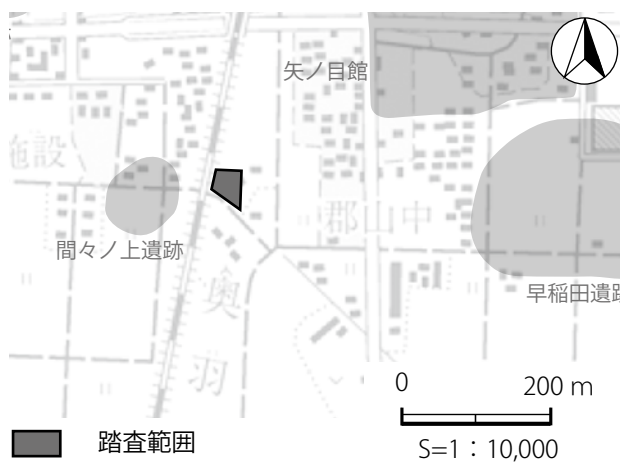
地区	事業区分	現場調査期間	遺跡名等	場所	区分	試掘結果等
赤湯	民間開発	平成31年4月4日	未確認	上野字山居沢山	立会	なし
赤湯	分布調査	平成31年4月15～17日	松沢古墳群	松沢字赤石山	測量	実測図補足
赤湯	古墳確認調査	令和元年5月7日～7月	長岡南森遺跡	長岡字南森	本調査	
赤湯	民間開発	令和元年5月16日	未確認	三間通字壇之越	立会	なし
赤湯	民間開発	令和元年6月12日	二色根館跡	二色根字南京観音堂	試掘	なし
赤湯	民間開発	令和元年7月4日	未確認	二色根字山崎	試掘	なし
赤湯	下水道整備	令和元年7月24日	長岡山東遺跡	長岡字西田中	立会	なし
赤湯	分布調査	令和元年8月7日	北町遺跡	赤湯字新田前	試掘	縄文草創期の層
赤湯	下水道整備	令和元年8月30日	内城館跡	俎柳字内城	立会	なし
赤湯	民間開発	令和元年9月2日	未確認	赤湯字湯尻二	立会	なし
赤湯	民間開発	令和元年9月4日	未確認	俎柳字東畑二	立会	なし
赤湯	市道整備	令和元年9月5日	二色根館跡	二色根字根小屋(市道)	立会	なし
赤湯	下水道整備	令和元年9月5日	中ノ目下遺跡	俎柳字中丸、中ノ目字下	立会	なし
赤湯	分布調査	令和元年9月13日	未確認(柵塚御番所跡)	柵塚字中谷地、塚田三	踏査	なし
赤湯	民間開発	令和元年9月19日	長岡山東遺跡	長岡字西田中	試掘	須恵器片、土師器片
赤湯	民間開発	令和元年10月3日	未確認	俎柳字東畑	試掘	なし
赤湯	分布調査	令和元年10月9日	二色根館跡	二色根字館ノ山、字秋葉山	踏査	なし
赤湯	民間開発	令和元年10月16日	月ノ木遺跡	赤湯字中堀南	踏査	石器片
赤湯	民間開発	令和元年10月23日、24日	二色根館跡	二色根字的場	試掘	なし
赤湯	民間開発	令和元年10月24日	二色根館跡	二色根字大日浦	試掘	なし
赤湯	民間開発	令和元年11月5日	長岡山遺跡	長岡字西田中	試掘	土器片
赤湯	下水道整備	令和元年11月5日～12日	未確認	赤湯字川尻	立会	なし
赤湯	公共施設整備	令和元年11月14日	未確認	三間通字一丁場	試掘	なし
赤湯	下水道整備	令和元年12月2日	未確認	三間通字稲荷	立会	なし
赤湯	分布調査	令和元年12月3日	二色根館跡	二色根字館ノ山他	踏査	なし
赤湯	公共施設整備	令和元年12月5日	未確認	大橋字地蔵浦東	立会	なし
漆山	民間開発	平成31年4月8日	未確認	池黒字弁天	踏査	なし
沖郷	民間開発	平成31年2月13日	沢田遺跡	島貫字六角	立会	なし
沖郷	民間開発	平成31年3月26日	沢田遺跡	若狭郷屋字駅西	試掘	なし
沖郷	民間開発	平成31年4月3日	未確認	島貫字上西原	試掘	土師器片
沖郷	民間開発	平成31年4月3日	未確認	萩生田字宮之内	立会	なし
沖郷	民間開発	平成31年4月8日	未確認	郡山字前田	踏査	なし
沖郷	分布調査	平成31年4月10日	野添館跡	中ノ目字野添	踏査	なし
沖郷	民間開発	平成31年4月16日	植木場一遺跡	露橋字六兵工裏他	試掘	なし
沖郷	民間開発	平成31年4月22日	中落合館跡(中落合遺跡)	中落合字宅地	試掘	近世建物跡、近世陶器
沖郷	民間開発	平成31年4月23日	未確認	高梨字西屋敷	試掘	なし
沖郷	民間開発	平成31年4月23日	未確認	萩生田字八景	試掘	なし
沖郷	民間開発	令和元年5月14日	矢ノ目館跡	郡山字砂原	試掘	須恵器片
沖郷	民間開発	令和元年8月2日～10月10日	萩生田遺跡	萩生田字白山	立会	溝跡、土師器、須恵器
沖郷	公共施設整備	令和元年10月16日	未確認	郡山字荒田	試掘	なし
沖郷	民間開発	令和元年11月18日	沢田遺跡	島貫字六角	試掘	土師器
沖郷	市道整備	令和元年12月2日	未確認	中ノ目字北ノ前田	立会	なし
中川	民間開発	平成31年4月8日	未確認	小岩沢字萱ヶ作	試掘	なし
中川	民間開発	平成31年4月8日	未確認	新田字銀山	試掘	なし
中川	分布調査	令和元年12月19日	虚空蔵山館	川樋字上七曲字所沢	踏査	なし
宮内	民間開発	平成31年2月22日	馬場遺跡	宮内字馬場一	試掘	なし
宮内	民間開発	平成31年3月8日	未確認	宮内字黒木一	立会	なし
宮内	民間開発	平成31年3月25日	斉藤館跡	宮内字富貴田一	試掘	なし
宮内	民間開発	平成31年4月22日	未確認	宮内字穴田	立会	なし
宮内	民間開発	令和元年6月13日	大清水遺跡	宮内字大清水	試掘	なし
宮内	民間開発	令和元年6月18日	久保遺跡隣地	宮内字清水二	試掘	なし
宮内	民間開発	令和元年7月18日	未確認	宮内字町尻一	立会	なし
宮内	民間開発	令和元年8月29日	観音堂遺跡	宮内字関口	試掘	土師器片
宮内	市道整備	令和元年9月5日	未確認	宮内字阿弥陀堂	立会	なし
宮内	分布調査	令和元年12月3日	宮沢城跡	宮内字疱瘡神堂他	踏査	なし
梨郷	分布調査	平成31年4月10日	ヌゲッポ遺跡	竹原字白山	踏査	石器、縄文土器
梨郷	分布調査	平成31年4月16日	竜樹山古墳群	梨郷字竜樹山他	踏査	なし
梨郷	市道整備	令和元年9月5日	未確認	砂塚字西寺田	立会	なし
梨郷	分布調査	令和元年9月13日	未確認(御米蔵跡)	梨郷字小山、酒町一	踏査	なし

II 踏査

1 郡山字前田

- (1) 調査日 平成31年4月8日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字前田
- (3) 調査目的 間々ノ上遺跡の隣地での宅地造成計画があるため踏査を行った。
- (4) 調査方法及び内容
写真撮影を行いながら踏査する。
- (5) 結果

調査地内には遺跡は無いと考えられる。遺跡範囲については修正を要しない。



第5図 郡山字前田踏査地



遺跡全景（北西より）



遺跡全景（南東より）



遺跡全景（南東より）

2 池黒字弁天

(1) 調査日 平成31年4月8日

(2) 調査場所 南陽市池黒字弁天

(3) 調査目的 木之実小屋遺跡の隣地で開発が行われるため踏査を行った。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 結果

調査地では遺構・遺物は確認されなかった。遺跡範囲については修正を要しない。



遺跡全景（北西より）



遺跡全景（南より）



遺跡全景（南西より）



遺跡全景（西より）



遺跡全景（西より）

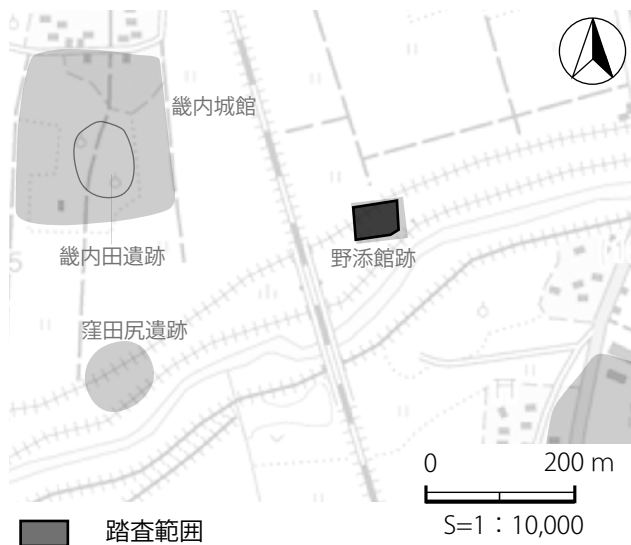
3 野添館跡

- (1) 調査日 平成31年4月10日
- (2) 調査場所 南陽市中の目字野添
- (3) 調査目的 遺跡確認
- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 結果

調査地は、明治26年字限図および享保年間の絵図に堀に囲まれた方形区画が存在するため、館跡の可能性を考慮して踏査したが、遺物は出土せず遺構はすでに削平されたものと思われる。



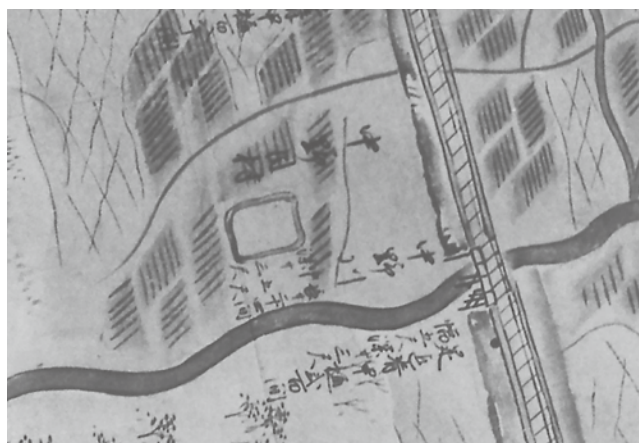
第7図 野添館跡踏査地



遺跡全景（北より）



遺跡全景（北西より）



享保年間の野添館跡周辺絵図



遺跡遠景（北より）

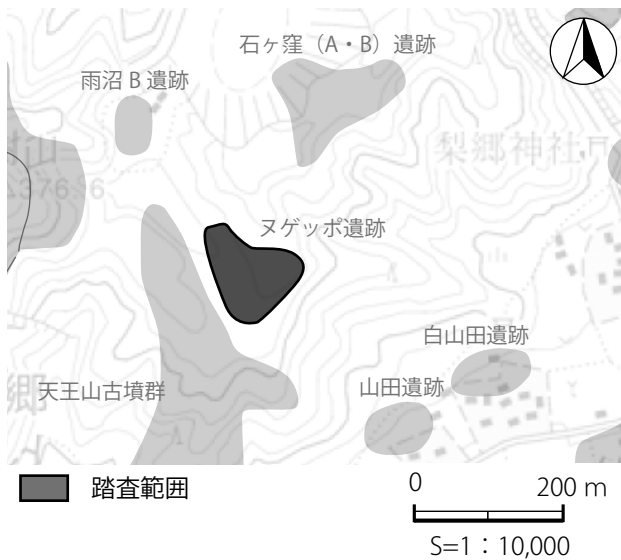
4 ヌゲツポ遺跡

- (1) 調査日 平成31年4月10日
- (2) 調査場所 南陽市竹原字白山他
- (3) 調査目的 遺跡確認・継続調査
- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 結 果

ヌゲツポ遺跡は南陽市総合公園を造成する際に調査を行った縄文早期～前期の遺跡である。遺跡内に造成された作業道では現在も石器・土器が採集できる。今回踏査した道の壁面にピットと幅3m程の遺構らしき土色変化が確認できた。また地表から約40cm下から縄文土器と石器が出土した。



第8図 ヌゲツポ遺跡踏査地



土中から露出した石器 (西より)



遺跡全景 (北より)



法面に露出した遺構断面か？ (西北より)

5 竜樹山古墳群

(1) 調査日 平成31年4月16日

(2) 調査場所 南陽市梨郷字竜樹山

(3) 調査目的

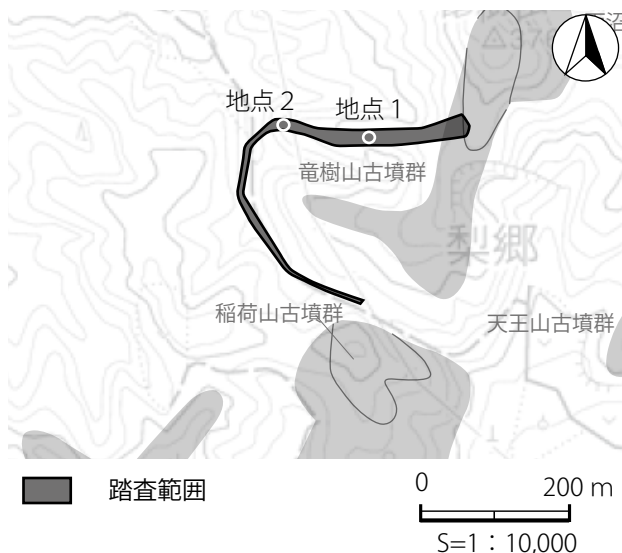
赤色立体地図を作成したところ2地点にマウンド状の地形が見られたことから、それらを確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

地点1・2ともに人工的な盛り土は見られず自然地形であった。



第9図 竜樹山古墳群踏査地



地点1マウンド（北より）



地点2マウンド（北より）

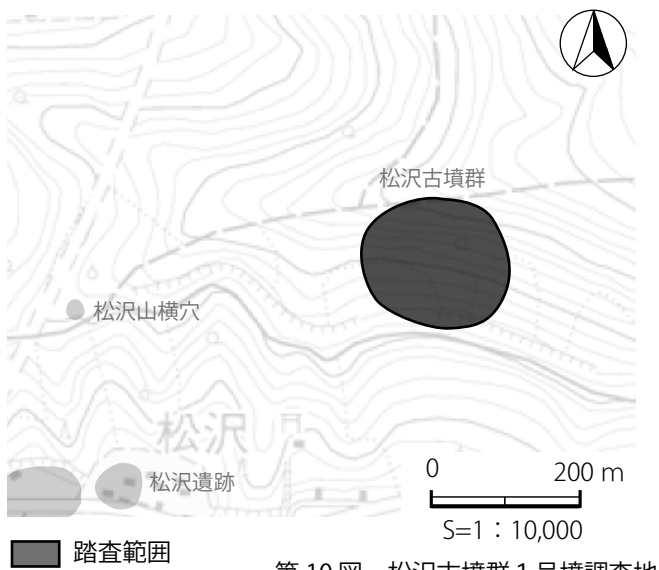


マウンドのある尾根（東より）

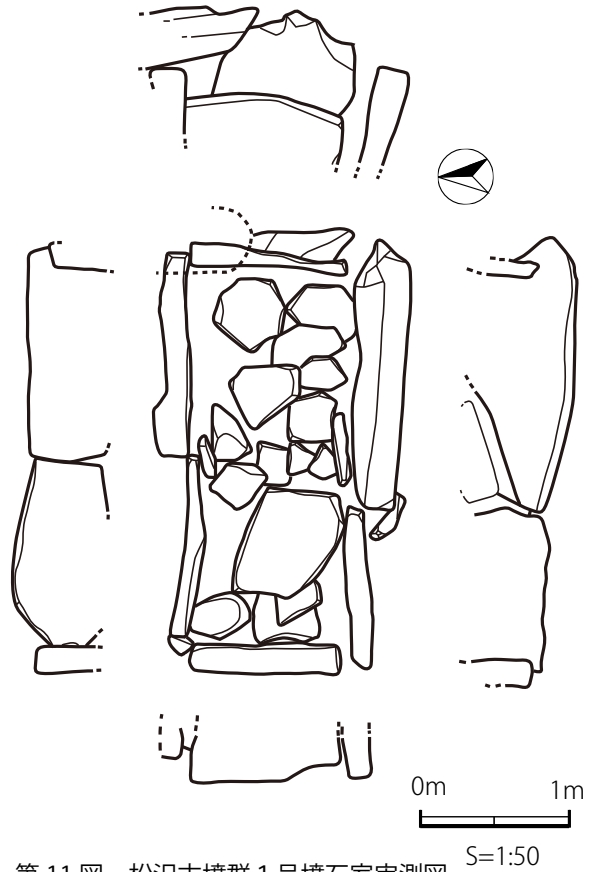
6 松沢古墳群 1号墳

- (1) 調査日 平成31年4月15日～17日
- (2) 調査場所 南陽市松沢字赤石山
- (3) 調査目的 松沢古墳群1号墳石室の実測図の補足
- (4) 結果

過去に作成された松沢古墳1号墳の実測図に、東側奥石が記載されていなかったため、再実測し作図した。従来の実測図には方位もなかったことからこれも補足した。



第10図 松沢古墳群1号墳調査地



第11図 松沢古墳群1号墳石室実測図



左：石室（西より）
中央：石室東側（西より）
右：石室（東より）

III 試掘調査

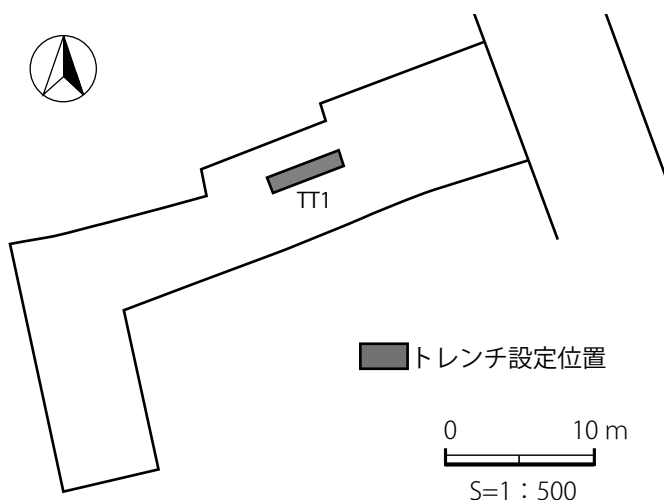
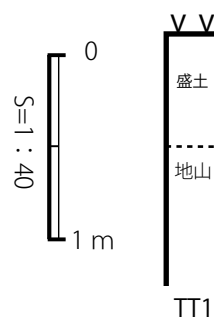
1 馬場遺跡

- (1) 調査日 平成 31 年 2 月 22 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字馬場一 435、440- 8
調査対象地（工事）面積 309.44㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は馬場遺跡にかかることから試掘調査を行うものとした。幅 1.5 m×長さ 5 m の試掘溝 1 ヶ所を設定し試掘を実施した。

(5) 結果

遺構・遺物は確認できなかった。調査地内には遺跡は無いと考えられる。



2 斎藤館跡

(1) 調査日 平成31年3月25日

(2) 調査場所 南陽市宮内 4545-2

調査対象地（工事）面積 66.25㎡

(3) 調査原因 自動車車庫建設

(4) 調査方法及び内容

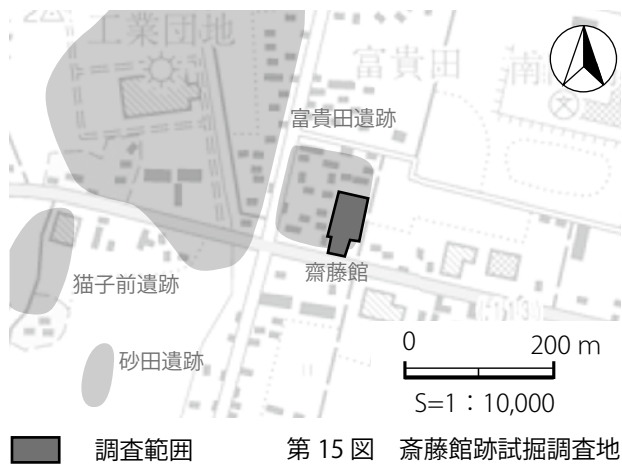
対象地は斎藤館跡内である。幅1m×長さ1mの試掘穴2ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結 果

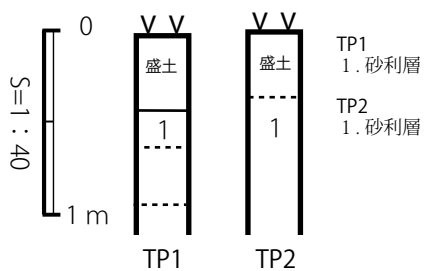
遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考 察

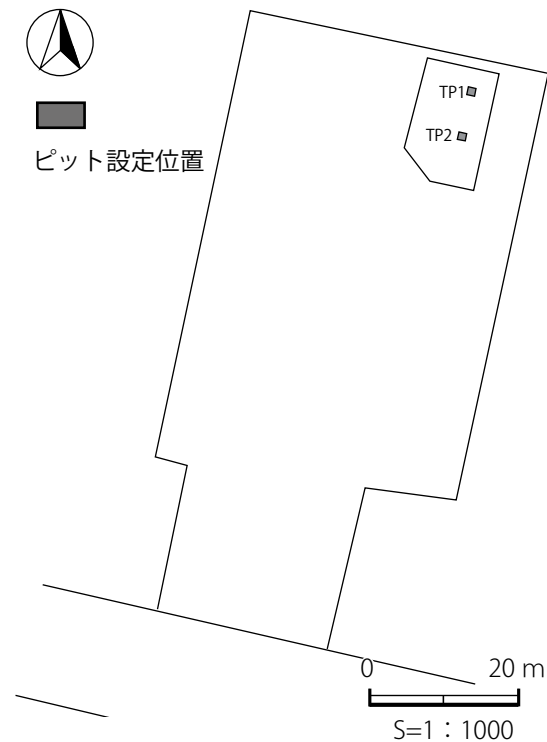
対象地は「斎藤館跡」の名の通り中世の館跡が存在するとされる。しかし、今回の調査では遺跡の存在を確認できる遺構・遺物は確認できなかった。



第15図 斎藤館跡試掘調査地



第16図 斎藤館跡試掘坑柱状図



第17図 斎藤館跡試掘ピット設定図



斎藤館跡 試掘坑 TP1 (北より)



斎藤館跡 試掘坑 TP2 (北より)

3 沢田遺跡 (1)

- (1) 調査日 平成31年3月26日
- (2) 調査場所 南陽市若狭郷屋字大下
調査対象地 (工事) 面積 3,807㎡
- (3) 調査原因 民間開発 (93条)
- (4) 調査方法及び内容

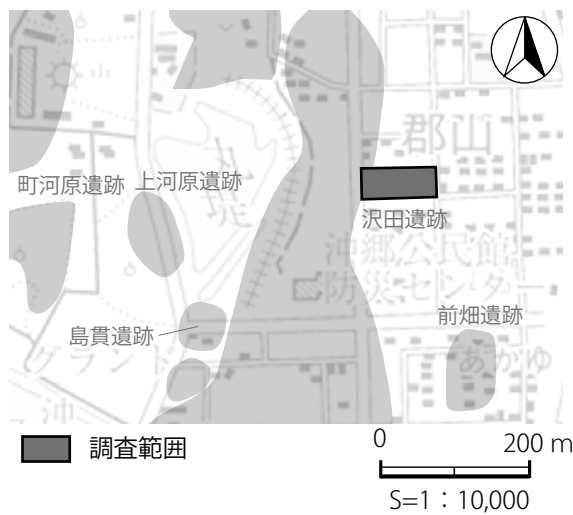
当該地は、沢田遺跡にかかることから試掘調査を行うものとした。幅2m×長さ10mの試掘溝5ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

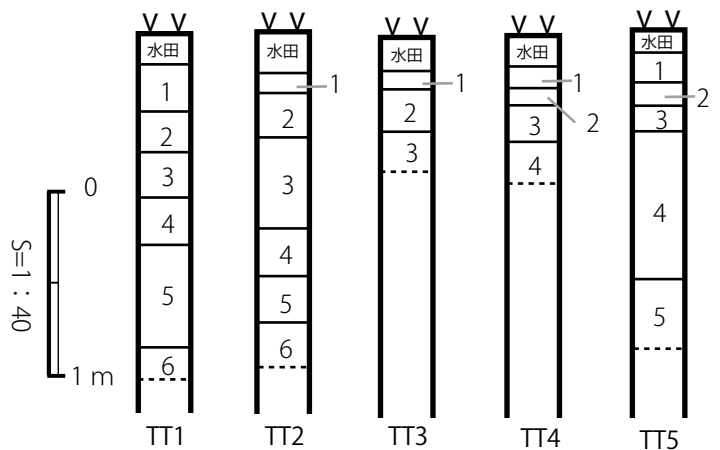
遺構は遺跡範囲内のTT1で遺構はピット2ヶ所を確認した。遺物は土師器片が少量出土した。

(6) 考察

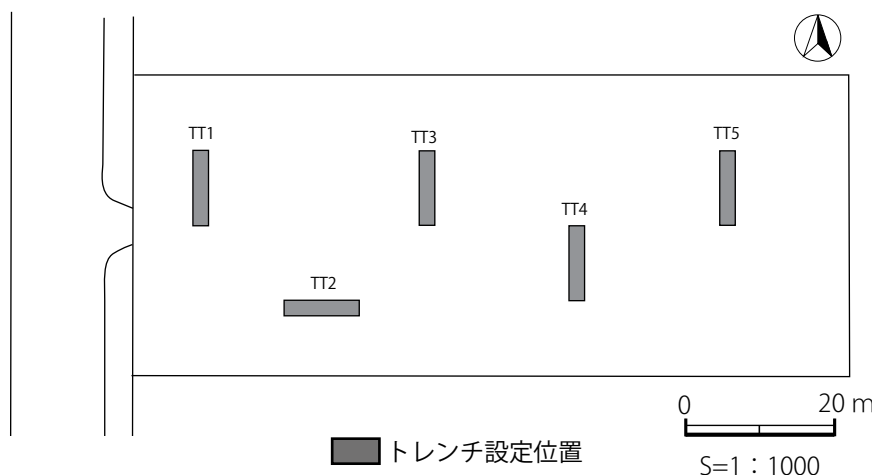
遺跡範囲については修正を要しない。



第18図 沢田遺跡試掘調査地



第19図 沢田遺跡試掘坑柱状図



第20図 沢田遺跡試掘トレンチ設定図

- TP1
 - 1. 暗灰褐色粘土
 - 2. 暗褐色シルト粘土
 - 3. 褐色粘土
 - 4. 灰色粘土
 - 5. 暗灰色砂質粘土
 - 6. 暗灰色粘土
- TP2
 - 1. 暗灰色粘土
 - 2. 灰褐色粘土
 - 3. 暗灰褐色粘土
 - 4. 暗灰色砂質粘土
 - 5. 灰色粘土
 - 6. 暗灰色粘土 (黒色)
- TP3
 - 1. 暗灰色粘土
 - 2. 灰褐色粘土
 - 3. 暗灰色褐色粘土
- TP4
 - 1. 灰色粘土
 - 2. 暗灰色粘土
 - 3. 褐色粘土
 - 4. 暗灰褐色粘土
- TP5
 - 1. 灰色土
 - 2. 暗灰色粘土
 - 3. 褐色粘土
 - 4. 灰褐色粘土
 - 5. 青灰色砂質粘土



沢田遺跡 試掘溝 TT1 (北より)



沢田遺跡 試掘溝 TT2 (東より)



沢田遺跡 試掘溝 TT3 (南より)



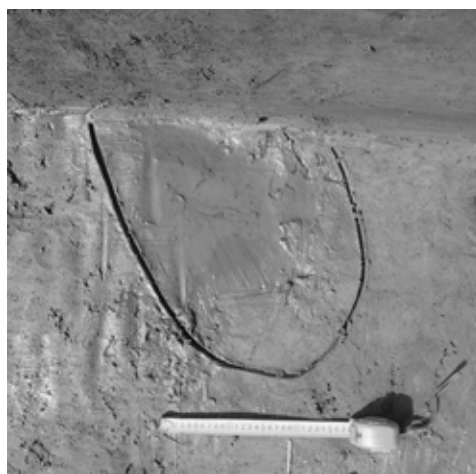
沢田遺跡 試掘溝 TT4 (南より)



沢田遺跡 試掘溝 TT5 (南より)



沢田遺跡 試掘溝 TT4 (南東より)



沢田遺跡 TT1のSP1 (東より)

4 島貫字上西原

- (1) 調査日 平成31年4月3日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字上西原 610-6
調査対象地（工事）面積 823.78㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

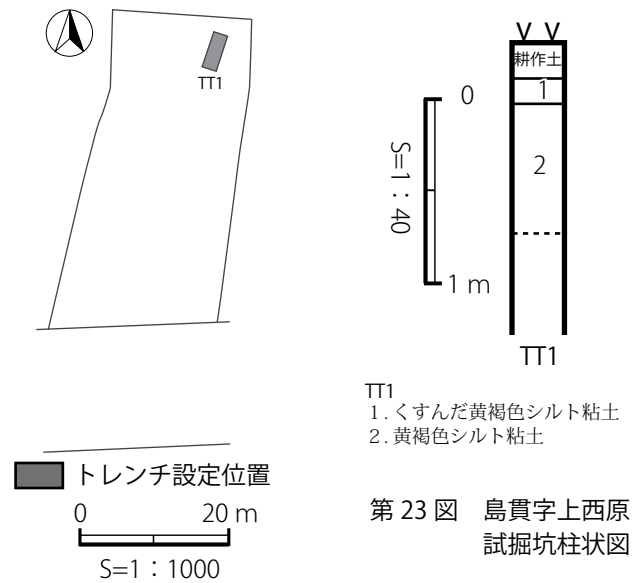
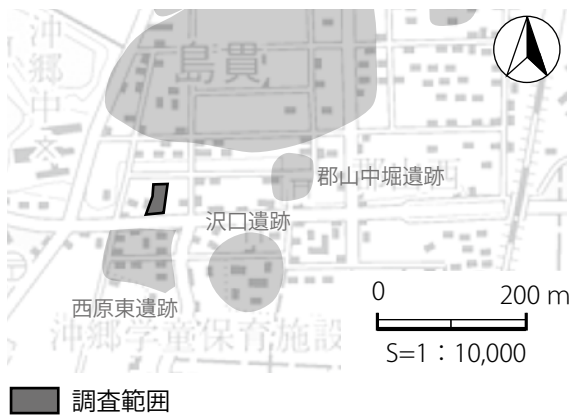
調査対象範囲について、幅2m×長さ5mの試掘溝1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

遺物は土師器片が出土した。遺構は確認されなかった。

(6) 考察

遺跡範囲については修正を要しない。



島貫字上西原調査区全景（南東より）



島貫字上西原トレンチ断面（南より）



島貫字上西原調査トレンチ（北より）

5 小岩沢字萱ヶ作

(1) 調査日 平成31年4月8日

(2) 調査場所 南陽市小岩沢字萱ヶ作

調査対象地（工事）面積 110㎡

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

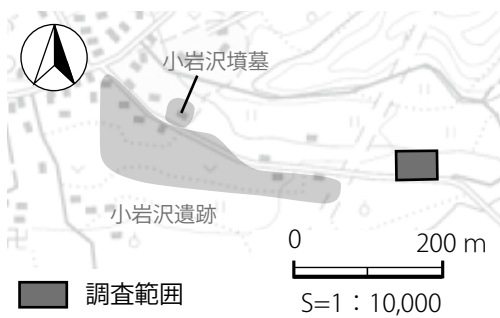
通信等建設計画に伴う調査で、対象地は小岩沢遺跡の隣地である。基礎工事部分に幅 0.9 m×長さ 1.2 m の試掘坑 1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

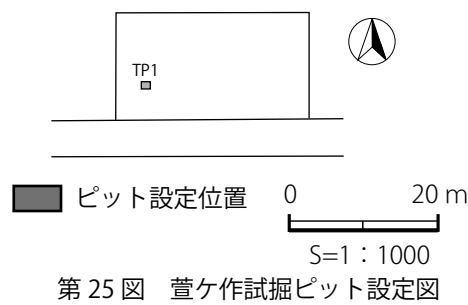
遺構・遺物ともに確認はできなかった。工事範囲内及び周辺も踏査したが遺物は確認されなかった。

(6) 考察

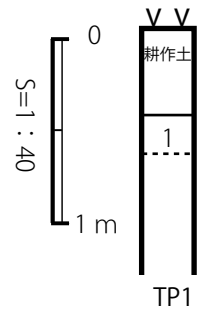
調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第 24 図 萱ヶ作試掘調査地



第 25 図 萱ヶ作試掘ピット設定図



TP1
1. くすんだ明黄褐色砂質粘土



左：調査範囲全景（西より）
右上：TP1 調査状況（東より）
西：TP1 調査状況（北より）



第 26 図 萱ヶ作試掘坑柱状図

6 植木場一遺跡

- (1) 調査日 平成31年4月16日
- (2) 調査場所 南陽市露橋字六兵工裏 158-2、158-3、158-4
調査対象地（工事）面積 675.79㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

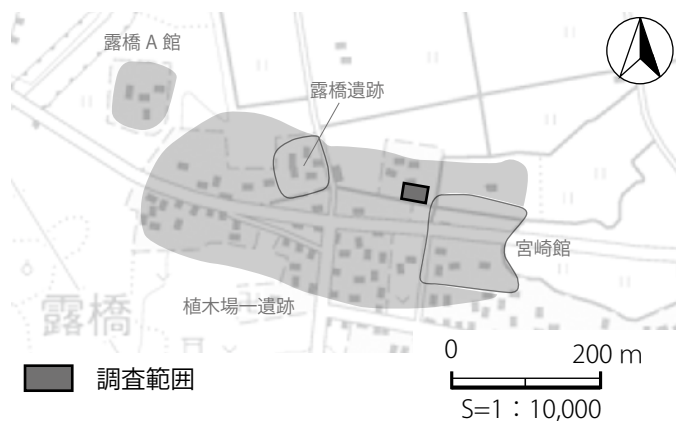
当該地は植木場一遺跡にかかることから試掘調査を行うものとした。調査対象範囲について、幅1m×長さ1mの試掘坑2ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

TP2の第2層に土器粒が見られたものの、遺構は検出されなかった。

(6) 考察

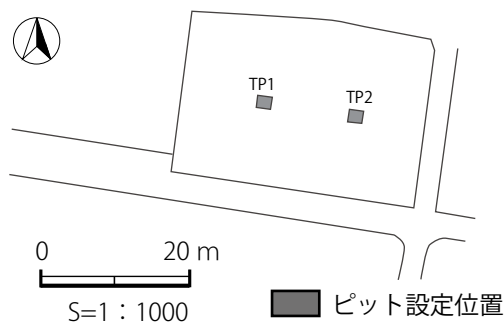
遺跡の範囲については修正を要しない。



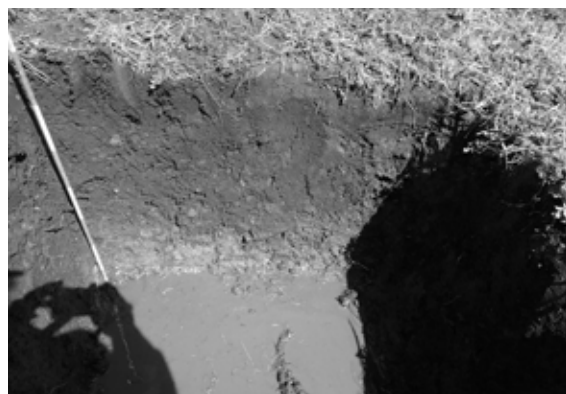
第27図 植木場一遺跡試掘調査地



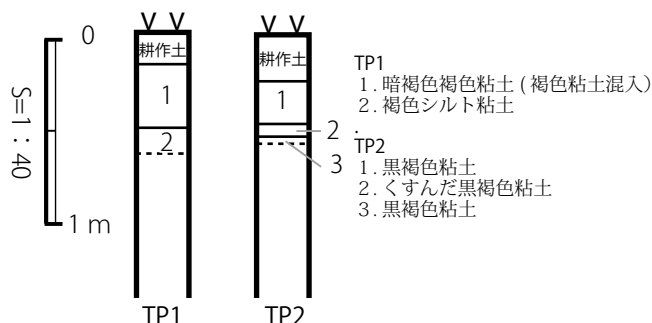
植木場一遺跡全景（南西より）



第28図 植木場一遺跡試掘ピット設定図



植木場一遺跡 TP1 土層断面（南より）



第29図 植木場一遺跡試掘坑柱状図



植木場一遺跡 TP2 土層断面（南より）

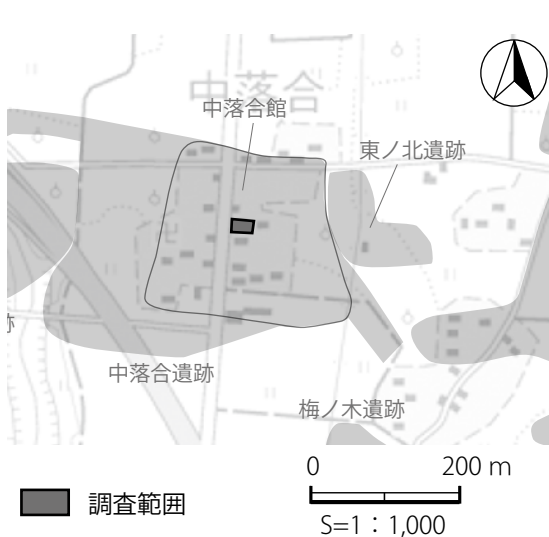
7 中落合遺跡

- (1) 調査日 平成31年4月22日
- (2) 調査場所 南陽市中落合字宅地 661
調査対象地（工事）面積 63.84㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

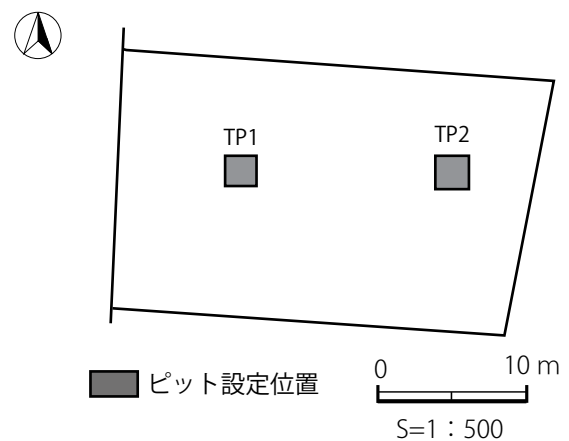
当該地は中落合遺跡にかかることから試掘調査を行うこととした。幅2m×長さ5m、幅2m×長さ2.2mの試掘溝2ヶ所を設定し試掘を実施した。

(5) 結果

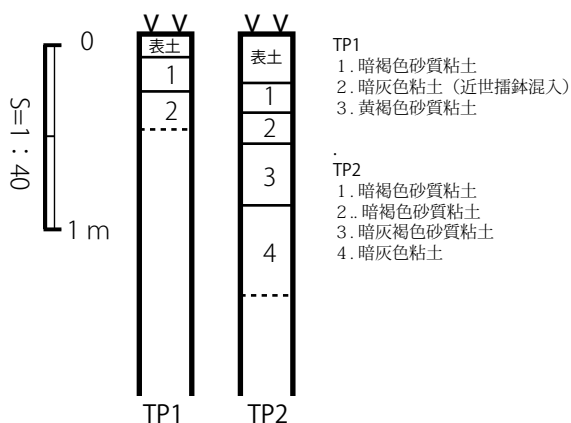
遺物はTP1の第2層から陶器片、第3層から近世の播鉢片が出土した。TP2の第2層から流れ込みと思われる摩滅した土師器片が出土した。遺構はTP1では一部被熱した礫を含む土によって埋められた痕跡と、炭化物を多く含む土層を確認した。TP2ではピット1基と溝跡を検出した。これらの使用時代は不明である。



第30図 中落合遺跡試掘調査地



第31図 中落合遺跡試掘ピット設定図



第32図 中落合遺跡試掘坑柱状図



中落合遺跡全景（西より）



中落合遺跡 TP1 (南より)



中落合遺跡 TP1 土層断面 (南より)



中落合遺跡 TP1 礫状況 (南より)



中落合遺跡 TP2 (南より)



中落合遺跡 TP2 土層断面 (北より)



中落合遺跡 TP1 土層断面 (南より)



中落合遺跡 TP2 土層断面 (南より)



中落合遺跡 TP3 土層断面 (南より)



中落合遺跡 TP4 土層断面 (南より)

8 高梨字西屋敷

(1) 調査日 平成31年4月23日

(2) 調査場所 南陽市高梨字西屋敷 839-4～8、848-3～4、843-3～6
調査対象地（工事）面積 1404.77㎡

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

当該地は、宮之前遺跡の隣地にあたることから、試掘調査を行うものとした。幅1m×長さ1mの試掘坑4ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

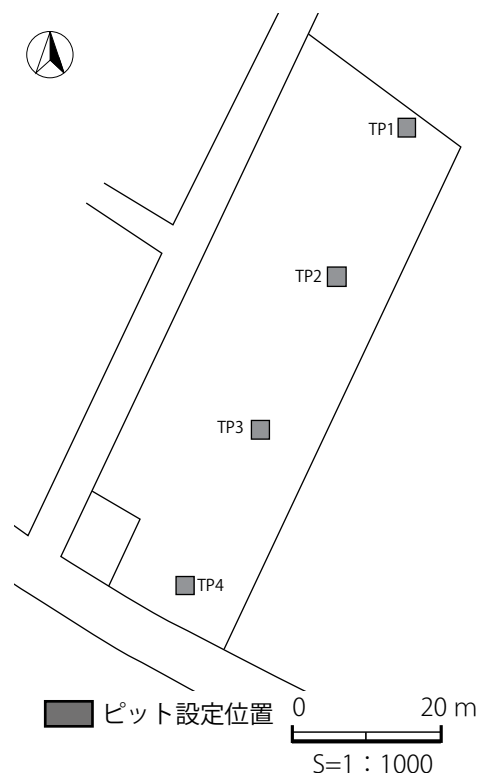
遺物は地表面踏査で土師器と須恵器の小片を数点表採した。TP2の盛土層から須恵器片1点出土した。遺構は確認されなかった。

(6) 考察

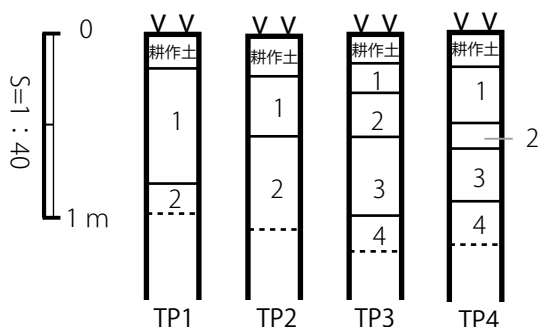
遺跡範囲については修正を要しない。



第33図 高梨字西屋敷試掘調査地



第34図 高梨字西屋敷試掘ピット設定図



第35図 高梨字西屋敷試掘坑柱状図

TP1
1. くすんだ黄褐色粘土
2. 黄褐色粘土

TP2
1. くすんだ黄褐色粘土
(暗褐色粘土混入)
2. 暗灰褐色砂質粘土

TP3
1. くすんだ暗黄褐色砂質粘土
2. 暗褐色砂質粘土
3. くすんだ暗褐色砂質粘土
4. 黄褐色粘土

TP4
1. 黄褐色砂質粘土
2. 暗褐色砂質粘土
3. くすんだ暗灰褐色土
4. 黄褐色粘土



高梨字西屋敷全景（北より）

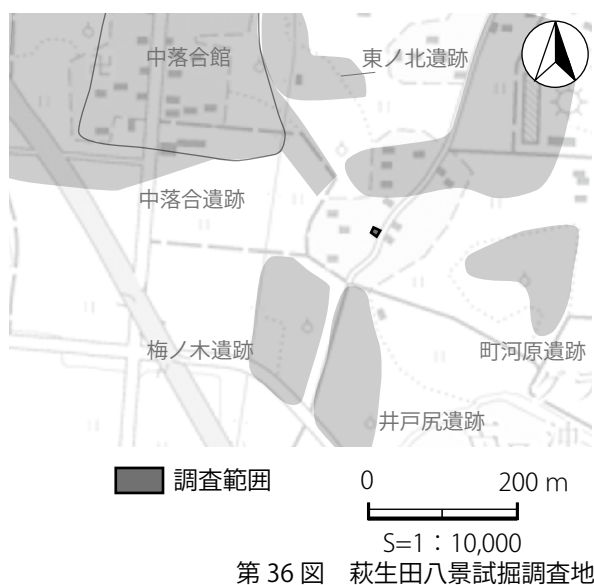
9 萩生田八景（中屋敷）

- (1) 調査日 平成31年4月23日
- (2) 調査場所 南陽市萩生田字八景 931-1
調査対象地（工事）面積 568.13㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は萩生田遺跡の隣地である。幅1m×長さ1mの試掘坑1ヶ所設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

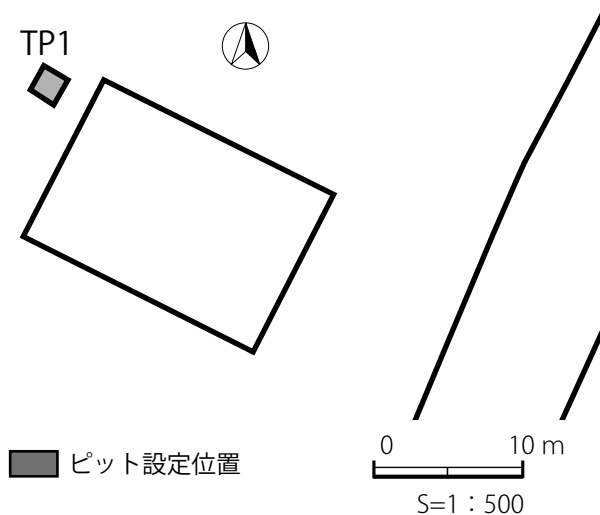
遺構・遺物は確認できなかった。



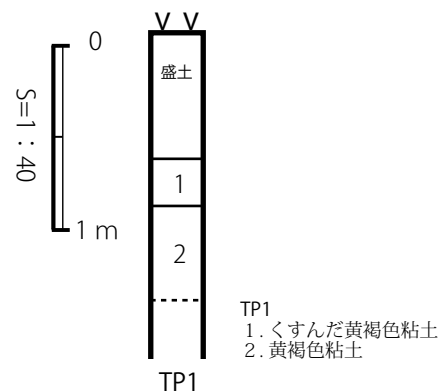
萩生田八景試掘全景



萩生田八景 TP1 土層断面（北より）



第37図 萩生田八景試掘ピット設定図



第38図 萩生田八景試掘坑柱状図

10 矢ノ目館跡

- (1) 調査日 平成31年5月14日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字砂原977-1、2
調査対象地（工事）面積526.6㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

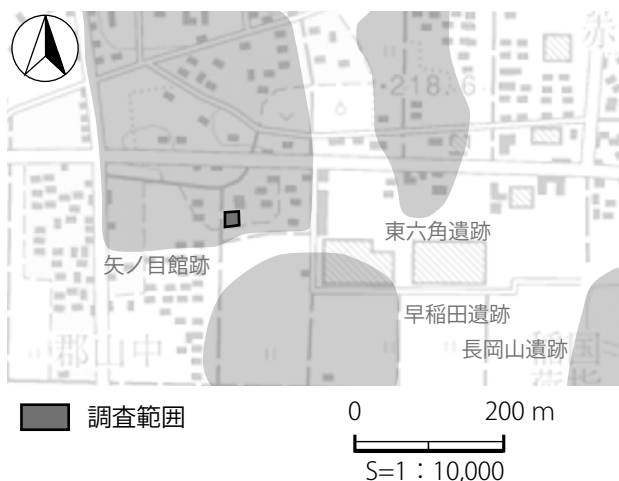
当該地は矢ノ目館跡にかかることから試掘調査を行うものにした。調査対象範囲のうち幅1m×長さ5mの試掘溝1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

敷地内の地表面踏査で摩滅した須恵器坏片1点を表採した。また、TT1のから土器片が出土した。

(6) 考察

当該地では古代の条里関連遺跡が発見されている。また中世末期には伊達家家臣矢ノ目市三郎の居館であったとされているが遺構は検出されなかった。



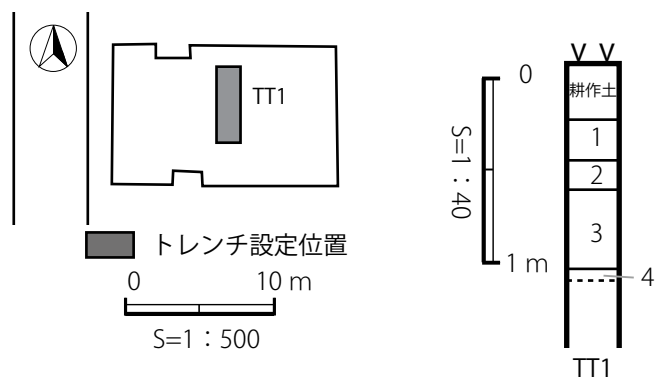
第39図 矢ノ目館跡試掘調査地



矢ノ目館跡全景（南西より）



矢ノ目館跡 TT1 調査状況（南より）



第40図 矢ノ目館跡試掘トレンチ設定図

- TT1
- 1. 暗灰色砂質粘土
 - 2. 黄褐色砂質粘土、土器片混入（暗灰色粘土混入）
 - 3. 明黄褐色粘質シルト
 - 4. 黒色粘土

第41図 矢ノ目館跡試掘溝柱状図



矢ノ目館跡 TT1 土層断面（東より）

11 二色根館跡

- (1) 調査日 令和元年6月12日
- (2) 調査場所 南陽市二色根字南京観音堂 636-6
調査対象地（工事）面積 47.30㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

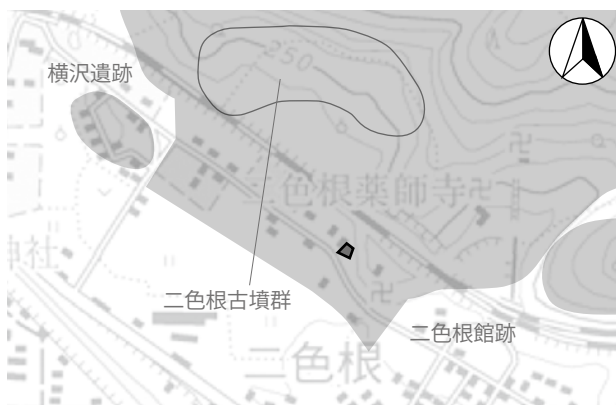
当該地は二色根館跡にかかることから試掘調査を行うものとした。調査地に幅 80cm × 長さ 1 m の試掘坑 2ヶ所を設定して試掘を実施した。

(5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。

(6) 考察

当該地は二色根館跡の範囲内であるが、遺構・遺物は確認できなかった。



調査範囲

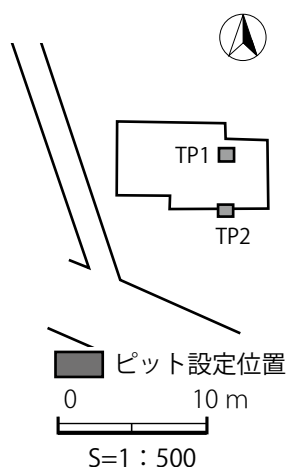
0 200 m

S=1 : 10,000

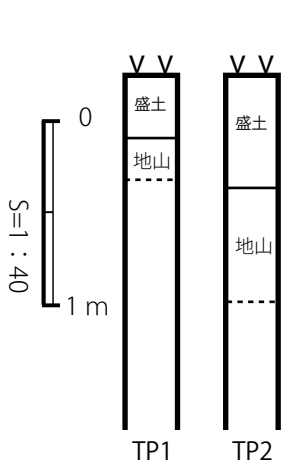
第 42 図 二色根館跡試掘調査地



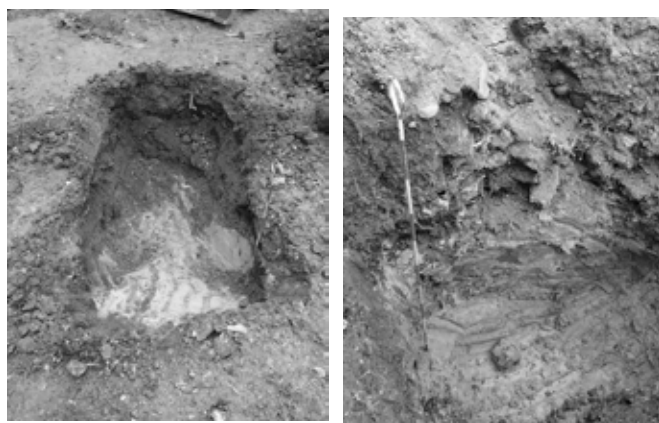
二色根館跡試掘全景



第 43 図 二色根館跡試掘ピット設定図



第 44 図 二色根館跡試掘坑柱状図



左：二色根館跡 TP1 土層断面（西より）
右：二色根館跡 TP2 土層断面（南より）

12 大清水遺跡

(1) 調査日 令和元年6月13日

(2) 調査場所 南陽市宮内 4678-18

調査対象地（工事）面積 326.85㎡

(3) 調査原因 民間開発（93条）

(4) 調査方法及び内容

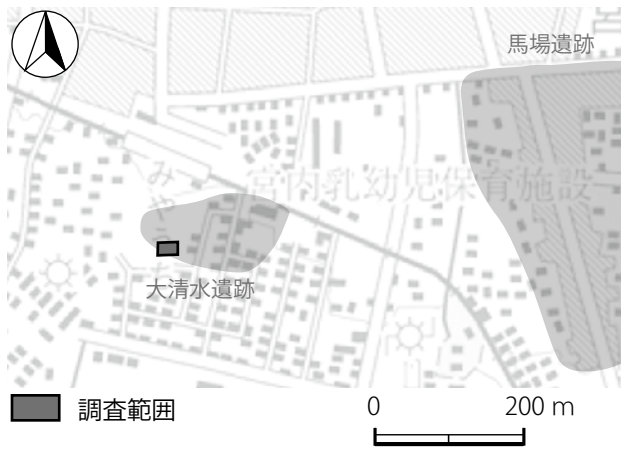
対象地は大清水遺跡範囲一部かかることから試掘調査を行うこととした。工事部分について、幅1m×長1mの試掘坑1ヶ所を設定し調査を実施した。

(5) 結果

遺物は表土層から土器粒が2点出土したのみである。遺構は検出されなかった。周囲の地表面踏査も実施したが遺物の採集はなかった。

(6) 考察

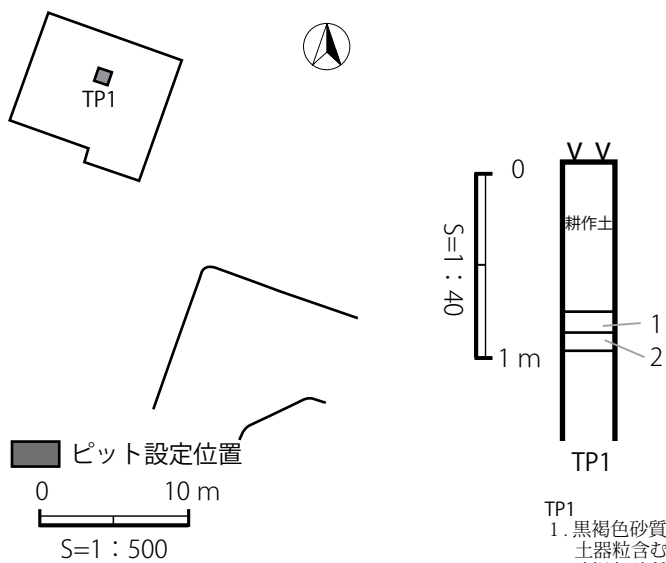
遺跡範囲については修正を要しない。



第45図 大清水遺跡試掘調査地



大清水遺跡全景（南より）



第46図 大清水遺跡試掘ピット設定図



大清水遺跡 TP1 調査状況（南より）

TP1
1. 黒褐色砂質粘土（水分含む）
土器粒含む
2. 暗褐色砂質粘土（水分含む）

第47図 大清水遺跡試掘坑柱状図

13 宮内字清水二

- (1) 調査日 令和元年6月18日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字清水二 2243
調査対象地（工事）面積 234.71㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

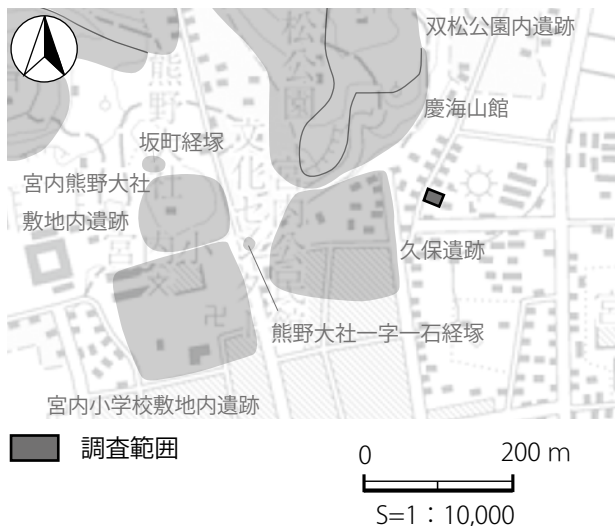
工事部分について、幅1m×長1mの試掘坑2ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

寛永通宝が1点出土したものの、遺構は確認されなかった。

(6) 考察

近世以降の造成と思われる。



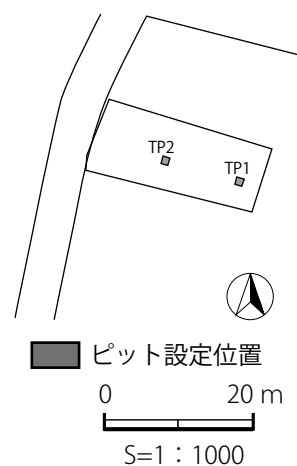
第48図 宮内字清水二試掘調査地



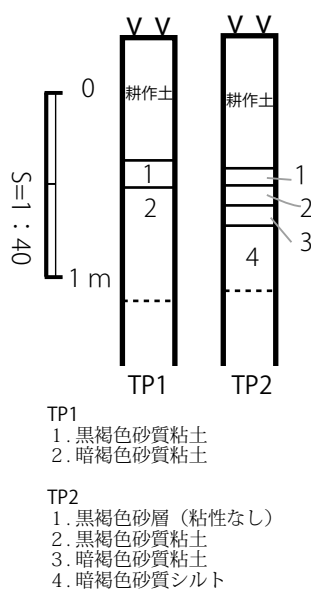
宮内字清水二全景（西より）



宮内字清水二 TP1 土層断面（西より）



第49図 宮内字清水二
試掘ピット設定図



第50図 宮内字清水二
試掘坑柱状図



宮内字清水二 TP2 土層断面（西より）

14 二色根字山崎

- (1) 調査日 令和元年7月4日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字山崎 258-4
調査対象地（工事）面積 314㎡

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

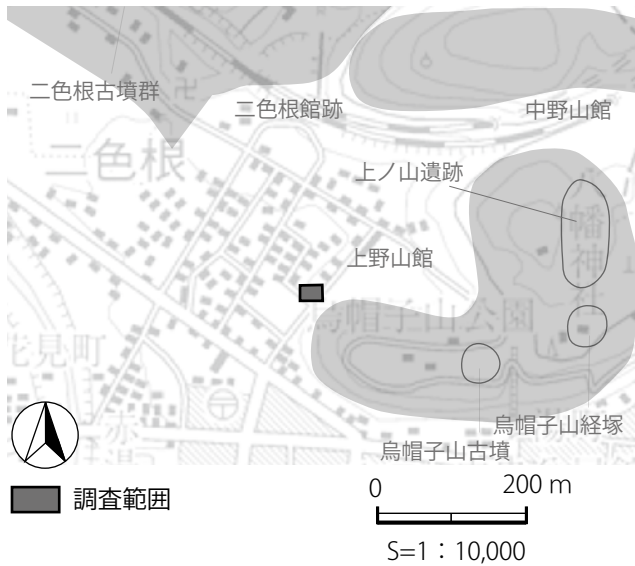
対象地に幅1m×長2mの試掘溝1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

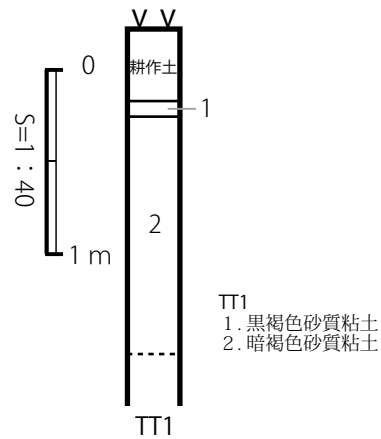
遺構・遺物は確認されなかった。

(6) 考察

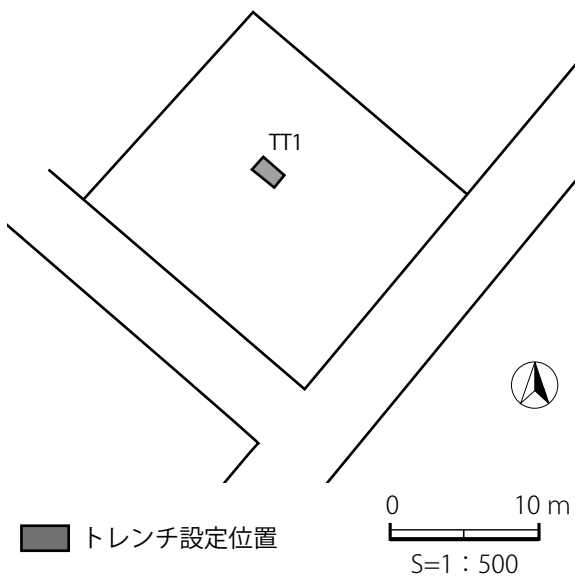
調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第51図 二色根字山崎試掘調査地



第53図 二色根字山崎試掘溝柱状図



第52図 二色根字山崎試掘トレンチ設定図



二色根字山崎 TT1 調査状況（西より）

15 観音堂遺跡

- (1) 調査日 令和元年8月29日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字関口247-2
調査対象地(工事)面積250㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

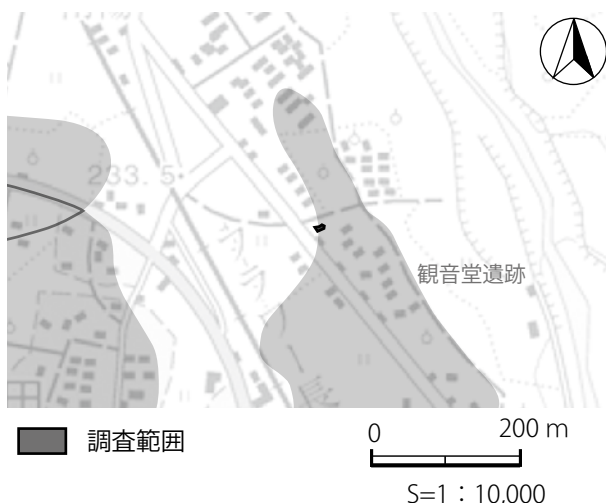
対象地は観音堂遺跡にかかることから試掘調査を行うこととした。調査対象範囲250㎡について、幅1m×長さ1mの試掘坑3ヶ所を設定し実施した。また周辺踏査を行った。

(5) 結果

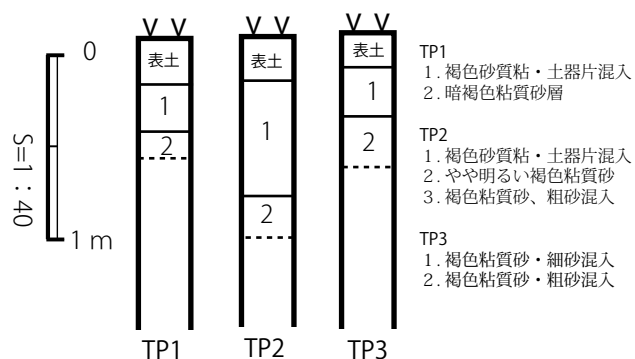
遺物はTP1から土師器片・須恵器片等が数点出土したが、TP2からは出土しなかった。遺構は両調査坑から検出されなかった。遺跡範囲内で周辺踏査を行ったところ調査地の北側で遺物の散布を確認した。

(6) 考察

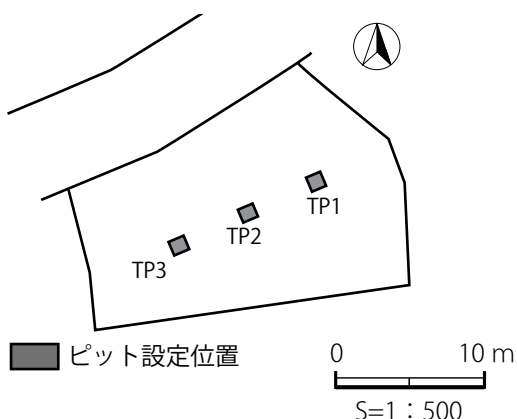
遺構内出土の遺物がなかったことから、遺跡範囲については修正を要しないと思われる。



第54図 観音堂遺跡試掘調査地



第56図 観音堂遺跡試掘坑柱状図



第55図 観音堂遺跡試掘ピット設定図



観音堂遺跡 TP1 調査状況(西より)

16 長岡山東遺跡

- (1) 調査日 令和元年9月19日
- (2) 調査場所 南陽市長岡字西田中 1424-1、1413-1
調査対象地（工事）面積 1,695㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

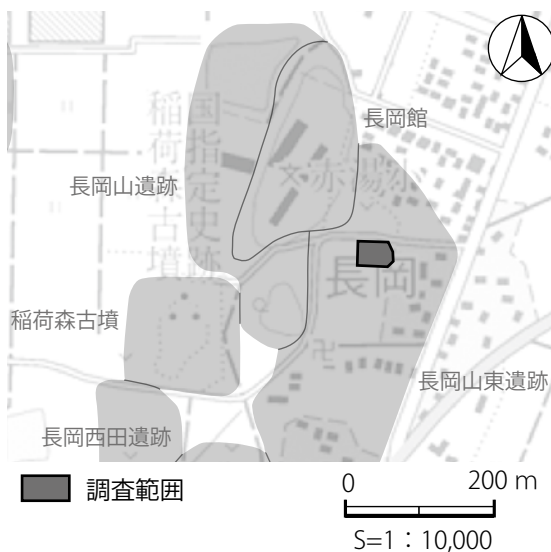
調査対象範囲について、幅 1 m×長さ 2 mの試掘溝 2ヶ所を設定し、また、対象地内の円形マウンドに十字試掘溝（TT1～TT3）を設定し幅 1.5 m×長さ 13 mの試掘溝 3ヶ所と試掘を実施した。

(5) 結 果

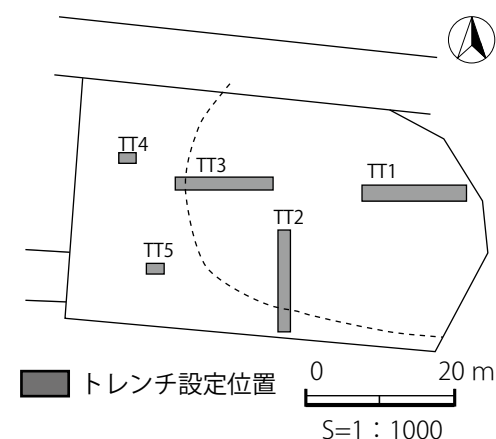
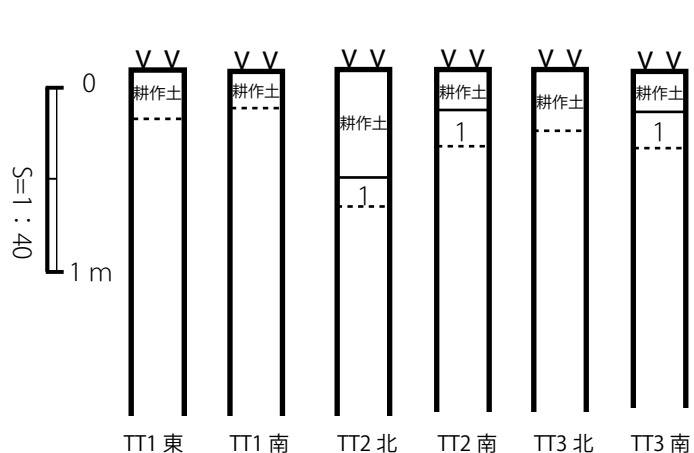
調査地は長岡山丘陵の東側にあたり、現況は耕作放棄地（元果樹園）である。遺物は、表土および試掘溝から須恵器片、土師器片、須恵器片、石器が出土したが、いずれも攪乱層からの出土したものと考えられる。遺構は、確認されなかった。

(6) 考 察

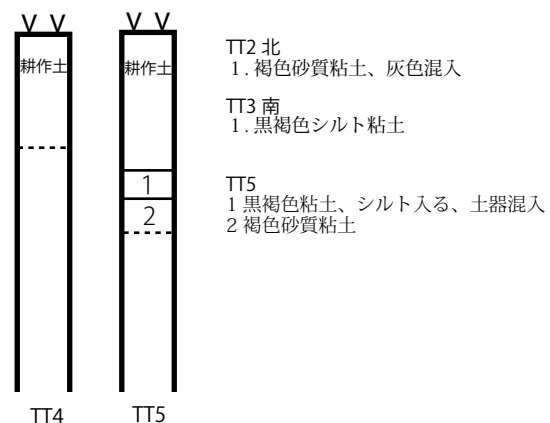
調査区は自然地形で、調査地内には遺跡は無いと考えられる。。



第 57 図 長岡山東遺跡試掘調査地



第 58 図 長岡山東遺跡試掘トレンチ設定図



第 59 図 長岡山東遺跡掘坑柱状図



長岡山東遺跡 TT1 調査状況（西より）



長岡山東遺跡 TT3 調査状況（東より）



長岡山東遺跡 TT2 調査状況（西より）



長岡山東遺跡 TT4 調査状況（西より）



長岡山東遺跡 TT5 調査状況（西より）

17 俎柳字東畑

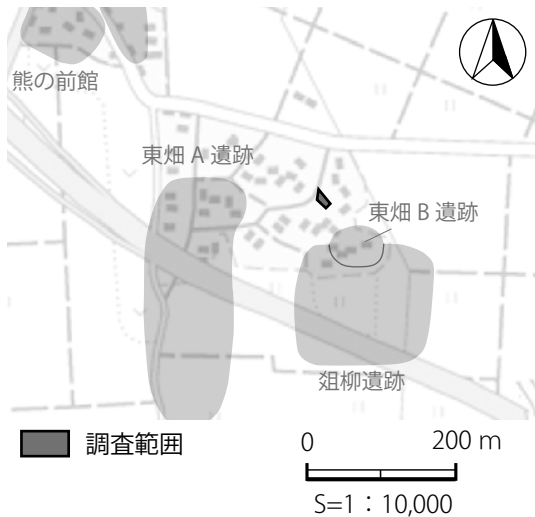
- (1) 調査日 令和元年 10月3日
- (2) 調査場所 南陽市俎柳字東畑 820-2、821-2、821-3
調査対象地（工事）面積 65.21㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は俎柳館跡の隣地である。遺跡分布調査の未実施地であることから、建物の解体工事および土工事の際に立会調査を行った。

- (5) 結果
遺構・遺物ともに検出されなかった。
- (6) 考察
調査地内には遺跡は無いと考えられる。



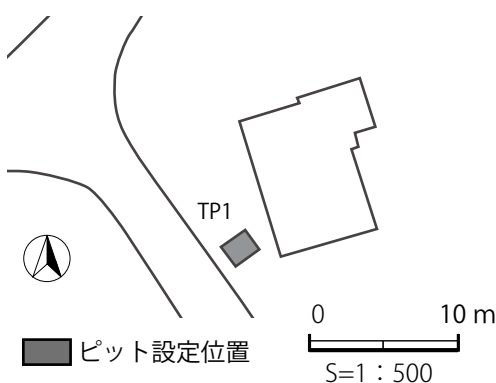
俎柳字東畑全景（南より）



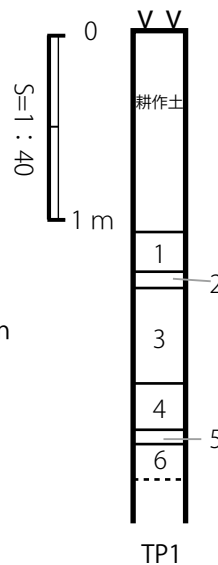
第 60 図 俎柳字東畑試掘調査地



俎柳字東畑 TP1 調査状況（南より）



第 61 図 俎柳字東畑試掘
ピット設定図



俎柳字東畑 TP1 調査状況（東より）

- TT1
1. 暗灰色粘土
 2. 緑灰色粘土（盤土）
 3. 暗緑灰色粘土
 4. 褐灰色砂質粘土
 5. 位褐灰色粘土
 6. 褐灰色粘質砂土

第 62 図 俎柳字東畑試掘坑状図

18 郡山字荒田

- (1) 調査日 令和元年 10月 16日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字荒田 1054-10 他
調査対象地（工事）面積 421.08㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、登録遺跡範囲外だが矢ノ目館跡の近隣であることから試掘調査を行うこととした。調査対象範囲について幅 1.5 m×長さ 10 mの試掘溝3ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

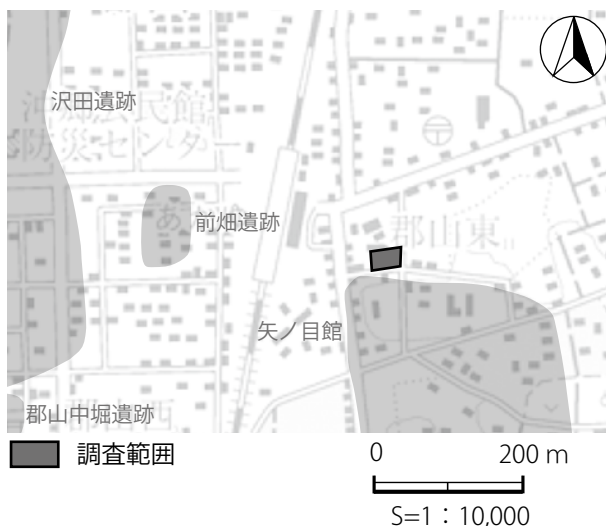
遺構・遺物は検出されなかった。周辺踏査では周知の遺跡範囲内で遺物の散布を確認した。

(6) 考察

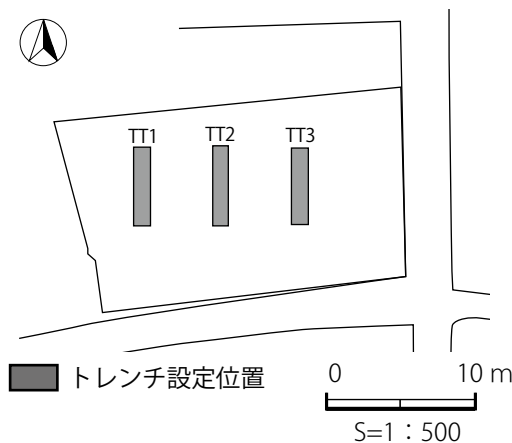
遺物・遺構はともに検出されなかった。



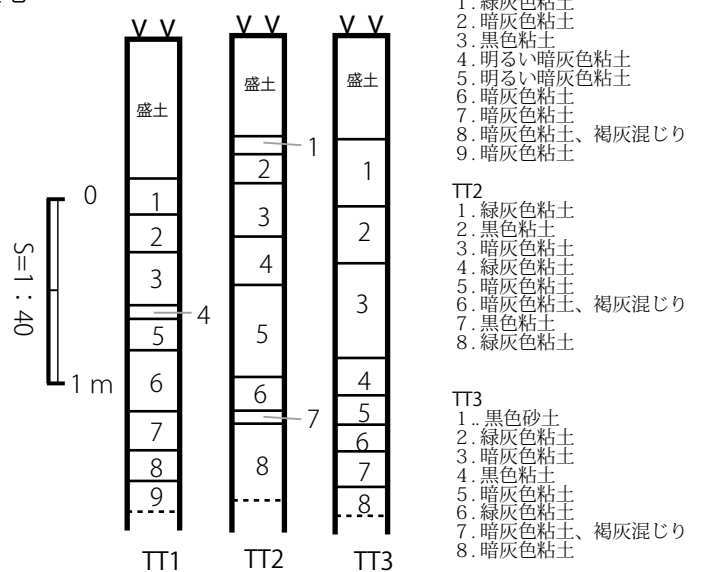
組郡山字荒田全景（南より）



第 63 図 郡山字荒田試掘調査地



第 64 図 郡山字荒田試掘トレンチ設定図



第 65 図 郡山字荒田試掘坑柱状図

19 二色根字的場

(1) 調査日 令和元年 10 月 23 日～24 日

(2) 調査場所 南陽市二色根字的場 497、497-1、499-4、字鍛冶屋敷 501-1
調査対象地（工事）面積 5149m²

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

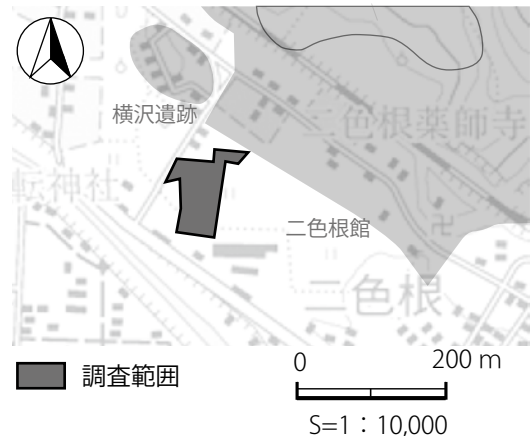
対象地は、横沢遺跡の隣地で遺跡分布調査の未実施地であることから、試掘調査を行うものとした。調査対象範囲に幅 1 m×長さ 1 m の試掘坑 16ヶ所を、幅 1 m×長さ 2 m の試掘坑 1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

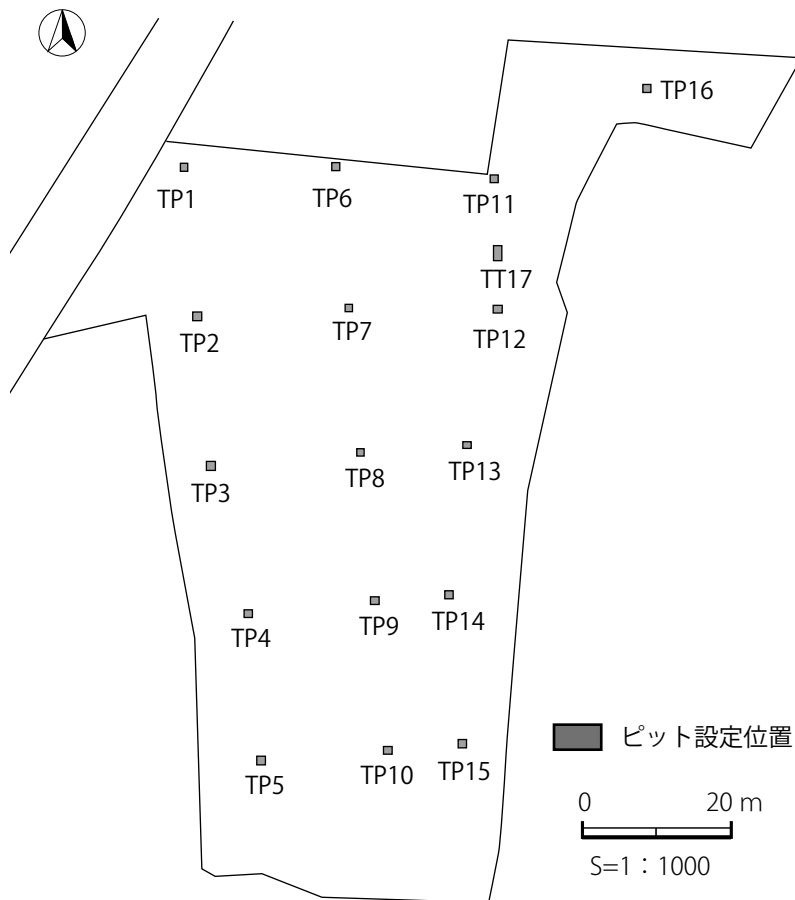
遺構・遺物ともに検出されなかった。

(6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。

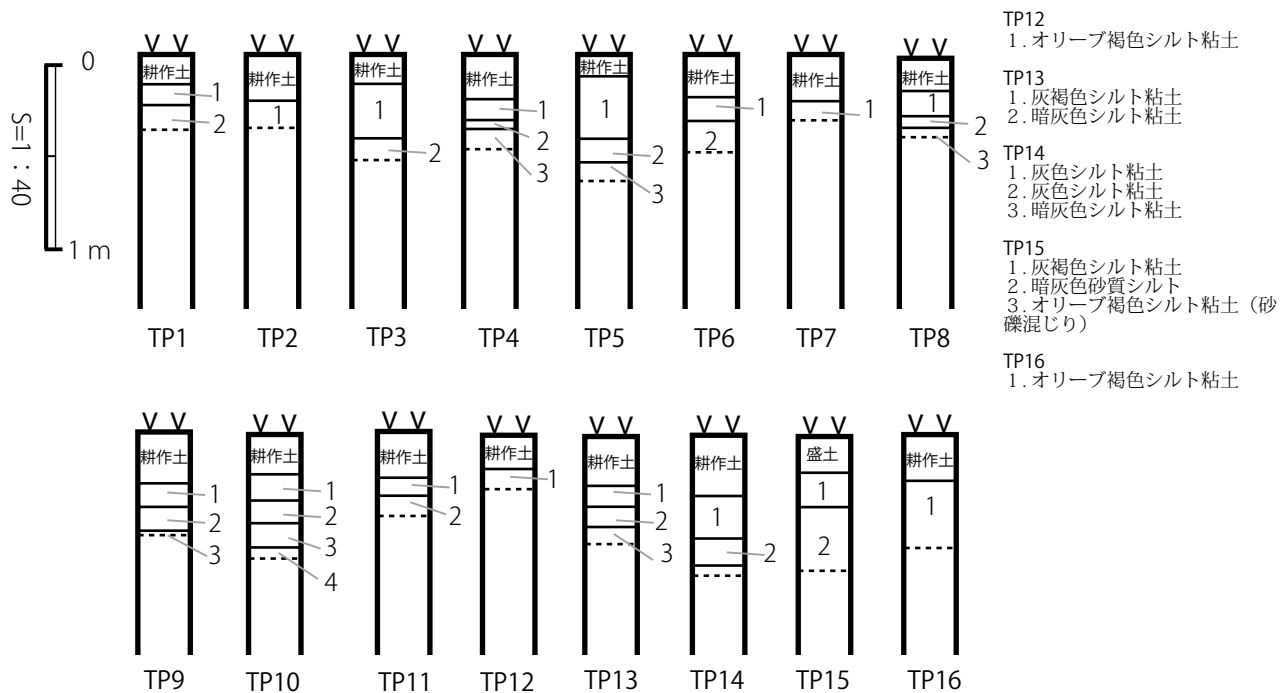


第 66 図 二色根字的場試掘調査地

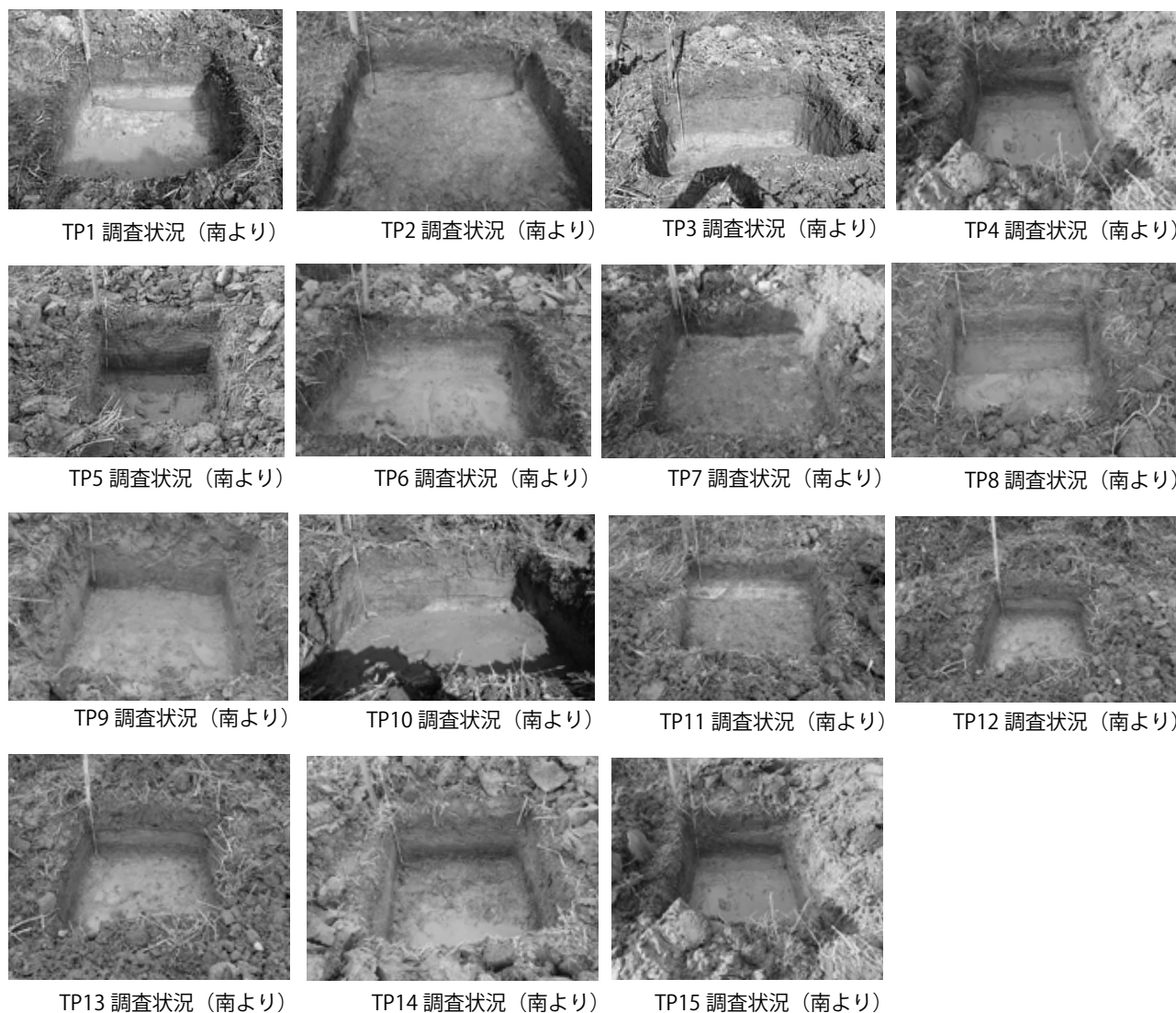


第 67 図 二色根字的場試掘ピット設定図

- TP1
1. 暗灰褐色シルト粘土、かたくしまる
2. オリーブ褐色シルト粘土（地山）
- TP2
1. オリーブ褐色シルト粘土
- TP3
1. 暗灰褐色シルト粘土、やわらかい
2. 暗灰褐色シルト粘土、かたくしまる
3. オリーブ褐色シルト粘土（地山）
- TP4
1. 灰褐色シルト粘土
2. 暗灰色シルト粘土
3. 灰褐色シルト粘土かたくしまる
- TP5
1. 灰褐色シルト粘土
2. 暗灰色シルト粘土
3. オリーブ褐色シルト粘土
- TP6
1. 暗灰褐色シルト粘土、かたくしまる
2. オリーブ褐色シルト粘土（地山）
- TP7
1. オリーブ褐色シルト粘土
- TP8
1. 灰褐色シルト粘土
2. 暗灰色シルト粘土
3. オリーブ褐色砂質シルト
- TP9
1. 暗灰色シルト粘土
2. オリーブ褐色シルト、砂礫混じり
- TP10
1. 灰褐色シルト粘土
2. 灰オリーブシルト粘土
3. 暗灰色シルト粘土
4. オリーブ褐色シルト粘土
- TP11
1. 暗灰褐色シルト粘土、かたくしまる
2. オリーブ褐色シルト粘土（地山）



第 68 図 二色根字の場試掘坑柱状図



20 二色根字大日浦

- (1) 調査日 令和元年 10月 24日
- (2) 調査場所 南陽市二色根字大日浦 413
調査対象地（工事）面積 5㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

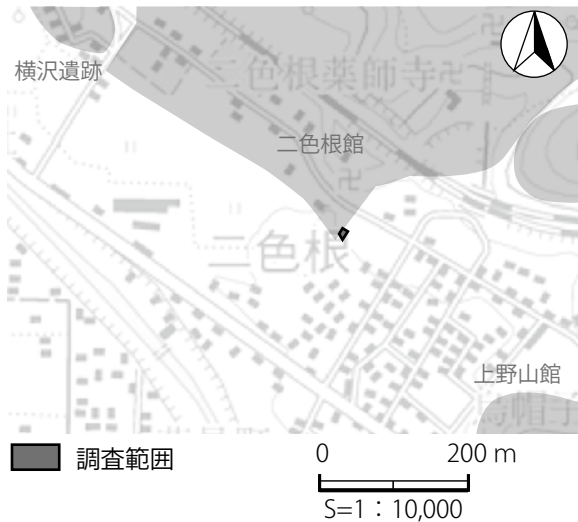
対象地は二色根城館の根小屋東南角に接することから試掘調査を行うものとした。幅 1 m × 長さ 1 m の試掘坑 1ヶ所を設定し調査を、試掘した。

(5) 結 果

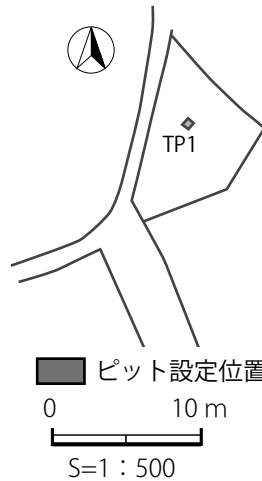
遺構・遺物ともに検出されなかった。

(6) 考 察

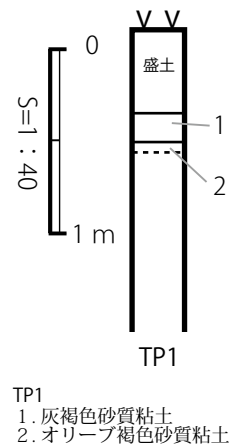
遺跡範囲については修正を要しない。



第 69 図 二色根字大日浦試掘調査地



第 70 図 二色根字大日浦試掘ピット設定図



第 71 図 二色根字大日浦試掘坑柱状図



左：二色根字的場 TP1 調査状況（南より）
右：二色根字的場 TP1 北壁土層断面（南より）

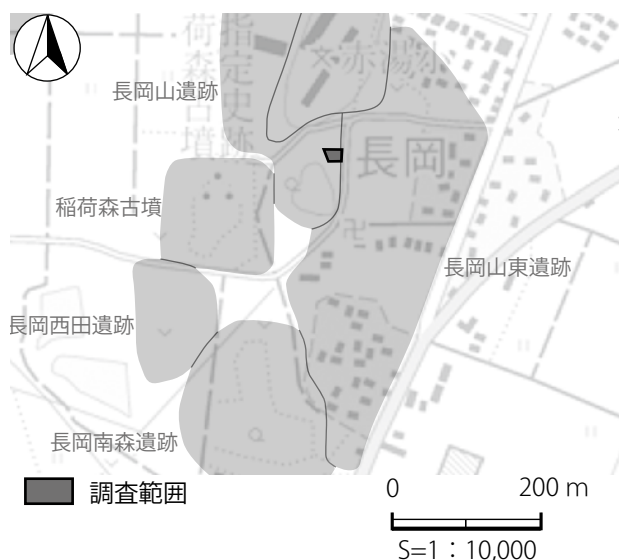
21 長岡山遺跡

- (1) 調査日 令和元年 11月5日
- (2) 調査場所 南陽市長岡字西田中 1433-1
調査対象地（工事）面積 168.69㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

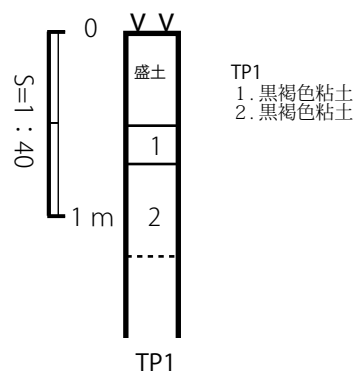
対象地は、長岡山遺跡にかかることから試掘調査を行うものとした。9月の宅地造成時に立会調査を、11月の住宅工事時に幅1m×長さ1mの試掘坑1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

(5) 結果

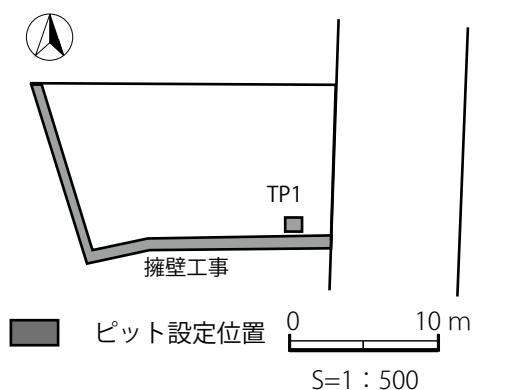
遺構は検出されなかった。立会調査では耕作土から土器片が出土した。



第72図 長岡山遺跡試掘調査地



第74図 長岡山遺跡試掘坑柱状図



第73図 長岡山遺跡試掘ピット設定図



長岡山遺跡全景（南より）



長岡山遺跡 TP1 土層断面（南より）

22 三間通字一丁場

- (1) 調査日 令和元年 11 月 14 日
- (2) 調査場所 三間通字一丁場 1065-1 他
調査対象地（工事）面積 3600m²
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

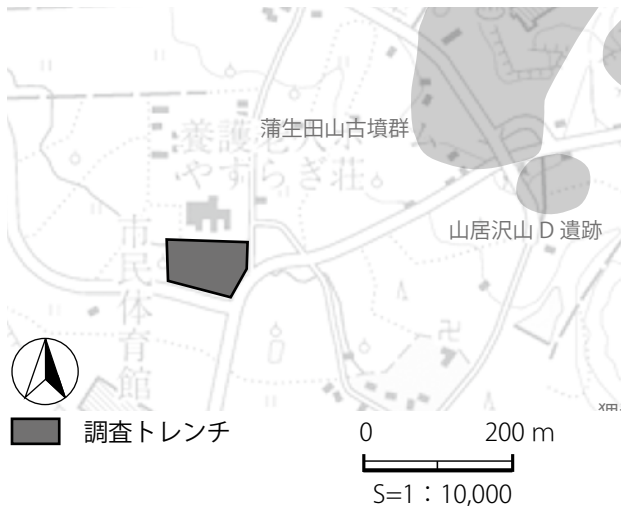
現状は老人介護施設の一部である。試掘調査を行うため現状に合わせ試掘溝を 20m 間隔で幅 1.5 m×長さ 20m を 2ヶ所、14.5 m・4.5 m・8 m を各 1ヶ所設定し、試掘を実施した。

(5) 結 果

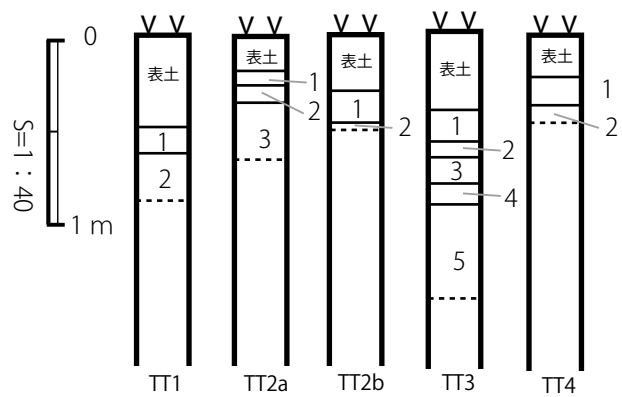
遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第 75 図 三間通字一丁場試掘調査地



第 77 図 三間通字一丁試掘坑柱状図

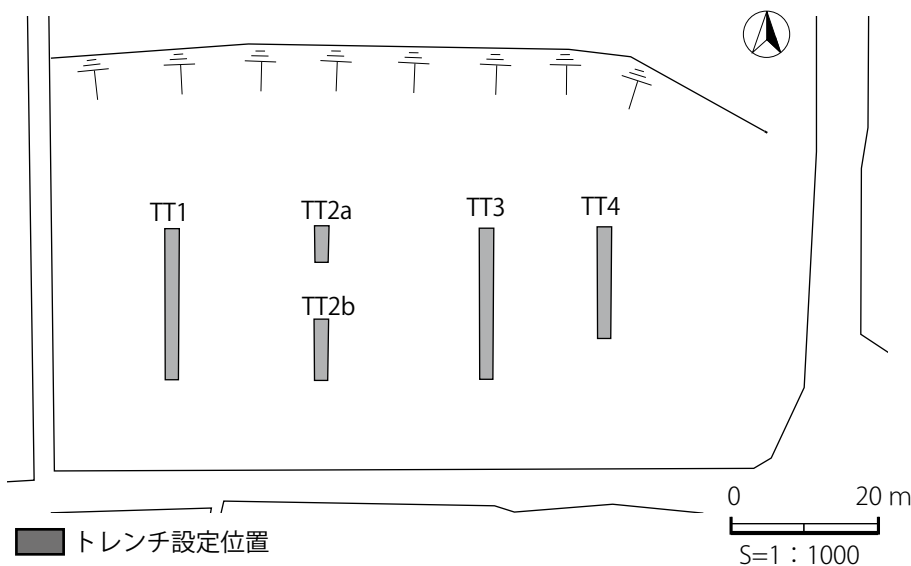
- TT1
 1. 褐灰色粘土
 2. 浅黄褐色粘土

- TT2a
 1. 黄褐色粘土
 2. 浅黄色粘土
 3. 灰白色粘土

- TT2b
 1. 褐灰色粘土
 2. 浅黄色粘土

- TT3
 1. 黑色粘土
 2. 黄褐色粘土
 3. 明黄褐色粘土（灰白入る）
 4. 灰白色砂質粘土
 5. 明青灰色砂質粘土

- TT4
 1. 黑色粘土
 2. 明黄褐色粘土



第 76 図 三間通字一丁場試掘トレンチ設定図



三間通字一丁場崎 TT1 完掘状況（北より）



三間通字一丁場崎 TT2a 完掘状況（北より）



三間通字一丁場崎 TT2b 完掘状況（北より）



三間通字一丁場崎 TT3 完掘状況（北より）



三間通字一丁場崎 TT4 完掘状況（北より）

23 沢田遺跡（2）

(1) 調査日 令和元年11月18日

(2) 調査場所 南陽市島貫字六角 602-7、20
調査対象地（工事）面積 220.99㎡

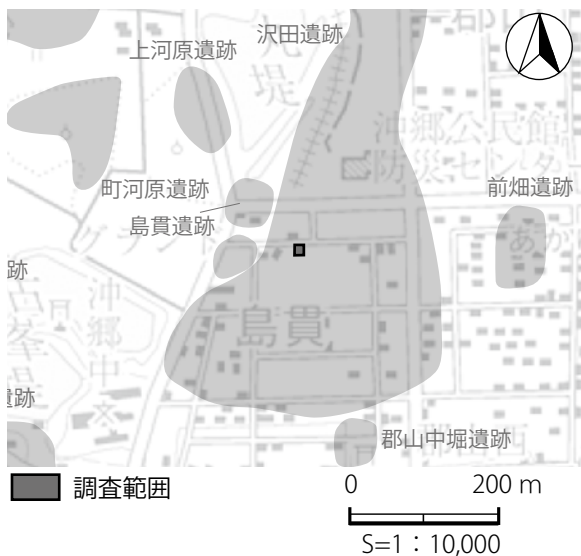
(3) 調査原因 民間開発（93条）

(4) 調査方法及び内容

対象地は沢田遺跡範囲内にあり試掘調査を行うこととした。幅1m×長さ2mの試掘溝1ヶ所を設定し試掘を実施した。

(5) 結果

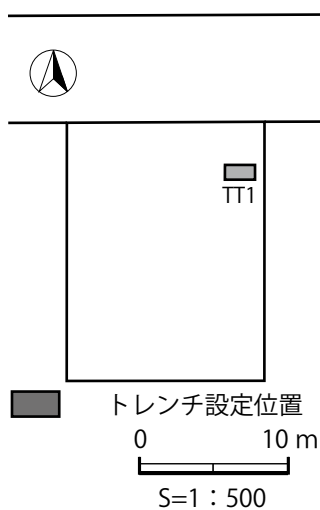
遺構は検出されなかった。遺物は古代の土師器が1点出土した。



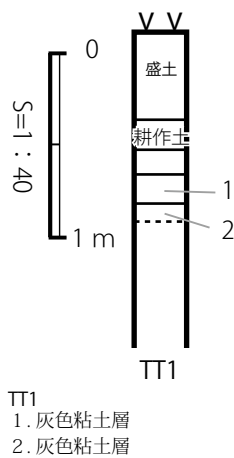
第78図 沢田遺跡（2）試掘調査地



沢田遺跡（2）全景（北西より）



第79図 沢田遺跡（2）
試掘トレンチ設定図



第80図 沢田遺跡（2）
試掘坑柱状図



沢田遺跡（2）TT1 土層断面（西より）

IV 立会調査

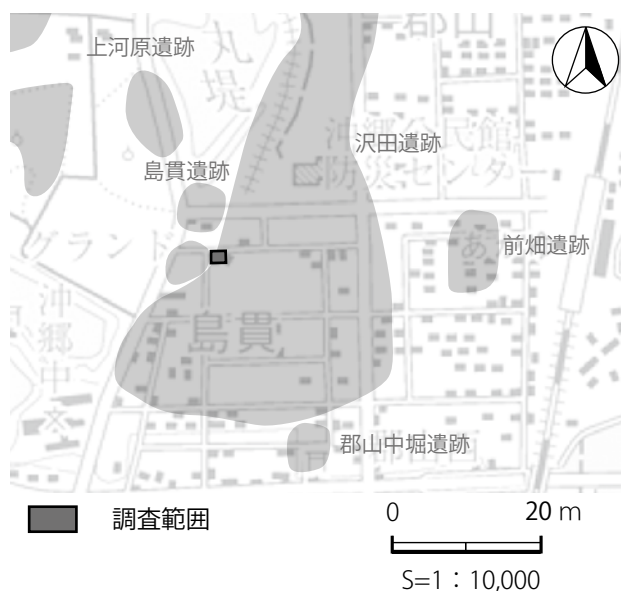
1 沢田遺跡

- (1) 調査日 平成31年2月13日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字六角 602-13
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は沢田遺跡範囲に一部であるため土工事の際に立会いを行った。

(5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。



第81図 沢田遺跡立会調査地



沢田遺跡全景(北西より)



沢田遺跡調査状況(北より)

2 宮内字黒木一

- (1) 調査日 平成31年3月8日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字黒木一 1048-2
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

馬場遺跡の隣地であることから、土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結 果

遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



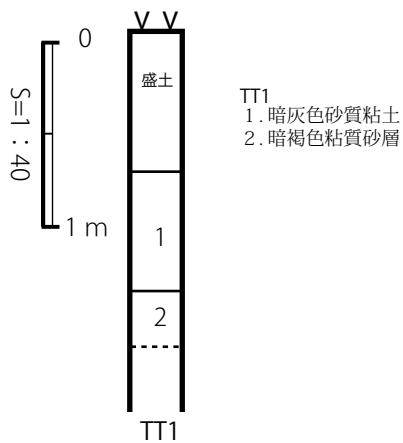
第 82 図 宮内字黒木一立会調査地



内字黒木一全景（北より）



内字黒木一調査状況（東より）



第 83 図 宮内字黒木一立会調査柱状図

3 萩生田字宮之内

- (1) 調査日 平成31年4月3日
- (2) 調査場所 南陽市萩生田字宮之内 504-2
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は西畑遺跡の隣地であるため、解体工事の際に立会いを行い、土層及び遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

解体工事の際の排土に遺物は含まれていなかった。工事地内の土は表土 50cm 下に旧建物の基礎とみられる礫層がある。また、周辺を踏査したところ、遺跡の範囲内に須恵器が見つかった。

(6) 考察

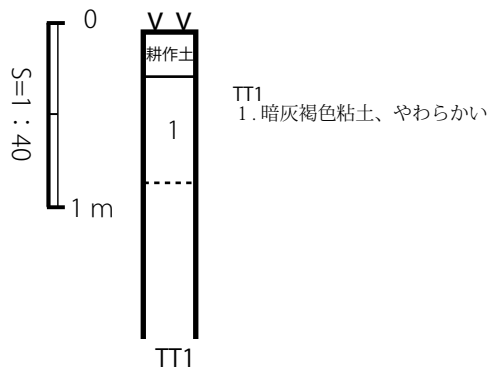
遺跡の範囲については修正を要しない。



第 84 図 萩生田字宮之内立会調査地



萩生田字宮之内全景（北より）



第 85 図 萩生田字宮之内立会調査柱状図



萩生田字宮之内 TT1 完掘状況（南より）

4 新田字銀山

- (1) 調査日 平成31年4月8日
- (2) 調査場所 南陽市新田字銀山 23-1、27-1
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

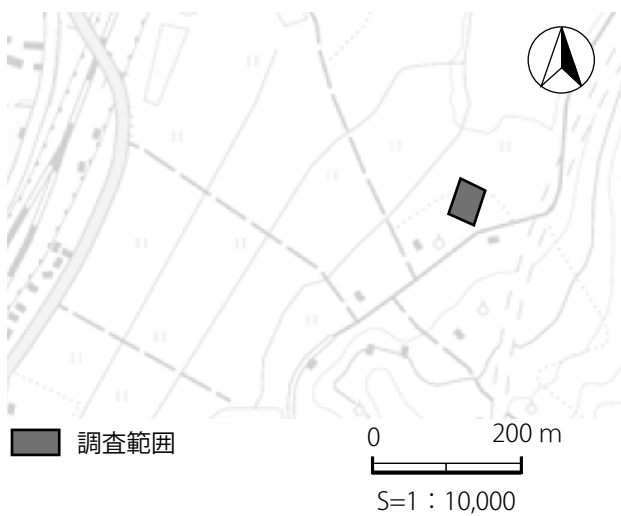
遺跡分布調査未実施であるため立会いを行った。

- (5) 結果

削平によるものか、遺物は出土・遺構は確認されなかった。

- (6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第 86 図 新田字銀山立会調査地



新田字銀山全景（東より）



新田字銀山全景（北より）

5 宮内字穴田 (字大清水)

- (1) 調査日 平成31年4月22日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字穴田 4660-21
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

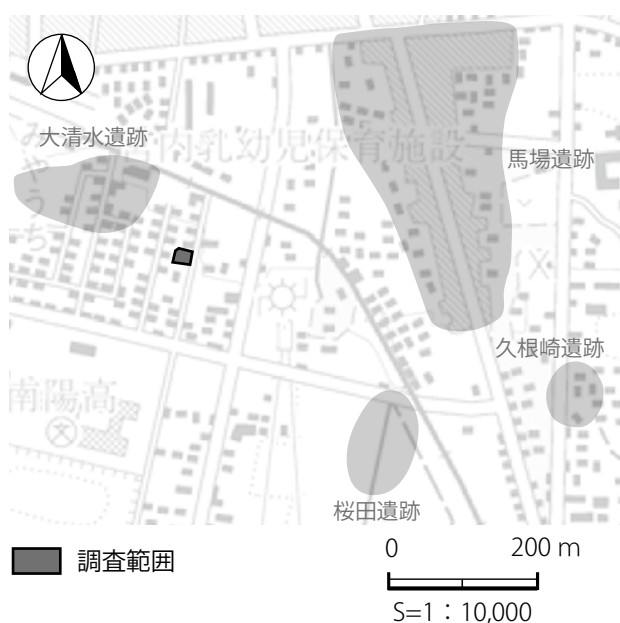
対象地は大清水遺跡の隣地であることから、土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結 果

遺構・遺物は確認されなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第 87 図 宮内字穴田立会調査地



宮内字穴田全景 (南東より)



宮内字穴田 TT1 完掘状況 (東より)

6 三間通字壇之越

- (1) 調査日 令和元年5月16日
- (2) 調査場所 南陽市三間通字壇之越 336
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

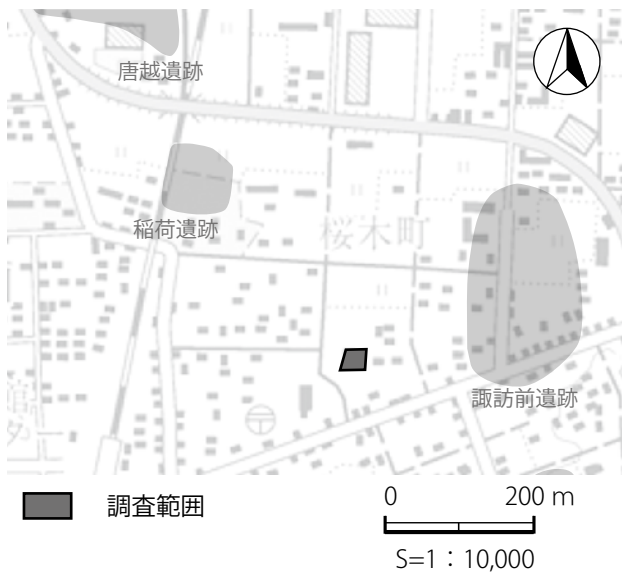
水道工事の際に立会調査を行い、土層及び遺跡の有無を確認する。

- (5) 結果

遺構・遺物は確認できなかった。

- (6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



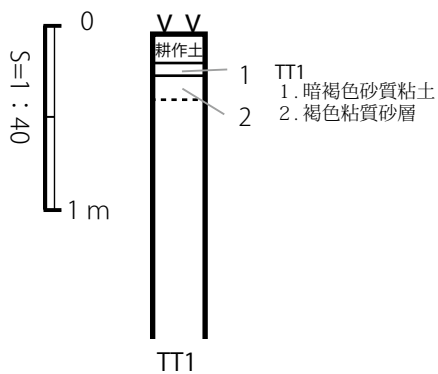
第 88 図 三間通字壇之越立会調査地



三間通字壇之越全景（南東より）



三間通字壇之越作業状況（北より）



第 89 図 三間通字壇之越立会調査柱状図

7 長岡山東遺跡

- (1) 調査日 令和元年7月24日
- (2) 調査場所 南陽市長岡字西田中
- (3) 調査原因 下水道整備(94条)
- (4) 調査方法及び内容

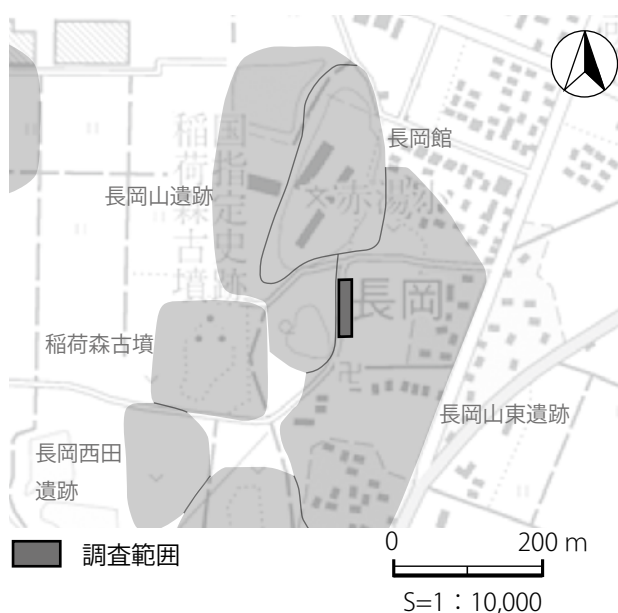
下水道工事の際に立会を行い、土層及び遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

土層の観察と遺物の有無を確認した。遺物・遺構は確認できなかった。

(6) 考察

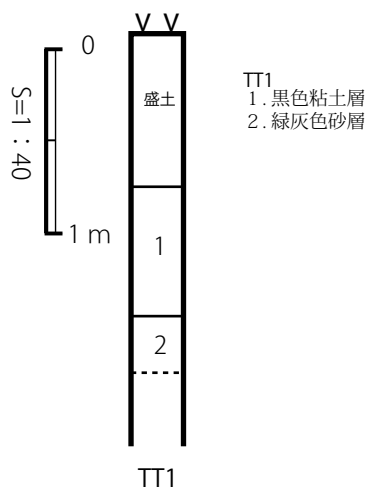
遺跡の範囲については修正を要しない。



第90図 長岡山東遺跡立会調査地



長岡山東遺跡全景(北より)



第91図 長岡山東遺跡立会調査柱状図



長岡山東遺跡作業状況(北より)

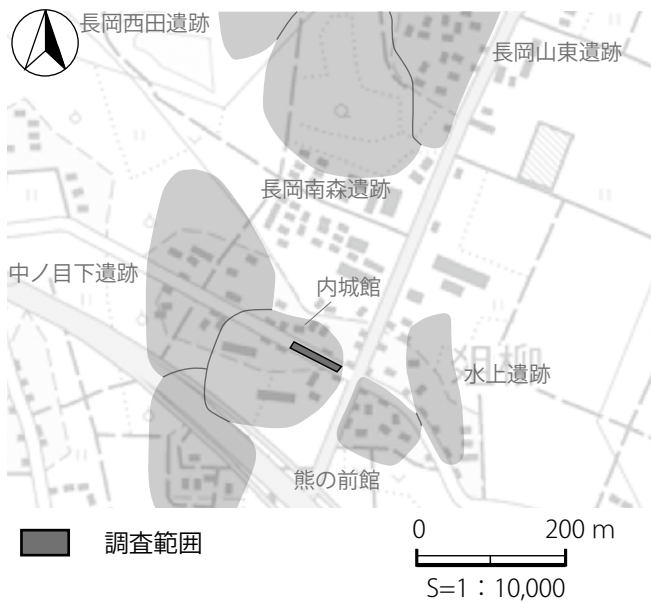
8 俎柳字内城

- (1) 調査日 令和元年8月21日～30日
- (2) 調査場所 南陽市俎柳字内城
- (3) 調査原因 下水道整備(94条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は内城館跡の範囲内であるため、下水道工事の際に立会を行い、土層及び遺跡の有無を確認した。

(5) 結 果

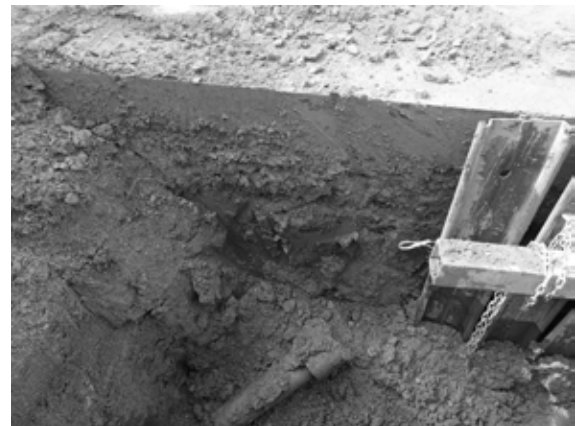
遺構・遺物は確認できなかった。



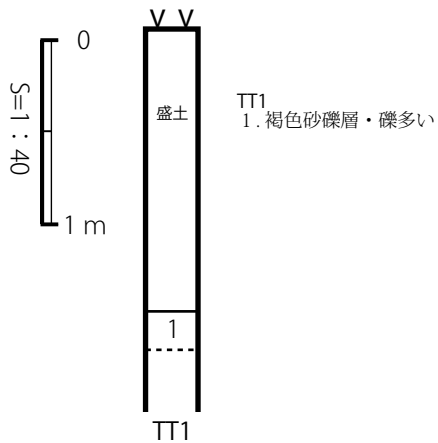
第 92 図 俎柳字内城立会調査地



俎柳字内城全景(西より)



俎柳字内城作業状況(北より)



第 93 図 俎柳字内城立会調査柱状図

9 赤湯字湯尻二

- (1) 調査日 令和元年9月2日
- (2) 調査場所 南陽市赤湯字湯尻二 1267-2
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

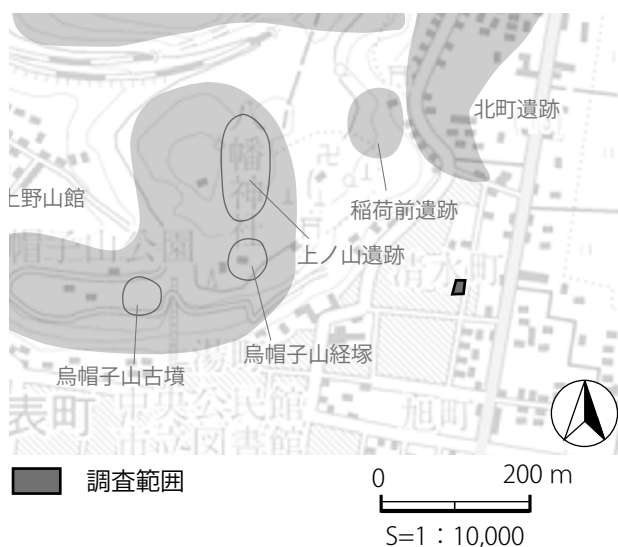
基礎工事、土壌改良工事の際に立会いを行った。

(5) 結果

遺物・遺構は確認できなかった。

(6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



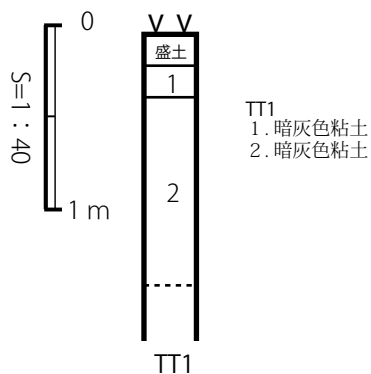
第 94 図 赤湯字湯尻二立会調査地



赤湯字湯尻二全景（南東より）



赤湯字湯尻二作業状況（北より）



第 95 図 赤湯字湯尻二立会調査柱状図

10 俎柳字東畑二

(1) 調査日 令和元年8月30日、9月4日

(2) 調査場所 南陽市俎柳字東畑二 1131

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

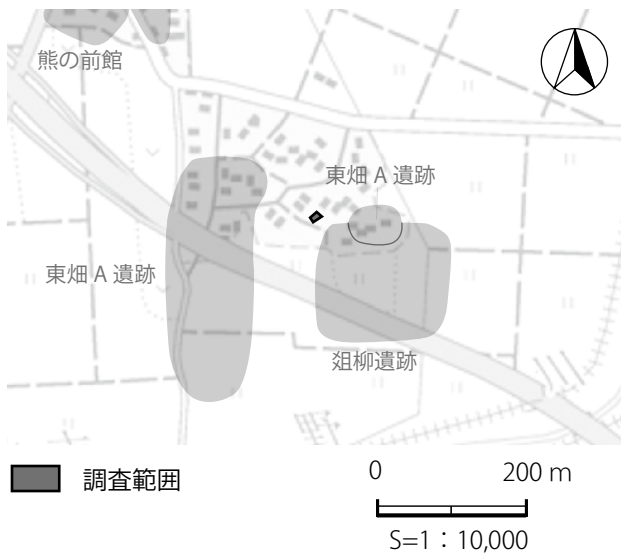
解体工事に立会いを行い、土層及び遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考察

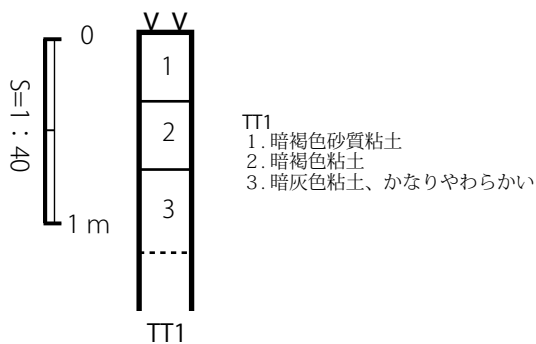
調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第 96 図 俎柳字東畑二立会調査地



俎柳字東畑二全景（東より）



第 97 図 俎柳字東畑二立会調査柱状図



俎柳字東畑二 TT1 完掘（西より）

11 砂塚字西寺田・東寺田

- (1) 調査日 令和元年9月5日
- (2) 調査場所 南陽市砂塚字西寺田・東寺田
- (3) 調査原因 市道整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は下八ツ口遺跡の隣地で、遺跡分布調査の未実施地であることから道路改良工事の際に立会いと周辺踏査を行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



■ 調査範囲

0 200 m

S=1 : 10,000

第 98 図 砂塚字西寺田・東寺田立会調査地



砂塚字西寺田・東寺田全景 (南より)



砂塚字西寺田・東寺田全景 (北より)



砂塚字西寺田・東寺田全景 (南より)

12 宮内字阿弥陀堂

- (1) 調査日 令和元年9月5日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字阿弥陀堂
- (3) 調査原因 市道整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は遺跡分布調査の未実施地であるが、道路改良工事の際に立会調査を行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結 果

遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第 99 図 宮内字阿弥陀堂立会調査地



宮内字阿弥陀堂全景（南より）



宮内字阿弥陀堂全景（東より）



宮内字阿弥陀堂全景（西より）

13 二色根字根小屋

- (1) 調査日 令和元年9月5日
 (2) 調査場所 南陽市二色根字根小屋
 (3) 調査原因 市道整備(94条)
 (4) 調査方法及び内容

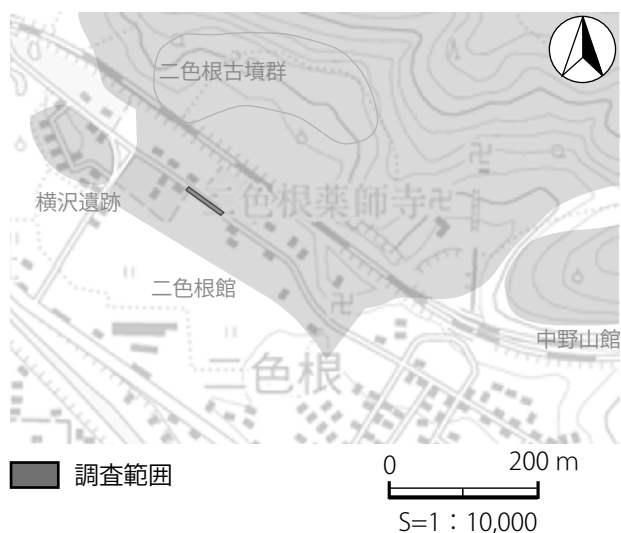
対象地は二色根館跡の根小屋である。側溝工事の際に立会い調査を行い遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



第100図 二色根字根小屋立会調査地



二色根字根小屋全景(東より)



二色根字根小屋全景(南より)



二色根字根小屋底面

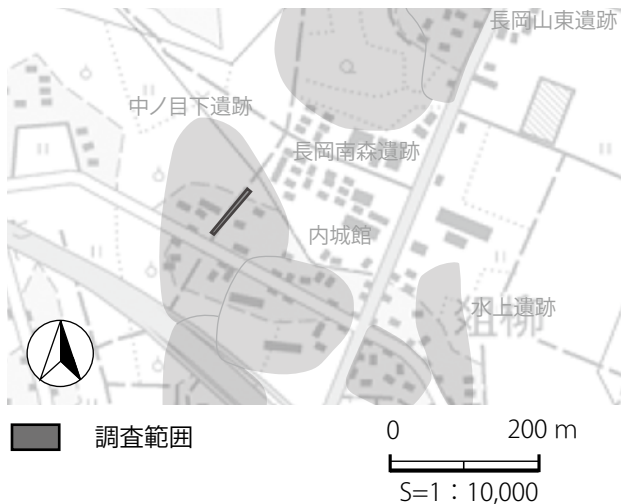
14 俎柳字中丸・中ノ目下

- (1) 調査日 令和元年9月5日
- (2) 調査場所 南陽市俎柳字中丸、中ノ目下
- (3) 調査原因 下水道工事(94条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は中ノ目下遺跡の範囲内で市道長岡南森線である。土工事の際に立会調査を行い、遺跡の状況を確認する。

(5) 結 果

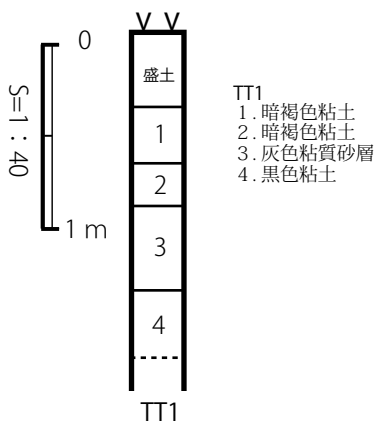
遺構・遺物は検出されなかった。



第101図 俎柳字中丸・中ノ目下立会調査地



俎柳字中丸・中ノ目下全景(東より)



第102図 俎柳字中丸・中ノ目下立会調査柱状図



俎柳字中丸・中ノ目下工事状況(南より)

15 萩生田遺跡

- (1) 調査日 令和元年8月2日～10月10日
- (2) 調査場所 南陽市萩生田字白山 1092-1 他
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は萩生田遺跡及びその隣地である。工事予定地は補装・盛土されていることから、事前の試掘ができないため土工事の際に立会調査を行い、遺跡の状況を把握する。

(5) 結果

遺構は、敷地内道路の拡幅部で溝跡、土坑、ピットを検出した。遺物は古墳時代前期の高坏、古代の土師器、須恵器が出土した。

(6) 考察

倉庫床工事、道路拡幅工事、防火水槽の3ヶ所を工事する際に状況を確認した。

①倉庫床工事(8月29日、30日、9月30日)

遺構・遺物は確認できなかった。

②道路拡幅工事・駐車場工事(8月29日、9月10日)

道路拡幅部では、溝跡3条(SD1～3)、ピット7個(SP1～7)、土坑2個(SK1、2)を検出したが削平が著しい。溝跡の周囲に土器が散布している。遺物は、主に古代の須恵器(坏、甕)、土師器で古墳時代の高坏等が混入。道路南のロータリー部では深さ約3cmの溝(SD1)が確認された。

③防火水槽工事(10月10日)

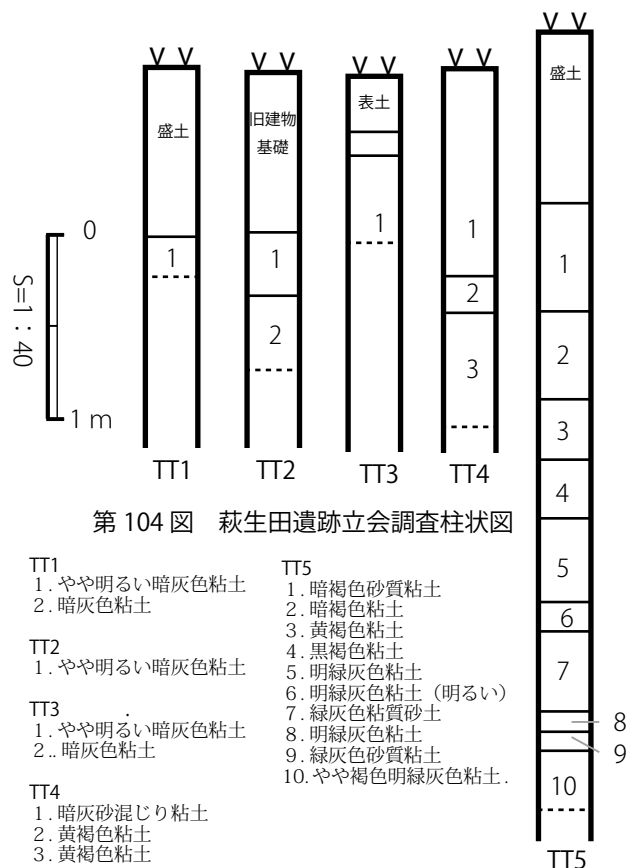
遺構・遺物は確認できなかった。

④倉庫西側の擁壁工事(9月11日～17日)

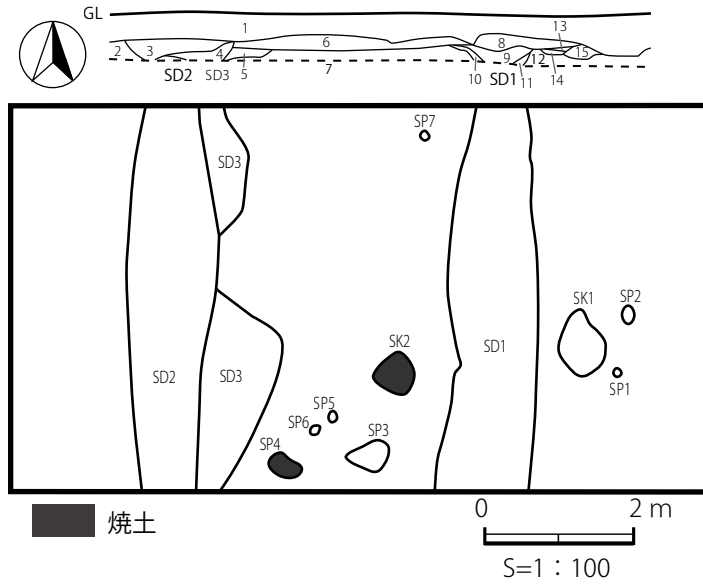
遺構・遺物は確認できなかった。



第103図 萩生田遺跡立会調査地

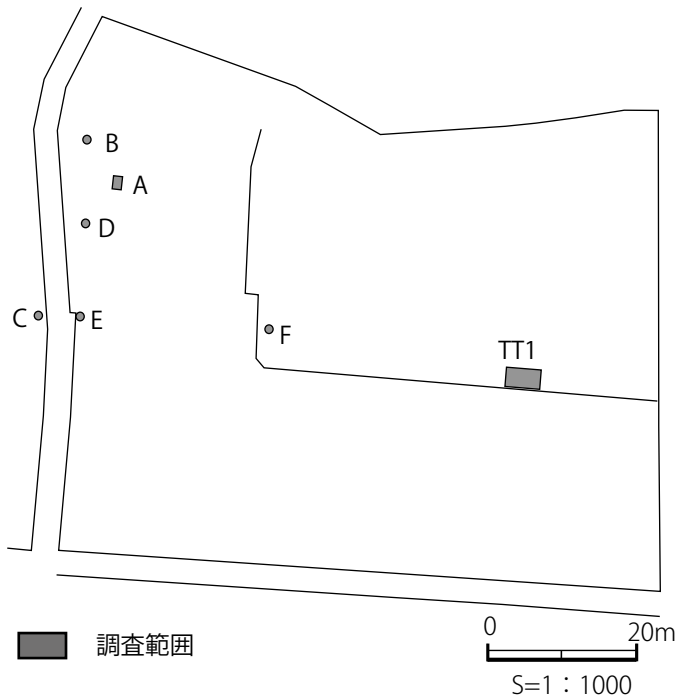


第104図 萩生田遺跡立会調査柱状図



- 1 表土(盛土)
- 2 やや暗い褐色砂質粘土
- 3 暗褐色砂質粘土(褐色土混入)
- 4 暗褐色砂質粘土(褐色土混入。一部黒色砂質粘土混入)
- 5 褐色砂質粘土
- 6 少し明るい暗褐色砂質粘土(褐色土混入)
- 7 褐色砂質粘土(暗褐色土混入。炭化物混入)
- 8 やや明るい褐色砂質粘土
- 9 暗褐色砂質粘土(粘性弱い)
- 10 褐色砂質粘土(暗褐色土混入。粘性弱い)
- 11 褐色砂混じり粘土(暗褐色土少し混入)
- 12 褐色砂質粘土(砂少ない。粘性弱い)
- 13 黄褐色砂質粘土(暗褐色土混入)
- 14 暗褐色砂質粘土(礫混入)
- 15 暗褐色砂質粘土

第 105 図 萩生田遺跡試掘トレンチ遺構平面図



萩生田遺跡全景(東より)



萩生田遺跡調査状況(東より)

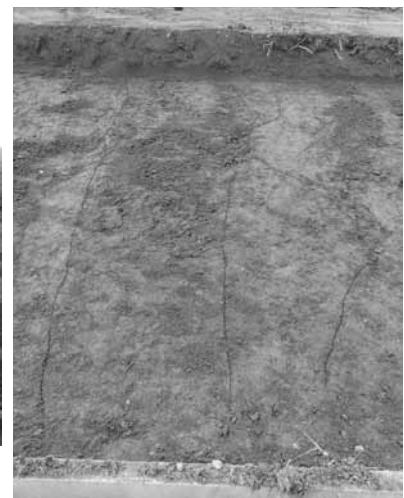
第 106 図 萩生田遺跡試掘トレンチ設定図



萩生田遺跡調査状況(北より)



萩生田遺跡土層断面(東より)



萩生田遺跡遺構確認(南より)

16 赤湯字川尻

- (1) 調査日 令和元年 11 月 5 日～ 12 日
- (2) 調査場所 南陽市赤湯字川尻
- (3) 調査原因 下水道整備
- (4) 調査方法及び内容

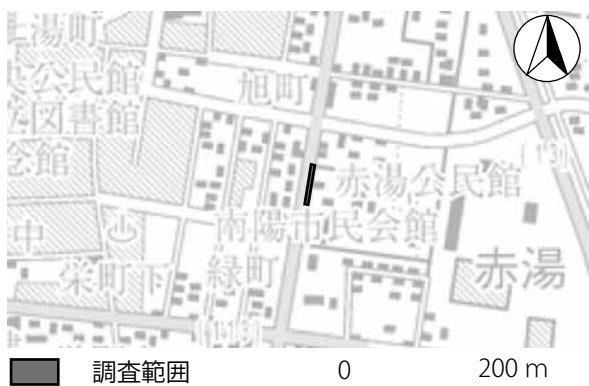
対象地は遺跡分布調査の未実施地であることから、土工事の際に立会調査を行い遺跡の有無を確認する。

(5) 結 果

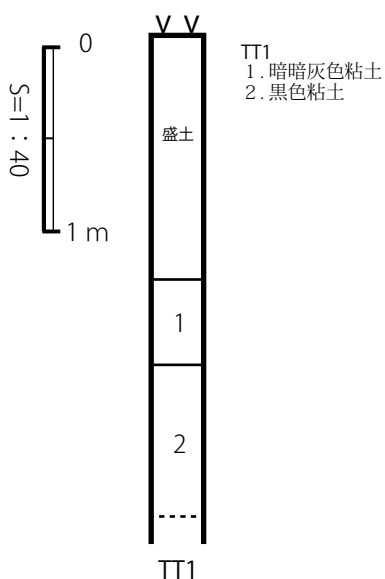
遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる



第 107 図 赤湯字川尻立会調査地



第 108 図 赤湯字川尻立会調査柱状図



赤湯字川尻調査状況（北より）



赤湯字川尻調査状況（北より）



赤湯字川尻調査状況（東より）

17 三間通字稲荷

- (1) 調査日 令和元年12月2日
- (2) 調査場所 南陽市三間通字稲荷
- (3) 調査原因 市道整備、下水道整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は部分的に遺跡分布調査の未実施地が含まれることから、下水道整備の際に立会いを行い遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 考察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



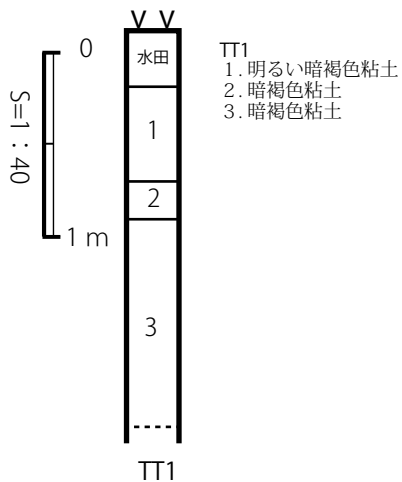
三間通字稲荷調査状況（北より）



三間通字稲荷調査状況（東より）



第109図 三間通字稲荷立会調査地



第110図 三間通字稲荷立会調査柱状図



三間通字稲荷調査状況（南より）

18 中ノ目字北ノ前田

- (1) 調査日 令和元年 12 月 2 日
- (2) 調査場所 南陽市中ノ目字北ノ前田
- (3) 調査原因 市道整備
- (4) 調査方法及び内容

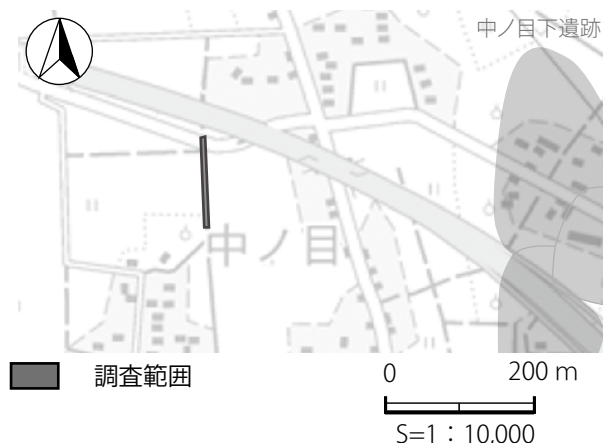
対象地は遺跡分布調査の未実施地であることから、道路側溝工事の際に立会調査を行い遺跡の有無を確認する。

(5) 結 果

遺構は旧水田の区画と思われる溝跡を検出した。遺物は出土しなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



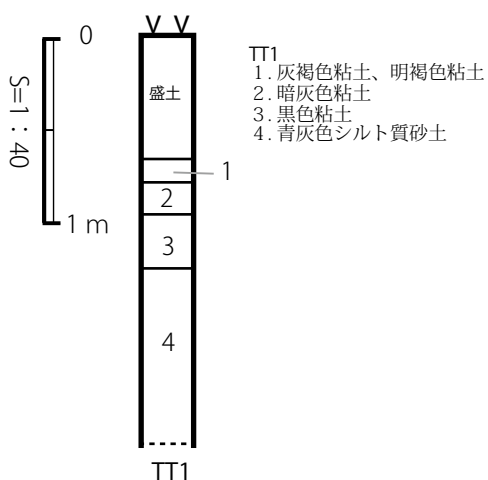
第 111 図 中ノ目字北ノ前田立会調査地



中ノ目字北ノ前田調査状況（北より）



中ノ目字北ノ前田調査状況（南東より）



第 112 図 中ノ目字北ノ前田立会調査柱状図



中ノ目字北ノ前田土層断面（東より）

19 大橋字地蔵浦東

- (1) 調査日 令和元年 12月5日
- (2) 調査場所 南陽市大橋字地蔵浦東 2484-2
- (3) 調査原因 公共施設整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は遺跡分布調査の未実施地であることから、防火水槽工事の土工事の際に立会調査を行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結 果

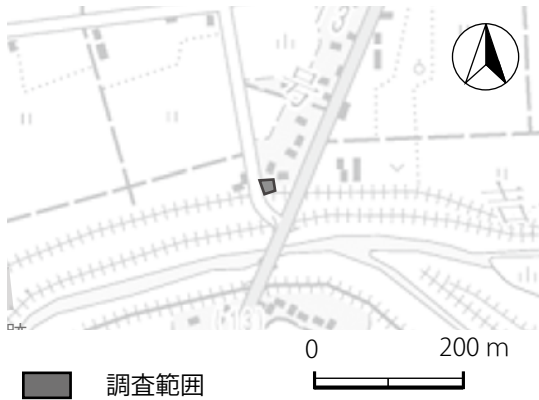
遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 考 察

調査地内には遺跡は無いと考えられる。



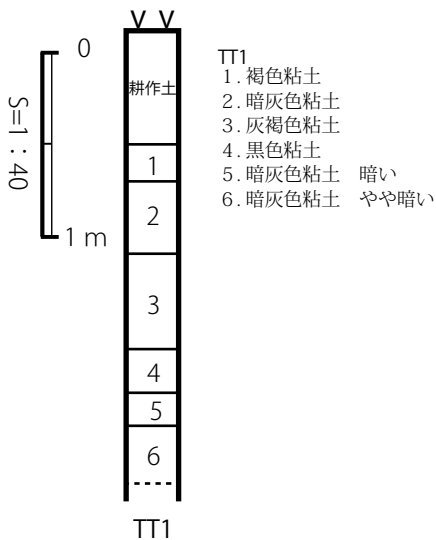
大橋字地蔵浦東全景（北より）



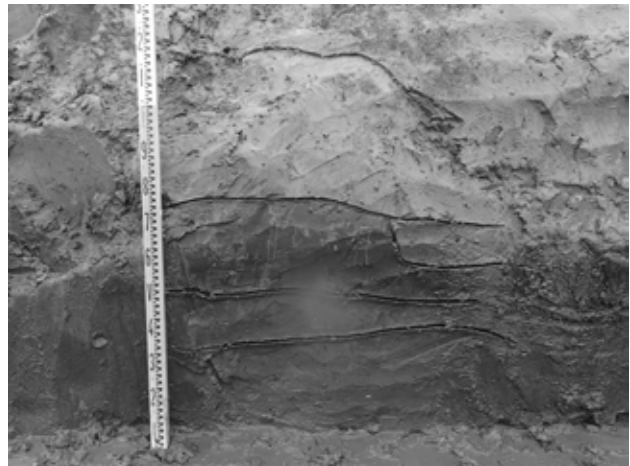
第 113 図 大橋字地蔵浦東立会調査地



大橋字地蔵浦東全景（北より）



第 114 図 大橋字地蔵浦東立会調査柱状図



大橋字地蔵浦東土層断面

V 測量調査

1 馬の墓古墳測量調査

(1) 調査期間 令和元年 11 月 6 日～令和 2 年 1 月 31 日

(2) 調査場所 南陽市萩生田地内（皇大神社）

(3) 調査目的 遺跡台帳整備の基本となる測量図の作成

(4) 受託業者 明光技研株式会社

(5) 調査経過

・古墳上に皇大神社（通称：四面神社）があるため宮司の橘氏（池黒、羽黒神社）に測量許可を頂く。

・萩生田地区の氏子総代である菊地氏に連絡する。その際、現在の墳丘は明治末期に盛土して整備しているとの話を伺う。

・業者と詳細協議のうえ現地測量を実施する。

(6) 調査結果

馬の墓古墳は、隣接する大塚遺跡の古墳群とひとつと考えられ、一辺約 21 m の方墳とみられる。明治 8 年字限図でも社地として方形の地割であることが確認され、形状自体は明治末期の整備でも変わっていないと思われる。墳頂では古代の須恵器片が表採されており、明治末期の盛土に混入したものとも考えられる。



第 115 図 馬の墓古墳測量図

2 中川地区の城館跡（岩部山館跡）等測量調査

1 調査概要と目的

(1) 調査期間 令和元年 10 月 11 日～令和 2 年 3 月 31 日

(2) 調査場所 南陽市小岩沢、川樋、元中山地内

(3) 調査目的

対象地は、南陽市北東に位置する川樋地区で標高 506 m の岩部山とその周辺地である。岩部山は山全体が館跡として遺跡登録されている。山頂には館の中心となる主郭が置かれており、複雑で巧妙な縄張りが知られている。これまで、城郭遺構の正確な位置を把握するための地図がないこと、また大規模な城郭であるためその全容が把握できていないことが課題となっていた。また、周辺が標高の高い山々であるため踏査が困難で、未確認の城郭遺構の調査も問題となっていた。これらのことから遺跡台帳を整備し、今後の調査や遺跡保護に資するために赤色立体地図等の作成を行うこととした。

2 調査方法

調査地の現況は山林であることから、落葉後に航空レーザー測量及び現地での補助測量を実施した。赤色立体地図を元に館跡の略図を作成した。なお、略図は読み取った地形の概略図でありいわゆる縄張図のレベルには達していない。

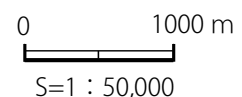
3 測量方法と経過

測量計画は、GNSS 衛星配置等を考慮し、計測諸元、飛行コース、GNSS 基準局の設置場所及び GNSS 観測について作成し、1 m × 1 m に 4 点の計測データを取得するものとした。測量機材は、必要に応じ「公共測量作業規定の準則」に定める検定を第三者機関より受けたものを使用した。

3次元航空レーザー測量は航空レーザー計測システム及び GNSS/IMU 装置を搭載した固定翼機を用いて実施した。航空レーザー測量データ（GNSS 基準局の GNSS 観測データ、航空機上の GNSS 及び IMU 観測データ、レーザー測距データ）を統合解析し、地表のレーザー照射位置の三次元座標を求めた。調整用基準点を設定し、三次元計測データを補正した。補正後のオリジナルデータから、建物や植生等の地物を除去したグランドデータを作成、これを基に等高線データ、赤色立体地図となる地形表現図を作成した。



注) 実際のデータ範囲は計測飛行範囲より広い



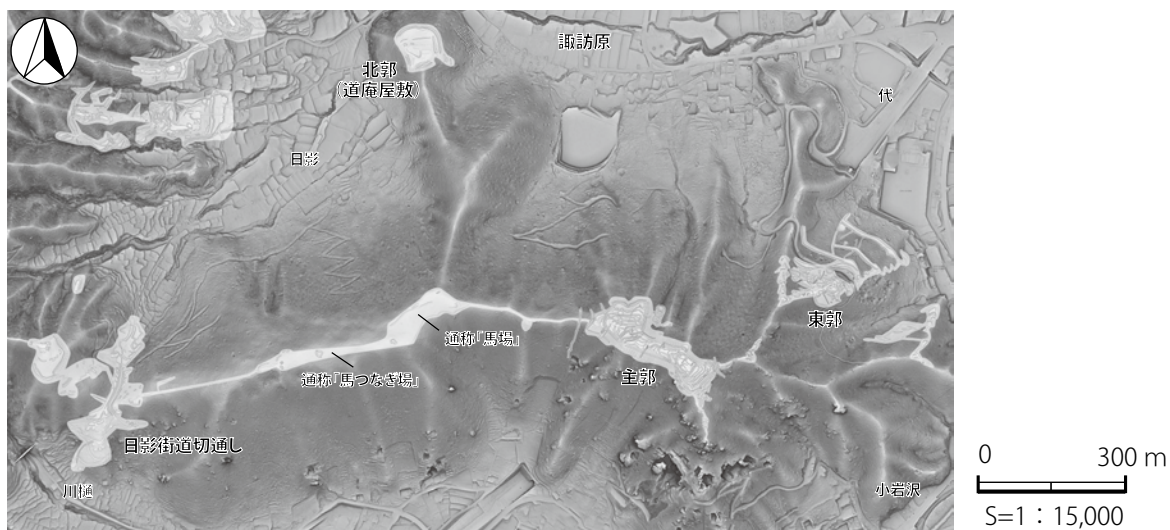
第 116 図 計測飛行範囲図

4 成果

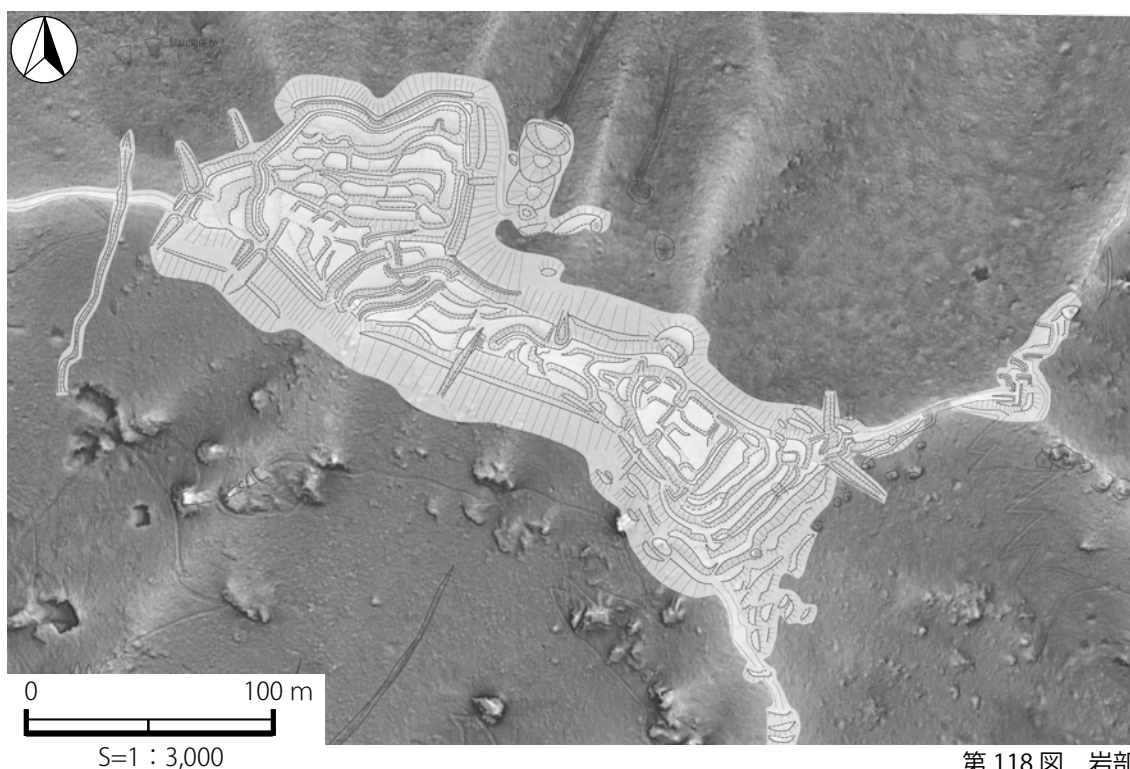
(1) 岩部山館跡（月見ヶ城）

岩部山館（別名：月見ヶ城）は標高 506 m、比高約 250 m の岩部山山頂に主郭を置く山城である。岩部山の南は川樋・小岩沢、北は元中山で、元中山は元々は屋代郷に属する山形県中山村で、上山市中山は北条郷に属する置賜県（掛入）中山村であった。中世の中山城を考える上で岩部山館が「やしろ中山」に所在することは注意を要する。

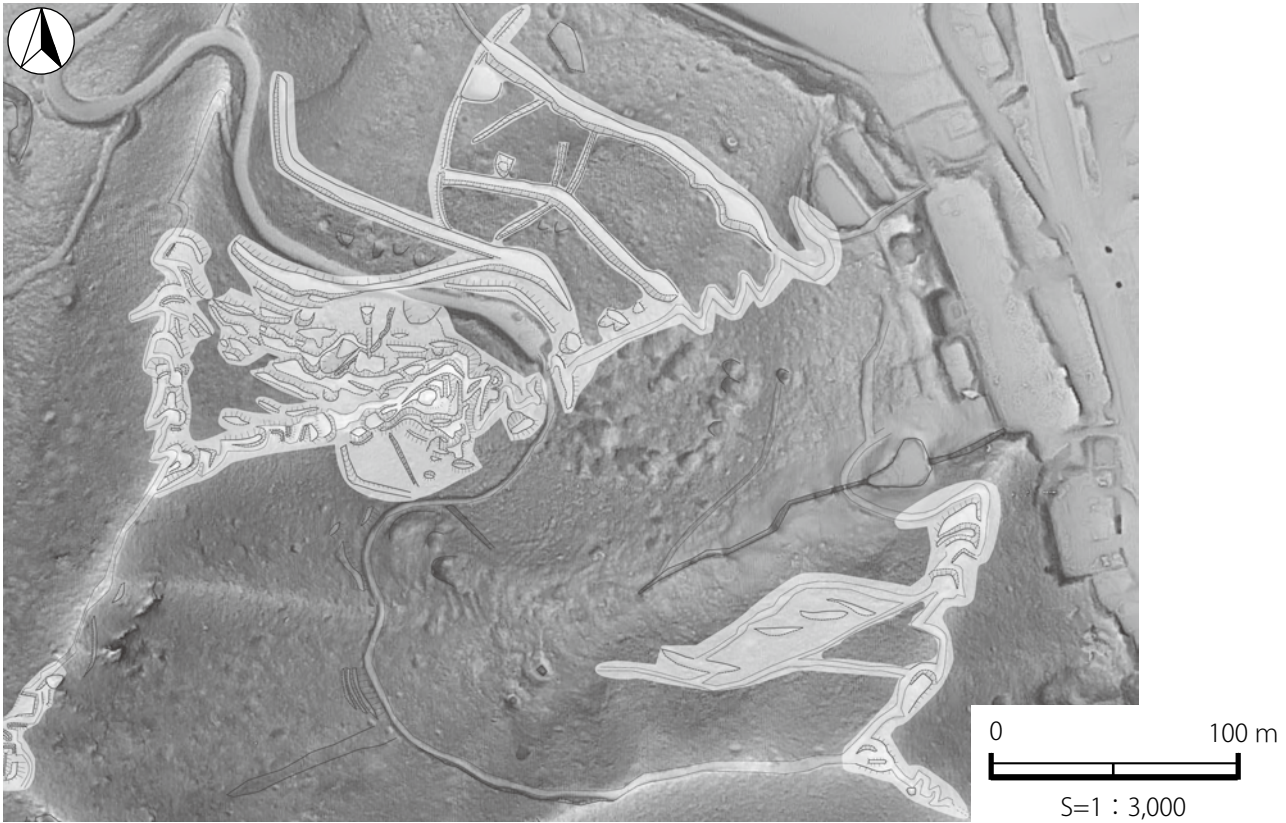
今次調査で東郭の位置と形状が具体的に把握された。岩部山西半の尾根は概ね平坦な自然地形で所々に水溜め状の窪地が造られており馬に関連する地名が伝わっている。岩部山西端の日影街道切通しでは、峠の北側にかけて街道の左右斜面に曲輪群が配されており、峠の西斜面からその尾根が鷹戸山館の東虎口になる。山の北斜面には鉾山に関係するとみられる魚鱗状の崩壊地形が見られる。



第 117 図 岩部山館全体図



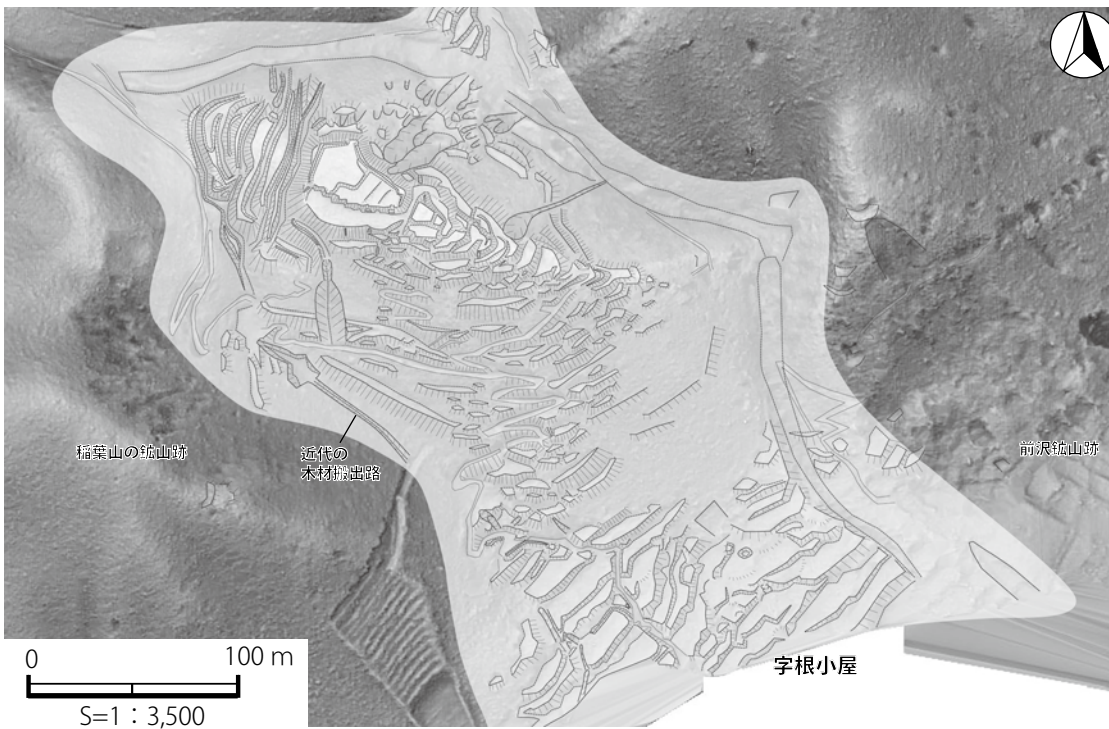
第 118 図 岩部山館主郭略図



第 119 図 岩部山館東郭略図

(2) 虚空蔵山館跡 (星見ヶ城)

虚空蔵山館 (別名：星見ヶ城) は、標高 450 m の山頂に主郭を置く山城である。現地踏査及び赤色立体地図により館跡の略図を作成した。データ取得範囲の南端に位置しているため、データの無い南東角の根小屋付近は図化していない。主郭には土塁が残り、背後に 7 重の堀切を有する。

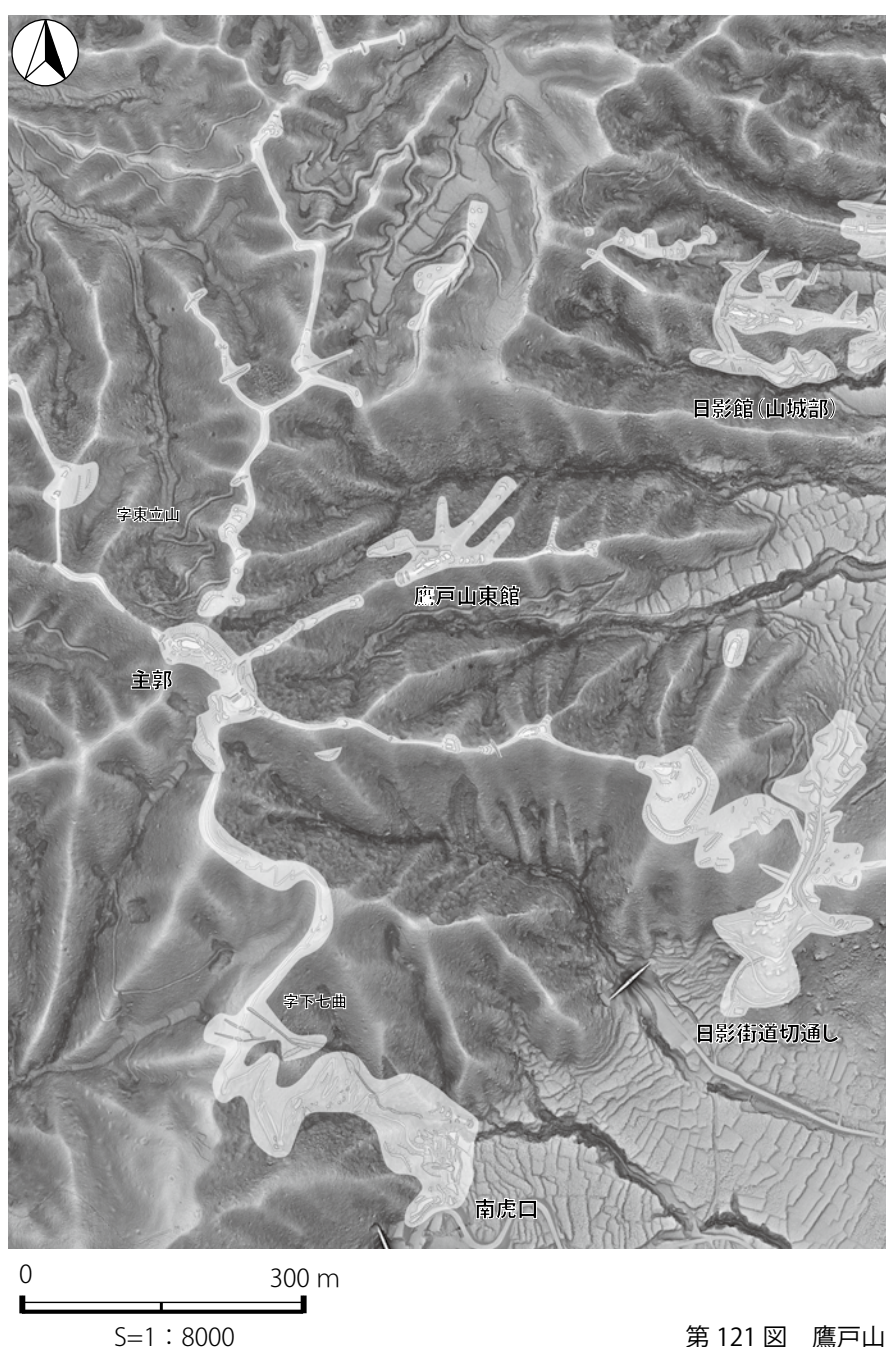


第 120 図 虚空蔵山館略図

(3) 鷹戸山館跡、鷹戸山東館跡

鷹戸山館跡は新規発見の山城である。鷹戸山は市内に9つ存在する600m級の山の一つである。山頂は川樋、元中山、金山の境となっている。大平山地南部では最も高い峯で川樋、中山方面だけでなく釜渡戸^{かまのはた}や金山方面まで見渡せる。標高617.9m、県内の城館址では最大となる比高330mの山頂に主郭を置き、四方の枝尾根の尾根道に堀切等を配する。鷹戸山館の北東の枝尾根には、鷹戸山東館跡が立地する。東端は日影街道切通しである。岩部山館とともに街道を挟むように位置する。鷹戸山北西の地名は釜渡戸字（東・南・西）立山で、館山の転化と思われる。

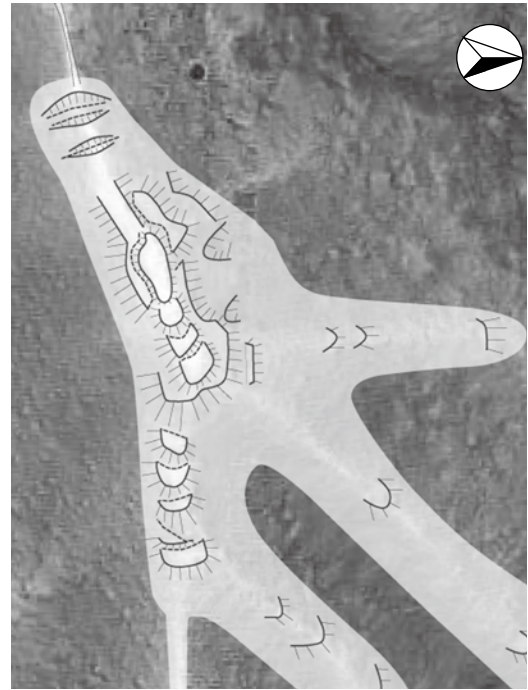
鷹戸山東館も新規発見の山城である。鷹戸山から北東に延びる枝尾根に立地し、主郭は標高525mに位置する。鷹戸山館に関連する曲輪等が尾根道沿いに主郭のすぐ背後まで伸びており、鷹戸山館の東郭に相当するような位置にある。主郭西側に二重堀切を配する。



第121図 鷹戸山・鷹戸山東館位置図



第 122 図 鷹戸山館主郭略図



0 50 m
S=1 : 1,500

第 123 図 鷹戸山東館主郭略図

(4) 日影館跡 (山城)、日影小館跡

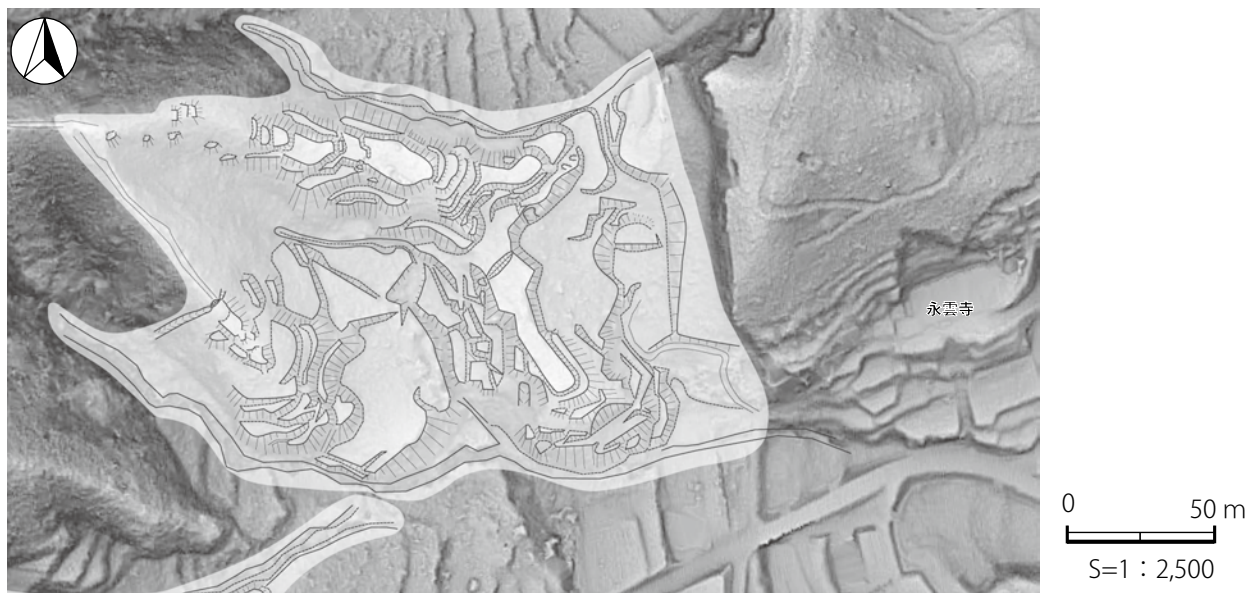
周知の日影館跡の背後に山城があることが新たに判明した。山城の主郭は標高約 405 m に位置する。主郭北側に横堀を配し側面を守る。主郭背後は二重堀切となっており堀は谷底まで続く。また、日影館跡の北側に小規模な館跡（日影小館）を新たに確認した。



第 124 図 日影館・日影小館略図

(5) 北日影館跡

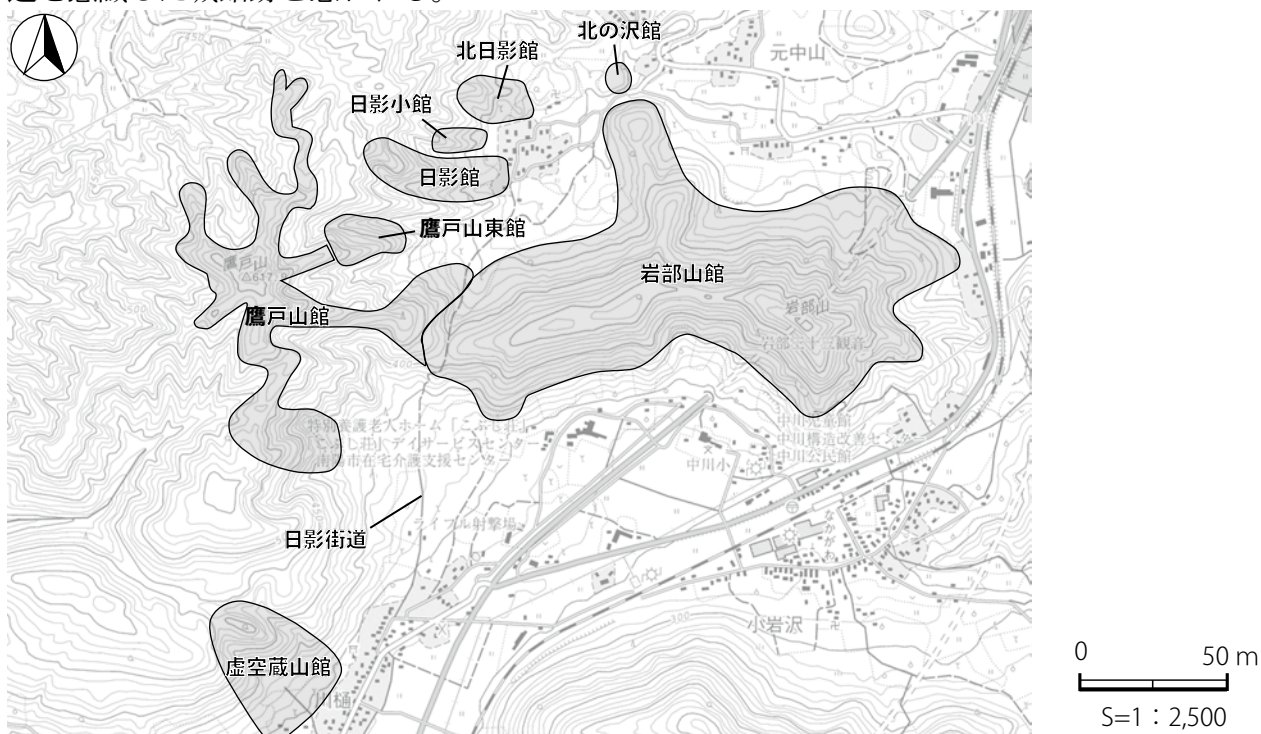
日影小館跡の北側に位置する新規発見の館跡で所在地は南陽市元中山字日影である。永雲寺の西にあたり、日影街道の北方に位置する。城館跡の立地する尾根は東半で二股に分かれその北尾根と南尾根の両方に城館遺構が残る。主郭は北尾根側とみられ標高約 355 mに位置する。最高所は標高約 390 mとなる。館跡東側は永雲寺のある丘に挟まれた谷になっており、谷の北端に堀切を設け区画している。



第 125 図 北日影館略図

(6) 日影地区の城館群について

日影地区の北西の山々では、鷹戸山館、鷹戸山東館、日影館、日影小館、北館と 5つの館の存在が確認された。各館の存在時期や同時性は不明であるが、最上領との国境にあって日影街道を意識した城館跡と思われる。



第 126 図 岩部山館跡周辺遺跡配置図

第二次長岡南森遺跡確認調査（概報）

本報告は、文化庁の補助を受けて平成31（令和元）年度に南陽市教育委員会が実施した長岡南森遺跡確認調査に関する調査報告である。

調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

凡 例

調 査 主 体	南陽市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係		
調 査 期 間	平成31年5月7日から令和7年3月30日		
発掘調査担当者	社 会 教 育 課 長	板垣幸広	
	調 査 主 任	角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）	
	埋蔵文化財係主任	高橋 徹	
	埋蔵文化財係嘱託	斉藤紘輝	
整理作業担当者	埋蔵文化財係嘱託	吉田江美子	
	埋蔵文化財係嘱託	山田 渚	

- 1 長岡南森遺跡確認調査委員会の構成は以下の通りである。
菊地 芳朗（福島大学行政政策学類教授）
北野 博司（東北芸術工科大学歴史遺産学科教授）
青木 敬（國學院大學文学部史学科准教授）
佐藤 鎮雄（南陽市文化財保護審議会委員）
佐藤 庄一（山形県考古学会会長）（順不同、敬称略）
- 2 本報告書の執筆についてⅠ～Ⅲ第7節・Ⅳ・Ⅴは角田朋行、Ⅲ第8節は吉田江美子が担当した。遺物写真撮影は山田渚、報告書デジタル編集・構成作業は吉田江美子・山田渚が担当した。
- 3 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 4 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。
S A・・・柵列 S B・・・掘立柱建物跡
S K・・・土坑 S P・・・ピット
- 5 写真図版は任意の縮尺で採録した。

- 6 小字名は、近年における字名の統廃合等で変化している場合、地名記録の観点から現小字名を小字名を記載し、明治期の地籍図による括弧書きで記載した。
- 7 調査にあたっては、土地所有者の皆様をはじめ、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。(五十音順・敬称略)
山形県教育委員会、南陽市シルバー人材センター、青木敬、青山博樹、阿子島功、阿部明彦、植松暁彦、菊地芳朗、北野博司、佐藤鎮雄、佐藤庄一、秦昭繁、門叶冬樹、柳沼賢治、吉野一郎
- 8 遺跡の基準点設置は、明光技研株式会社へ委託した。
- 9 放射性炭素年代測定は、山形大学高感度加速器質量分析センターへ委託した。

I 調査の経緯と目的

第1節 調査に至る経緯

長岡南森遺跡は、南森と呼ばれる独立丘陵地を中心とする遺跡である。昭和53年に稲荷森古墳調査団が確認し、平成5年度に南陽市教育委員会で南森丘陵の形状が前方後円墳に似ていることから継続的に踏査を続けてきた。

近年周辺の土地開発が進み、南森丘陵に開発が及ぶ恐れがあることから、平成28年度に市教育委員会は遺跡の現状把握と今後の調査及び遺跡保護の基礎資料を得ることを目的に測量調査を実施した。

その結果、南森丘陵自体が古墳である可能性があり、遺跡の性格を把握するために調査検討が必要であると判断した。

調査は、平成30年度に第1次調査を実施した。2年目となる平成31（令和元）年度は、長岡南森遺跡確認調査委員会を新たに立ち上げ、その指導を受けて第2次調査にあたった。

第2節 調査期間と目的

今年度のトレンチ調査の総面積は398.46㎡となる。

(1) 調査期間

第2次長岡南森遺跡確認調査

発掘調査期間

令和元年（2019年）5月7日～令和元年（2019年）7月30日

(2) 第2次確認調査の調査地

山形県南陽市長岡字南森 1650-1、1661、1676、1679、1695、1698、1704、1705、1706、1750

(3) 第2次確認調査の目的

長岡南森遺跡の性格把握及び南森丘陵の地形とその成因の把握を目的とする。特に南森丘陵が古墳かどうかの確認については重要事項と位置づけた。調査にあたって下記の目標を設定した。

- ・丘陵の現況地形及び成因を把握（切土・盛土等の有無の確認）すること。
- ・丘陵北半部東斜面の改変前の形状の把握と西斜面との比較を行うこと。
- ・墳端やくびれ部に相当する地形の有無を確認すること。
- ・周溝に相当する地形の有無を確認すること（低地状遺構が溝跡かどうか）。
- ・古墳に伴う遺物や外表施設等の有無を確認すること。
- ・次年度調査計画立案のための基礎データの収集及び課題の把握を行うこと。

第3節 調査方法

(1) グリッドの設定

南森丘陵の測量図を基本にグリッドを設定した。南森丘陵は前方部と推定した北半部と後円部と推定した楕円形状の南半部から成る。グリッドは10m×10mで丘陵南北軸を基線とし、南森丘陵の東西方向をアルファベット大文字で東からA～Rに、南森丘陵の南北方向を数字で北から1～22とした。現地で設営した基準杭は、グリッドの西北角に配置し、6ヶ所の基準杭（A～F）を設置した。座標値は表2のとおりである。

表2 グリッド数値

杭	X	Y	H
A	-217662.008	-59334.244	217.106
B	-217652.008	-59274.244	219.639
C	-217642.008	-59294.244	220.254
D	-217622.008	-59314.244	216.293
E	-217622.008	-59284.244	219.175
F	-217602.008	-59284.244	291.974

(2) 調査地点の設定

長岡南森遺跡確認調査委員会(菊地芳朗委員長)の指導を踏まえて調査地点を検討し、地権者の発掘承認が得られた範囲内にトレンチを設定した。

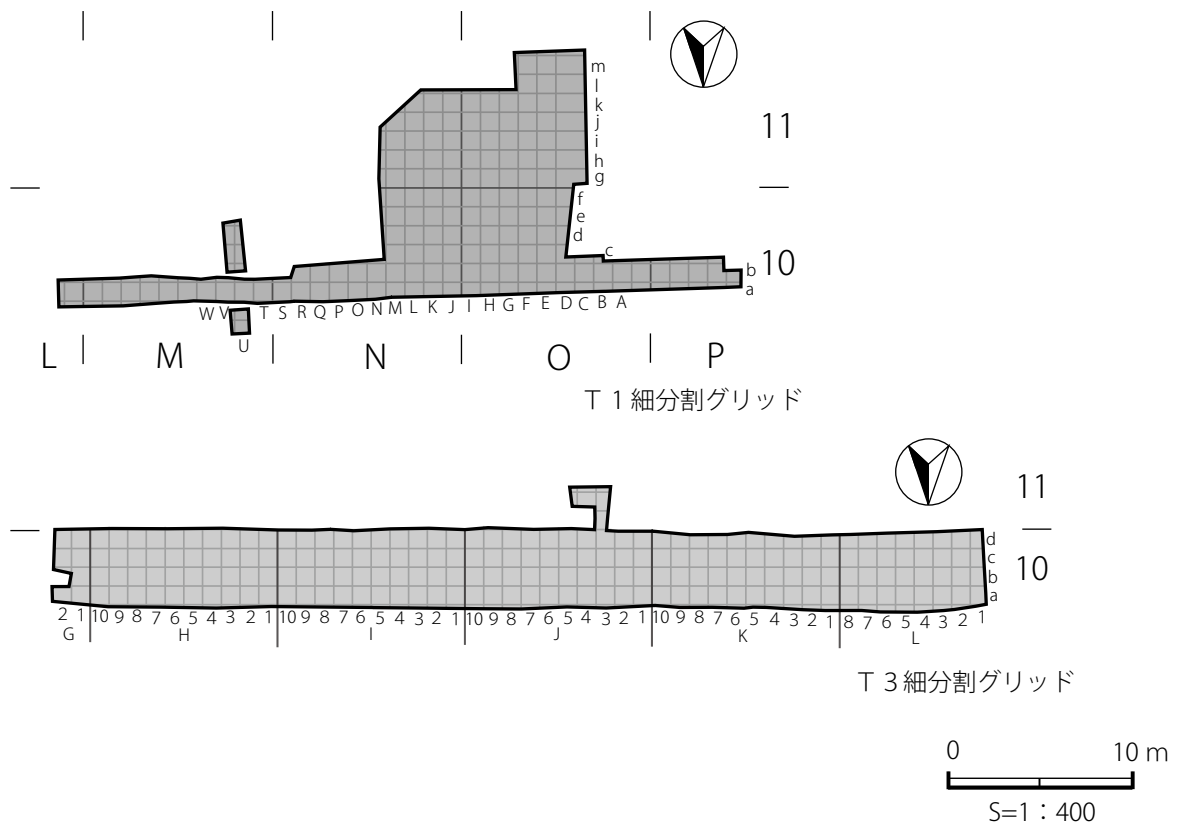
M10-O11 GにT 1 (以下グリッドを「G」、トレンチを「T」と表記する)、P10-Q10 GにT 1 a、R10-S10 GにT 1b、G10-L10 GにT 3の計4地点を設定した。M10 GにT 1-M10 s、T 1-M10 nの2地点を追加した。J 11 GにT 3 aの1地点を追加し、最終的に第3 Tと接続させたT 1は、昨年実施した範囲について、平地から山裾の範囲では東壁を東へ2.8m、西壁を西へ4.2m 拡張し、南壁は部分的に南へ2m 拡張した。さらに北西の幅 1.8m トレンチを延長する形で西へ7.3m 拡張した。斜面から尾根の範囲では、幅 1.5m のトレンチを延長する形で東へ7.4m 拡張した。

(3) 発掘調査

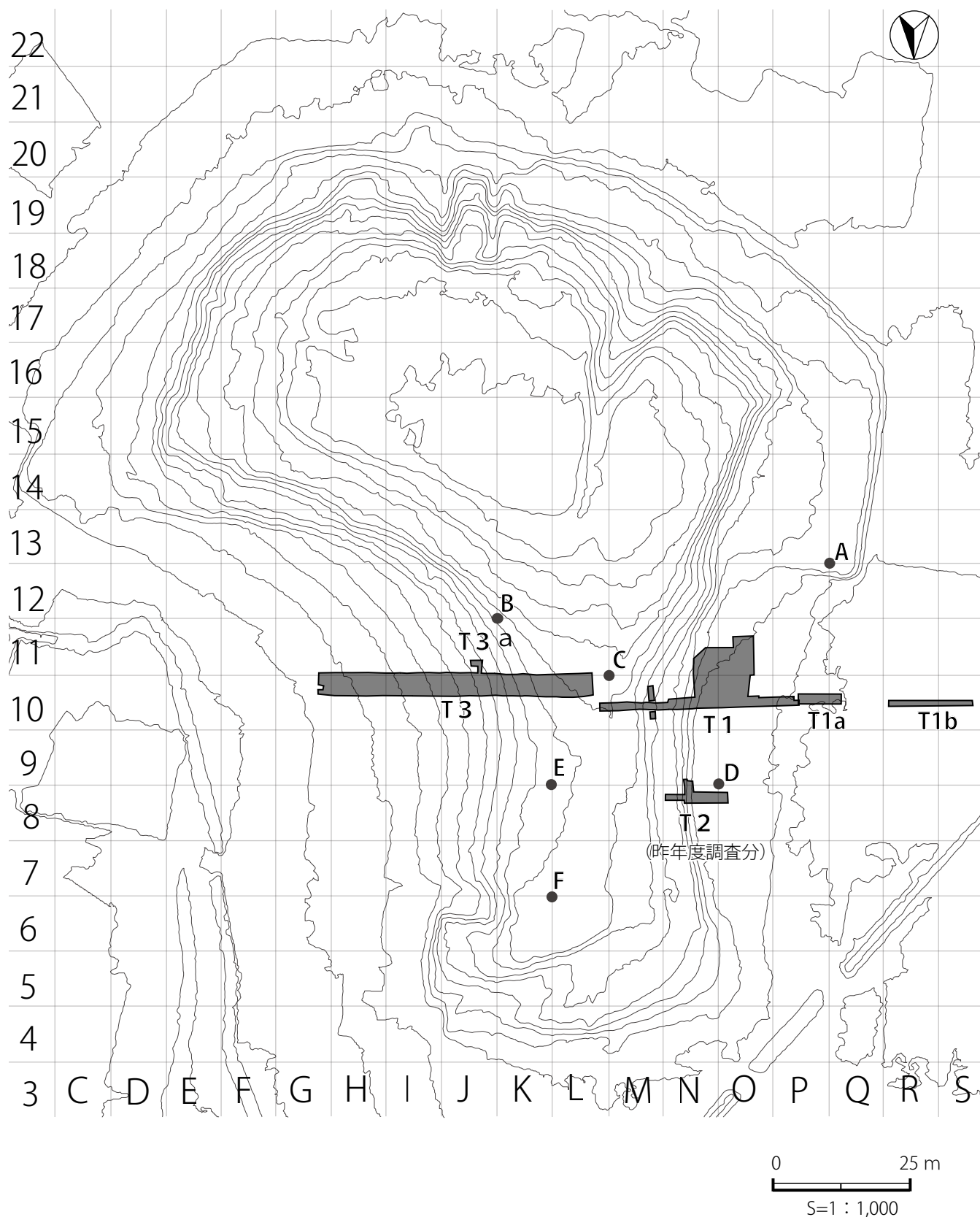
T 1は、昨年の調査範囲内の埋土を除去した後、手掘で拡張を行った。T 3は、調査区画に沿って人力でサブトレンチを掘り、土層の確認と調査区画を明確にした後、表土剥離を重機で行い、表土除去後に手掘で掘遺構検出を行った。また残るトレンチは手掘で遺構検出を行った。

遺構、断面図作成は1/20の縮尺を基本とした。形状のわかる遺物や遺構内の遺物は出土状況を図化したうえで取り上げた。攪乱層の遺物及び細片の遺物は、1mメッシュの細分割グリッドを用いて取り上げた。

第2次調査となる発掘は、地権者の承諾を得た上で5月7日～7月30日の期間で実施した。詳細は以下の通りである。



第127図 長岡南森遺跡グリッド配置 (1)



第128図 長岡南森遺跡グリッド配置(2)

- 5月7日(火) トレンチ設定、支障木伐採。
- 5月8日(水) T3の検土杖による表土層の状況確認。
- 5月9日(木) 資材搬入、草刈、テント設営、支障木伐採、T3のサブトレンチ掘り下げ。
T1東端延長部の表土剥離。
- 5月10日(金) T1の昨年度調査区の再掘削開始、T1東延長部掘り下げ、T3表土剥離、出土遺物記録。
- 5月13日(月) T1・T3壁の整理、T3出土遺物記録。
- 5月14日(火) T3のサブトレンチ掘り下げ、遺物取り上げ。斜面途中に段状の地形。古代の遺物が集中するグリッドあり。
- 5月15日(水) 排水作業。T3掘り下げ、サブトレンチで段状二段目に相当する段を検出、古墳時代の遺物多い。段の面整理。段より下方の斜面掘り下げ。出土遺物記録。
- 5月16日(木) T3の段の面整理、サブトレンチ内出土遺物記録。L10、K10 G面整理。G10、H10 G掘り下げ。L Gで柵列状の溝跡・円状の溝跡検出。
- 5月17日(金) T3 J10、K10 Gの出土遺物記録、取り上げ。G10、H10、I10 G掘り下げ。
- 5月20日(月) T3 G 10、H10 Gの面整理、I10 G掘り下げ。佐藤鎮雄氏現地指導。
- 5月22日(水) T3 H10 G 遺物取り上げ、面整理、遺構検出状況写真撮影。I10 G掘り下げ、H10 G柱穴半裁、断面図記録、J10 G面整理。
- 5月23日(木) T3 I10-J10 G掘り下げ。J10 G面整理、サブトレンチ内の出土遺物記録。H10 G断面図記録。J10 G出土遺物取り上げ。J～K G出土遺物記録。J Gの段状造成に係る切土は肩部を土手状に残し内部に盛土。
- 5月24日(金) T3 G・H G完掘写真撮影。I10 G面整理・遺構検出作業、出土遺物記録・取り上げ、K10 G遺構検出作業、尾根頂の円形溝跡の精査。
- 5月27日(月) T3 I10、J10 G掘り下げ。L10 G S D 1 検出状況記録。S D 1内の柱穴列図化作業。
- 5月28日(火) T3 I10、J10 G掘り下げ、S D 1記録、T1斜面部分の掘り下げ、午後雨天のため中止。
- 5月29日(水) T3壁面図化作業。J・I G出土遺物記録、取り上げ。K10 G尾根肩部サブトレンチ掘り下げ。T1の昨年度調査区掘り下げ。
- 5月30日(木) T1西側拡張部、昨年度調査区掘り下げ。T3壁面図化作業、段状二段目に相当する段の盛土上面の中世遺構検出作業。佐藤庄一氏、佐藤鎮雄氏現地指導。
- 5月31日(金) T1昨年度の調査区掘り下げ。T3 J・K Gの段の盛土上面の遺構検出状況記録。K、J、I G平面図作成。午後雨天のため中止。
- 6月3日(月) 長岡南森確認調査委員会視察・現地指導。T3尾根頂の円形の溝跡掘り下げ、覆土にビニール等現代の廃棄物を含んでいること、S A 1を切っていることから、新しい溝跡と判明。
- 6月4日(火) T3 I10 G掘り下げ。段状二段目に相当する段の北サブトレンチ完掘、尾根の肩

- 部までサブトレンチを延長。盛土内に遺物包含層あり。L10 G 遺構等記録。段の南サブトレンチ設定し掘り下げ。尾根の肩部に一部盛土の可能性あり。
- 6月5日(水) T 3 I10 G 溝跡の底付近掘り下げ。尾根頂の円形の溝跡の完堀・記録、ベルト除去の際に平行電線出土。午後、雷発生のため中止。
- 6月6日(木) T 3 I10 G 溝跡の底付近掘り下げ。斜面の精査。壁面図化作業。出土物記録。
- 6月7日(金) T 3 斜面の精査。壁面図化作業。出土遺物記録。午後雨天のため中止。
- 6月10日(月) T 1 西側拡張部掘り下げ。T 3 壁面図化作業。段状二段目に相当する段の北サブトレンチ内の出土土器記録。斜面部完堀。
- 6月11日(火) T 1 西側拡張部掘り下げ。T 3 壁面図化作業。
- 6月12日(水) T 1 西側拡張部掘り下げ、東側拡張部支障木除去。T 3 完堀、全景写真撮影。
- 6月13日(木) T 1 東側拡張部掘り下げ、昨年度調査区の南壁断面記録。T 3 I G に地山と洪水堆積層の確認のためサブトレンチ設定し、掘り下げ。阿部明彦氏視察。
- 6月14日(金) T 1 東側拡張部掘り下げ、面整理。南側拡張部掘り下げ。
- 6月17日(月) T 1 南側拡張部掘り下げ。南西角の丘側で削る際の土の感触や柔らかさが所々違うことに作業員が気づき作業手順の指示を求めた。土色に殆ど差が無いが土質の異なる土が面的に斑ら状に存在することを確認。盛土か。T 3 等高線図作成。
- 6月18日(火) T 3 等高線図作成。T 1 a 掘り下げ。T 1 南側拡張部壁切り。くびれ部状の地形を検出。菊地芳朗氏、福島大学学生視察。
- 6月19日(水) 雨天のため現場休み。昨夜の地震による被害の有無・影響を確認。
- 6月20日(木) T 1 昨年度の調査区の掘り下げ、西壁・南壁断面図作成、東側延長部のサブトレンチ掘り下げ。T 1 a の掘り下げ。T 3 a の掘り下げ、段状二段目に相当する段を検出、地山削り出しの上部に遺物包含層と盛土を確認。
- 6月21日(金) T 1 西・南壁断面記録。T 1 a 壁断面記録、面整理。T 1 b 掘り下げ。T 3 a 掘り下げ、出土遺物記録。
- 6月25日(火) 排水作業。T 1 b のサブトレンチ掘り下げ。T 3 a 掘り下げ、壁断面図作成。T 1 等高線図作成。T 1 西側拡張部北半掘り下げ。T 1 東側拡張部の平面図作成。
- 6月26日(水) 排水作業。T 1 西側拡張部北半掘り下げ、出土遺物記録。T 1 a 壁断面記録。T 3 a 壁断面記録。午後、阿子島功氏による盛土に関する現地指導。
- 6月27日(木) T 1 掘り下げ。T 3 a 記録。北野博司氏・佐藤庄一氏現地指導。午後雨天により中止。
- 6月28日(金) 排水作業。T 1 壁断面記録。T 1 a、1 b 完堀写真撮影。周辺美化作業。
- 6月29日(土) 現地説明会開催。阿子島功氏現地指導による IG の溝跡と 1 段目の段等の検証。
- 7月1日(月) 排水作業。T 1 西壁断面記録、南西角のサブトレンチ掘り下げ。T 3 a 平面図作成。T 3 I G の洪水堆積層・地山等確認のためサブトレンチを深掘り、洪水堆積層下に黒色粘土層あり。

- 7月3日(水) T1南壁断面記録。T3IGの地山等確認のためのサブトレンチ掘り下げ。T1-M10s、T1-M10n設定し、掘り下げ、SK1の範囲確定。
- 7月5日(金) 排水作業。T1等高線図作成、平面図作成、壁断面図作成。T1-M10s出土遺物記録。T1-M10s、T1-M10n壁断面図作成、完掘写真撮影。T3IGの地山等確認のためのサブトレンチ壁断面図作成。秦昭繁氏視察。阿子島功氏現地指導によるIグリッドの溝跡と1段目の段状・洪水堆積層とその下層の土層等について検証。
- 7月8日(月) T1東側拡張部の壁断面記録。T3壁面から年代測定用の炭化物を採取。T1-M10s、T1-M10nの埋め戻し。
- 7月9日(火) T1写真撮影。T3の段状二段目に相当する段に設けたサブトレンチ内側の壁断面記録。T3とT3aを連結し掘り下げ、出土遺物記録。T1斜面部の埋め戻し。
- 7月10日(水) T1西壁断面図作成。T3の段の南サブトレンチ北壁記録。T3、3aの接続部記録。これまで作成した図面のチェックと追加記録。
- 7月11日(木) T3aSX1断面図記録、炭化物採取。現場道具撤収、テント撤収。
- 7月16日(火) T3、3aTの埋め戻し。
- 7月17日(水) T1の埋め戻し、西北角の支障物除去、T1西北角に延長(T1とT1a間)掘り下げ、記録。溝跡西側の立ち上りを確認。
- 7月30日(火) T1とT1a間の断面図補足のため17日のトレンチを西へ拡張、記録後に埋め戻し。

II 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

南陽市は、山形県南部の米沢盆地北東部にあたり、北緯 38° 1'11" ~ 38° 13'25"、東経 140° 14'11" ~ 140° 14'17" に位置する。市域の南北の長さは約 22.6km、東西は約 14.8kmで、面積は約 160.70km²である。

市域北部には、山地が広がり最北端に白鷹山がそびえる。市域南部は、宮内扇状地である。宮内扇状地の東には低湿地帯である大谷地が広がる。市内北部の吉野地区から東に吉野川が南流し高畠町との市境で最上川と合流する。

長岡南森遺跡の所在地は南陽市長岡字南森、字南森西、字清水尻、字西田中南、字西田、俎柳字六百刈である。南森丘陵の主要地番は長岡字南森 1650 番地の 1 である。

長岡南森遺跡は J R 赤湯駅から南東約 1.2km に、また国指定史跡稲荷森古墳の南東約 130 m の場所に位置する。遺跡の東には国道 399 号線が通り、その間には長岡地区の集落が存在する。南森丘陵は旧河道と大谷地に挟まれた独立丘陵群の最南端にあたる。

近年南森丘陵の西南側は宅地化が進み、北側は主に果樹園や畑地として利用されていたが、近年は休耕地が増えている。丘陵の南側には、矢止八幡宮、神明神社、近世墓地がある。

第2節 周辺の歴史的環境

長岡南森遺跡周辺は長い歴史の中で人々に豊かな自然の恵みを与えた白竜湖大谷地に囲まれた洪積世の台地の一部であり、これらの地域ではその生活の様子がうかがえる遺跡が数多く、また旧石器～縄文～古墳～古代～中世と長期にわたる遺構や S 遺物が確認されている。

縄文時代の遺跡は大谷地周辺に多く分布し、中でも長岡南森遺跡から東側 1.5km 先では、低湿地の集落遺跡である押出遺跡が確認された。

弥生時代の代表的な遺跡としては、弥生中期の墓跡である百刈田遺跡や、石包丁が出土した萩生田遺跡がある。

古墳時代の遺跡として、全長 96 m の前方後円墳である稲荷森古墳や長岡山遺跡の方形周溝墓群が確認されている。

古代の遺跡では、南森丘陵の北西約 600m に位置する矢ノ目館跡からは道路跡が、長岡山遺跡からは円面硯や墨書土器など官衙等の存在をうかがわせる遺物も出土している。

中世の遺跡では、長岡山丘陵上に湯野目氏が居住したと伝わる長岡館跡があり、南森丘陵上にも南森館跡があったと推測される。南森丘陵の南側では旧河道を挟んで内城館跡が立地し、さらに南には鶴ノ木館跡がある。

Ⅲ 調査の概要

第1節 現況地形の把握

第1・2次調査の対象となる丘陵北半部は幅約62m、長さ約75mの北辺が長い台形に近い。尾根頂は平坦である。西側の斜面では、標高218m付近に帯状に幅4.5～5.5mの段状の地形が残る。第1次調査で検出された段状地形一段目は埋没しており地上からは見えない。

東側の斜面は旧葡萄園の緩傾斜地である。現状では斜面に段は全く見られないが、地権者から昭和30年代には段状の斜面でスキー遊びをしたが、40年代には重機でならし、その際伐採した木々を段の斜面に横倒しに入れた、などの丘陵東側の改変について伺うことができた。

第2節 トレンチの設定について

長岡南森遺跡の丘陵を調査するにあたり、くびれ部・墳端・段状・盛土（切土）状況、周溝の有無を確認することを目的に、斜面東西で地形の対比が可能な位置にT3を設置し、加えてT1の再調査を行うこととした。

第3節 第1トレンチ

第1次調査で、段状斜面一段目に相当する段と周溝の可能性のある溝状遺構が確認されている。くびれ部の可能性のある地形の確認と溝状遺構の性格を確認するために、第1次調査範囲を南側と西側（O10～O11G、O10～P10G）に拡張した。段状斜面の二段目に相当するの下段斜面の状況を確認するために、第1次調査範囲を東側（N10～N11G）に拡張した。段状斜面の三段目に相当する尾根の造成方法を確認するために、第1次調査範囲を東側（M10G）へ範囲を拡張した。拡張後のT1の調査面積は第1次調査範囲を含め約162㎡である。

（1）くびれ部、盛土、墳端

丘陵くびれ部の存在の確認のためO11GにおいてT1南西角を南へ2m、西へ4.2m拡張した。

地表から約34～46cm（標高215.8～215.9m）まで掘下げたところで溝状遺構との境を検出し、その境目のラインが大きく西に屈曲することを確認した。低地と丘陵の境は弧状のまま最下層まで続き、くびれ部らしき形状がみられるものの、墳丘のくびれとするにはやや屈曲が弱い感はある。

この丘陵側の旧表土層（西壁30層）の直上では、人為的様相の強い盛土が積まれている状況を確認した。旧表土は地表下90cm（標高215.4m）付近で検出された。丘陵側のこれらの土は、ブロック状に入り組むこと、丘陵側でのみ確認されること等から自然堆積とは異なる状況であり盛土と判断した。

墳端に相当する下端は地表下1.1m付近で検出された。トレンチ中央付近では旧表土層または基盤岩層を削った下端が検出された。これらの下端はトレンチの中央付近から南側の範囲で西へと弧状に大きく屈曲する。

検出された一段目の段の形状は、高さはくびれ部付近で現況約60cm、斜面の角度はトレン

チ西壁で約 50°、北壁で約 70°である。

段はトレンチ北半では地山削り出しを基本とし、トレンチ南半のくびれ部付近では盛土を行って構築したものと思われる。盛土は旧表土上に土質の異なる土を 45～55cm 盛っており、墳端に相当する下端に近い位置のものほど土が塊状に盛られている^(註1)。

(2) 溝跡

溝跡の存在および西側の溝の立ち上りの有無と範囲を確認する目的で T 1 の西側に新たに T 1 a・T 1 b を設定し調査を行った結果、T 1 から T 1 a に連続しない層があり、これらの中で土層が変化することが判明した。土層が変化する状況を確認するため T 1 の西北角を西(P10 G)へ 7.3 m 延長した。

延長部の調査は手掘りで行った。地表下 70cm 付近までは現代から古代の遺物を含む耕作土層である。地表下 1.1～1.2 m で溝状遺構の底面を検出した。底面はかたく平坦になっていた。第 1 次調査範囲の西壁から約 6 m 西に進んだ地点で地表下 80～90cm で溝状遺構の西端となる上端を検出、約 5.5 m 西に進んだ地点の地表下 1.16 m にその下端を検出した。西側の立ち上がりが検出されたことにより溝状遺構は溝跡であると判断される。溝跡の幅は上端間で約 13m、下端間で約 12m を測る。



番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	長岡南森遺跡	縄文～中世	5	長岡館跡	中世	8	中ノ目下遺跡	平安	11	水上遺跡	中世
2	稻荷森古墳	古墳	6	長岡西田遺跡	縄文、平安	9	鶉ノ木館跡	古墳～中世	12	早稲田遺跡	平安
3	長岡山遺跡	旧石器～中世	7	内城館跡	中世	10	熊の前館跡	中世	13	太子堂遺跡	平安
4	長岡山東遺跡	旧石器～中世									

第 129 図 長岡南森遺跡遺跡位置図

また、延長部の調査では中層から掘り込まれたピット群（S P 1・S P 2）が検出された。第1次調査の範囲でも同様のピットが検出されており、溝跡が一定程度埋没した段階で何らかの利用があったと考えられる。

（3）西斜面側の尾根の造成方法等の確認

T 1を東へ拡張した範囲（M10 G）でトレンチを設定し、盛土の有無を確認した。1層は現表土、36～39層はS A 1覆土、67層は攪乱と思われる。尾根頂平坦面から西斜面にかけて斜めに縦断する溝跡（S A 1）が検出され、溝の中には楕円形のピットが不均等に並んでることから柵列であると考えられる。この遺構については道の可能性も考えられたが、これに対応する溝が確認されていないので今回は柵列として報告する。溝跡は尾根頂で途切れており、溝及び柱穴の深さは5～16cmでほぼ溝底付近が残るだけで、尾根頂の平坦面は削平されたとみられる。

拡張部（N10～N11 G）において、段状斜面一段目に並行して段状斜面二段目裾も西へ屈曲する状況を確認した。表土下で地山を検出、斜面は地山を削り出して造成しており、盛土は見られない。

（4）遺物の出土状況

遺物は、溝状遺構の下層から縄文土器片及び石器が出土した。同中層からは縄文土器と古墳時代の土師器が出土した。N10～N11 Gの段状二段目に相当する段の下段斜面からは石器が出土した。

第4節 第1a トレンチ

溝状遺構の範囲と周辺地形を確認するためにT 1を西へ延長し（P10-Q10 G）T 1 aとした。現況は畑地で、水はけが悪く柔らかい。T 1 aの標高はT 1に比べて約50cm低い段になっている。

北壁側に先行してサブトレンチを掘り層毎に掘り下げた。地表下10～30cmで2層、地表下約70cmでT 1の溝状遺構底面に類似する5層を検出したが、溝状遺構の中層～下層に合する層が一部無いことから、T 1とT 1 aの間で土層が変化すると推測される。T 1 aの2層はT 1北壁の11層に、3層は16層に、4層は17層に、5層は26層に対応するとみられる（表3）。

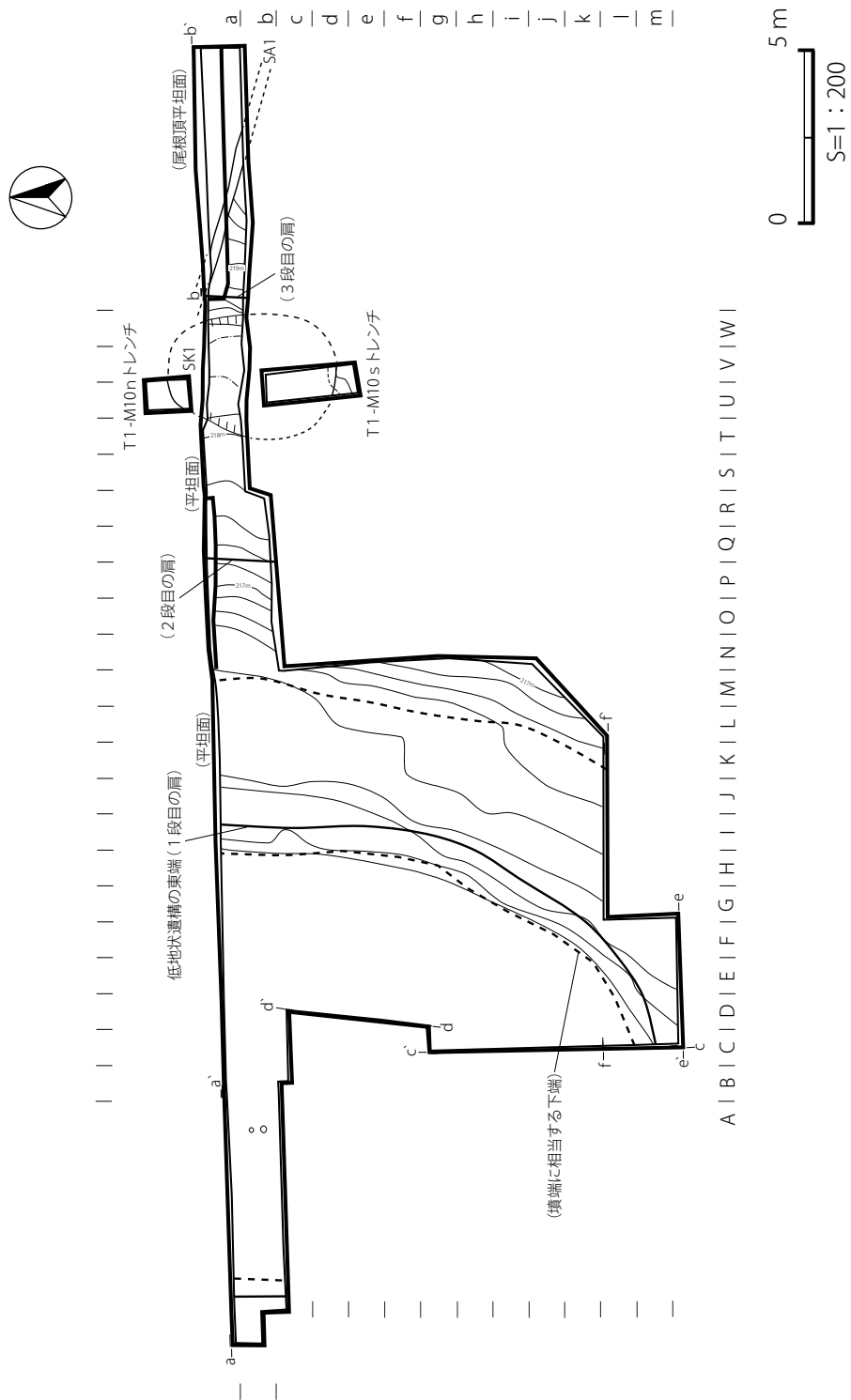
遺物は、表土層から陶器片1点と土器片が1点出土した。

第5節 第1b トレンチ

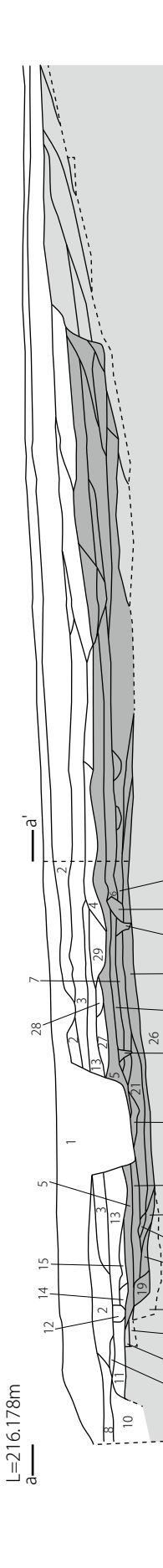
丘陵周辺の地形を確認するため、T 1 aをさらに西へ延長した先に（R10-S10 G）にT 1 bを設定した。現況は畑地で、水はけが悪く柔らかい。

北壁側に先行してサブトレンチを掘り、下層の状況を把握しながら掘り下げた。地表下約20cmで黒色土層、地表下約40cmでT 1 aの4層に対応する層を検出した。

遺物は、表土層から縄文中期の土器片等8点と土師器片1点が出土した。

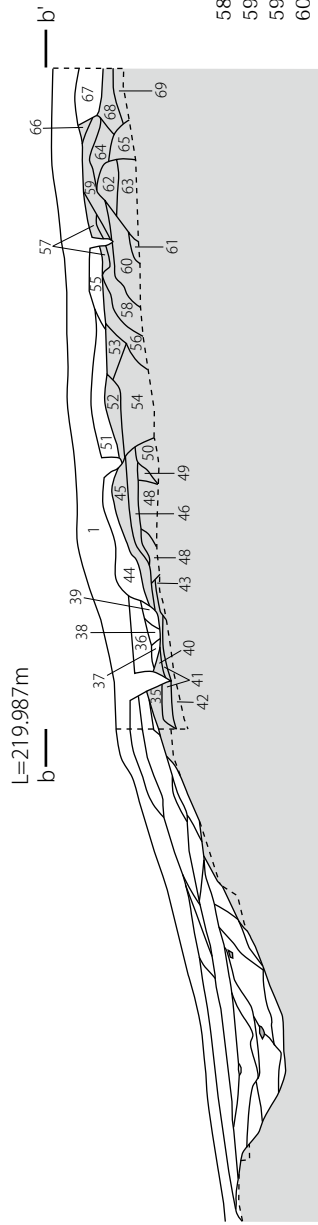


第130図 T3平坦面遺構平面



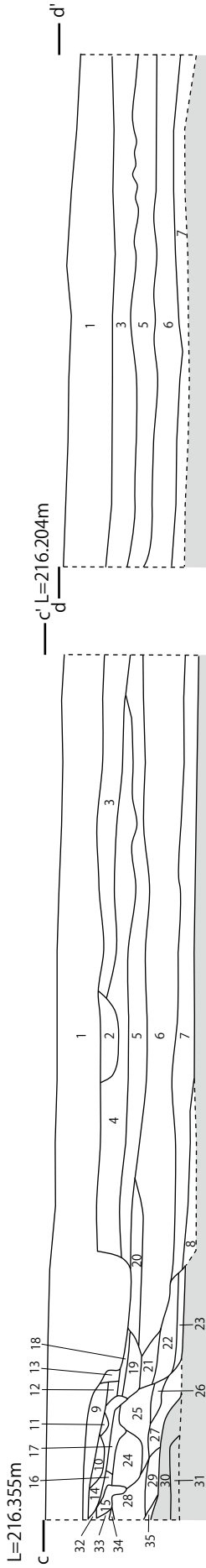
第131図 T1 (P10 G拡張部) 北壁断面図

- | | | |
|--|--------------------------------------|--|
| 1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (表土) | 13.5YR3/1 黒褐色粘質砂層 | 26.10YR5/4 黒色 粘土 |
| 2. 10YR2/3 暗褐色砂質粘土 (50mm小石、礫礫らに含む。シルト含む) | 14.5YR3/1 黒褐色砂質粘土 (少し灰色味帯びる) | 27.10YR2/1 黒褐色 粘土 (シルト入る) |
| 3. 7.5YR3/1 黒褐色砂質粘土 (礫礫ら、10YR2/3明るい黒褐色粘土混入) | 15.10YR2/1 黒褐色砂質粘土 (シルト含む) | 28. 10YR2/2 にぶい黄褐色 砂質粘土 (くすんだ淡褐色粘土混入) |
| 4. 10YR2/2 黒褐色粘土 (シルト含む) | 16.7.5YR2/2 暗オリーブ褐色粘質砂層 | 29.10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 (10YR6/2 灰黄褐色粘土・7.5YR5/8 明褐色粘土混入。粘性強) |
| 5. 10YR2/3 褐色砂質粘土 | 17.2.5YR3/3 黒褐色砂質粘土 (砂多め、粘性弱、シルト含む) | 30.7.5YR2/1 黒色 粘土 |
| 6. 10YR2/1 黒色砂混じり粘土 | 18.10YR4/4 褐色砂質シルト | 31.7.5YR2/1 黒褐色 粘土 (シルト入る) |
| 6. 10YR2/3 黒褐色粘土 | 19.7.5YR4/4 黄褐色砂質粘土 (砂多め、少しくすむ) | 32.7.5YR2/1 黒色 粘土 (シルト少し含む) |
| 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 | 20.10YR4/6 褐色粘質砂層 (粘性弱) | 33.10YR2/2 黒色 粘土 (砂混入) |
| 8. 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (礫礫ら、しまる) | 21.10YR3/4 褐色砂質シルト (砂多め) | |
| 9. 10YR3/4 暗褐色粘土 (粘性弱い、現代の攪乱) | 22.10YR4/4 明褐色粘土 (10YR3/4 暗褐色砂質粘土含む) | |
| 10. 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 (少し灰色味帯びる。砂多い) | 23.7.5YR4/6 明褐色粘土 (にぶい黄褐色粘土混入、粘性弱) | |
| 11. 10YR2/1 黒色粘土 (シルト入る) | 24.7.5YR5/8 にぶい黄褐色砂質粘土 (くすんだ淡褐色粘土混入) | |
| 12. 10YR2/1 黒色砂混じり粘土 (粘性弱、10YR3/4 暗褐色粘土混入砂層) | 25.10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 (粘性強) | |



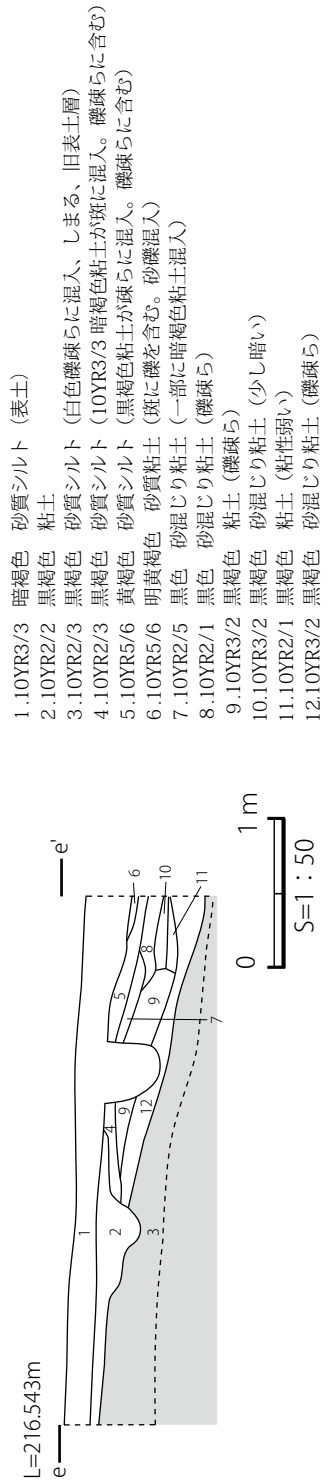
第132図 T1 (M10 G拡張部) 北壁断面図

- | | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|--|
| 36. 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト (表土) | 47. 10YR4/6 褐色 砂質粘土 (しまるやや強い、粘性やや強い) | 58. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土 (しまる、粘性強い、白色礫混入) |
| 37. 5YR4/6 赤褐色 砂質粘土 (しまる弱) | 48. 10YR4/6 褐色 砂質粘土 (しまる・粘性強い。白色粘土混入) | 59. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土 (しまる、粘性強、礫混入) |
| 38. 7.5YR3/3 暗褐色 砂質粘土 (しまる弱、礫・褐色粘土含む) | 49. 5YR7/6 くすんだ橙色 シルト粘土 (ゆるい、粘性弱) | 59. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土 (しまる、粘性強い) |
| 39. 5.5YR3/4 暗褐色 砂質粘土 (褐色粘土混入。溝跡) | 50. 7.5YR6/6 橙色 粘土 (黄白色粘土・白礫混入) | 60. 10YR5/6 黄褐色 砂質粘土 (しまる強い、粘性強い) |
| 40. 7.5YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (粘性強。溝跡) | 51. 7.5YR6/8 褐色 粘土 (粘性強) | 61. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土 (しまる、粘性強い、白色礫混入) |
| 41. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト粘土 (赤褐色粘土混入。溝跡) | 52. 5Y6/8 褐色 シルト粘土 (黄褐色粘土混入) | 62. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土 (しまる、粘性強い、礫なし) |
| 42. 5YR4/8 赤褐色 砂質粘土 (しまる弱) | 53. 10YR4/6 褐色 砂質粘土 (ゆるい、粘性弱、礫混入) | 63. 10YR5/8 黄褐色 砂質粘土 (しまるやや強い、粘性やや強い。白色粘土が全体に混入) |
| 43. 5YR5/8 くすんだ明赤褐色 粘土 | 54. 7.5YR5/8 黄褐色 砂質粘土 (ゆるい、粘性弱、礫混入) | 64. 7.5Y6/6 橙色シルト 粘土 (直径1~2cm 白色礫多く含む) |
| 44. 5YR5/8 明黄褐色 粘土 (基盤岩風化土) | 55. 10YR5/8 黄褐色 砂質粘土 (しまる・粘性強い) | 65. 10YR5/8 黄褐色 粘土 (しまる・粘性強い。白色粘土混入) |
| 45. 7.5YR5/6 明褐色 粘土 (基盤岩風化土) | 56. 10YR7/4 にぶい黄褐色 シルト粘土 (赤土・白色礫混入) | 66. 7.5YR5/8 明褐色 粘土 (10YR8/4 浅黄褐色粘土多く混入) |
| 46. 10YR4/6 褐色 砂質粘土 (ゆるい、粘性弱、礫混入) | 57. 10YR5/6 黄褐色 砂質粘土 (ゆるい粘性やや弱い、礫混入) | 67. 10YR4/4 褐色 粘土 (ゆるい。粘性弱) |
| | | 68. 10YR3/4 暗褐色 砂質粘土 (しまる強い。粘性弱) |
| | | 69. 7.5YR5/8 明褐色 粘土 (黄白色粘土混入) |
| | | 70. 5YR5/8 明赤褐色砂質粘土 |



第133図 T1西壁断面図

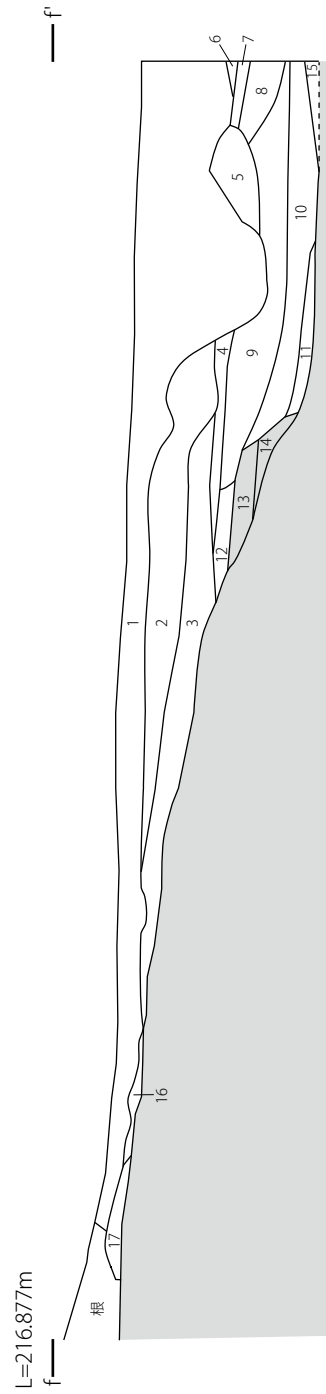
- | | | | | | | |
|-----------------|--------------------------|---------------------------|-----------------|---------------------------|-----------------|---------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色 | 砂質シルト (表土) | 砂質シルト (砂礫含む) | 13. 10YR3/3 暗褐色 | 砂質シルト (砂礫含む) | 25. 10YR2/2 黒褐色 | 砂質シルト (礫疎ら) |
| 2. 7.5YR3/2 黒褐色 | 砂質シルト (炭化物、白色礫斑状を含む。にぶい) | 砂質シルト (砂礫含む。地山の土・黒褐色粘土混入) | 14. 10YR4/4 暗褐色 | 砂質シルト (砂礫含む。地山の土・黒褐色粘土混入) | 26. 10YR3/2 黒褐色 | 粘土 (礫少ない) |
| 3. 10YR3/4 暗褐色 | 砂質シルト (白色礫疎らを含む。炭化物含む) | 砂質シルト (黒褐色粘土混り。円礫疎らを含む) | 15. 10YR5/6 黄褐色 | 砂質シルト (黒褐色粘土混り。円礫疎らを含む) | 27. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (礫疎ら。砂礫混入) |
| 4. 10YR3/2 黒褐色 | 砂質シルト (白色礫少量含む) | 砂質シルト (砂礫含む。礫含む。黒褐色粘土混入) | 16. 10YR3/4 暗褐色 | 砂質シルト (砂礫含む。礫含む。黒褐色粘土混入) | 28. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (少しくすむ。砂礫混入) |
| 5. 10YR2/2 黒褐色 | 砂質粘土 (礫含む。土器片含む。少し暗い) | 砂質シルト (砂礫、白礫含む) | 17. 10YR2/2 暗褐色 | 砂質シルト (砂礫、白礫含む) | 29. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じりシルト (砂礫含む) |
| 6. 10YR2/1 黒色 | 質粘土 | 砂質シルト (砂礫少量含む) | 18. 10YR3/2 黒褐色 | 砂質シルト (砂礫少量含む) | 30. 10YR2/2 黒褐色 | 砂質粘土 (旧表土、かたくしまる) |
| 7. 10YR2/3 黒褐色 | 砂質粘土 (砂礫含む) | 砂混じりシルト (礫か少量) | 19. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じりシルト (礫か少量) | 31. 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 (旧表土、かたくしまる) |
| 8. 10YR2/3 黒褐色 | 砂質粘土 (砂礫含む。少し粘り強い) | 砂混じりシルト (礫含む) | 20. 10YR3/1 黒褐色 | 砂混じりシルト (礫含む) | 32. 10YR5/6 黒褐色 | 砂質シルト (黒褐色粘土混入) |
| 9. 10YR3/2 黒褐色 | 砂質粘土 (砂礫含む。少し粘り強い) | 砂質シルト (砂礫含む) | 21. 10YR3/2 黒褐色 | 砂質シルト (砂礫含む) | 33. 10YR2/1 黒色 | 砂混じり粘土 |
| 10. 10YR3/3 暗褐色 | 砂質シルト (白色礫を疎らを含む) | 砂混じり粘土 (礫少ない) | 22. 10YR2/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (礫少ない) | 34. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (少し暗い) |
| 11. 10YR3/3 暗褐色 | 砂質シルト (砂礫含む) | 粘土 (砂礫含む) | 23. 10YR3/2 黒褐色 | 粘土 (砂礫含む) | 35. 10YR2/3 黒褐色 | 黒褐色 |
| 12. 10YR3/2 黒褐色 | 砂質シルト | 砂混じりシルト (礫疎らを含む) | 24. 10YR2/2 黒褐色 | 砂混じりシルト (礫疎らを含む) | | |



第134図 T1南壁断面図

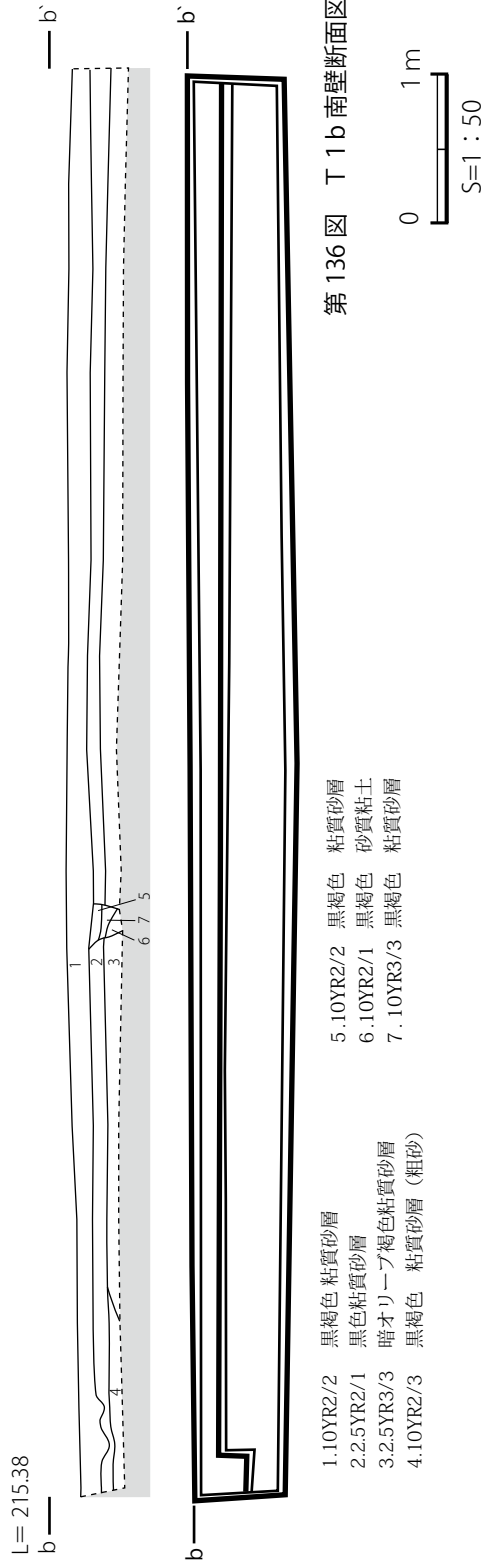
- | | | | |
|-----------------|-----------------------------------|-----------------|-----------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色 | 砂質シルト (表土) | 1. 10YR3/3 暗褐色 | 砂質シルト (表土) |
| 2. 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 | 2. 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 |
| 3. 10YR2/3 黒褐色 | 砂質シルト (白色礫疎らに混入、しまる、旧表土層) | 3. 10YR2/3 黒褐色 | 砂質シルト (白色礫疎らに混入、しまる、旧表土層) |
| 4. 10YR2/3 黒褐色 | 砂質シルト (10YR3/3 暗褐色粘土が斑に混入。礫疎らを含む) | 4. 10YR2/3 黒褐色 | 砂質シルト (10YR3/3 暗褐色粘土が斑に混入。礫疎らを含む) |
| 5. 10YR5/6 黄褐色 | 砂質シルト (黒褐色粘土が疎らに混入。礫疎らを含む) | 5. 10YR5/6 黄褐色 | 砂質シルト (黒褐色粘土が疎らに混入。礫疎らを含む) |
| 6. 10YR5/6 明黄褐色 | 砂質粘土 (斑に礫を含む。砂礫混入) | 6. 10YR5/6 明黄褐色 | 砂質粘土 (斑に礫を含む。砂礫混入) |
| 7. 10YR2/5 黒色 | 砂混じり粘土 (一部に暗褐色粘土混入) | 7. 10YR2/5 黒色 | 砂混じり粘土 (一部に暗褐色粘土混入) |
| 8. 10YR2/1 黒色 | 砂混じり粘土 (礫疎ら) | 8. 10YR2/1 黒色 | 砂混じり粘土 (礫疎ら) |
| 9. 10YR3/2 黒褐色 | 粘土 (礫疎ら) | 9. 10YR3/2 黒褐色 | 粘土 (礫疎ら) |
| 10. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (少し暗い) | 10. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (少し暗い) |
| 11. 10YR2/1 黒褐色 | 粘土 (粘性弱い) | 11. 10YR2/1 黒褐色 | 粘土 (粘性弱い) |
| 12. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (礫疎ら) | 12. 10YR3/2 黒褐色 | 砂混じり粘土 (礫疎ら) |

地山



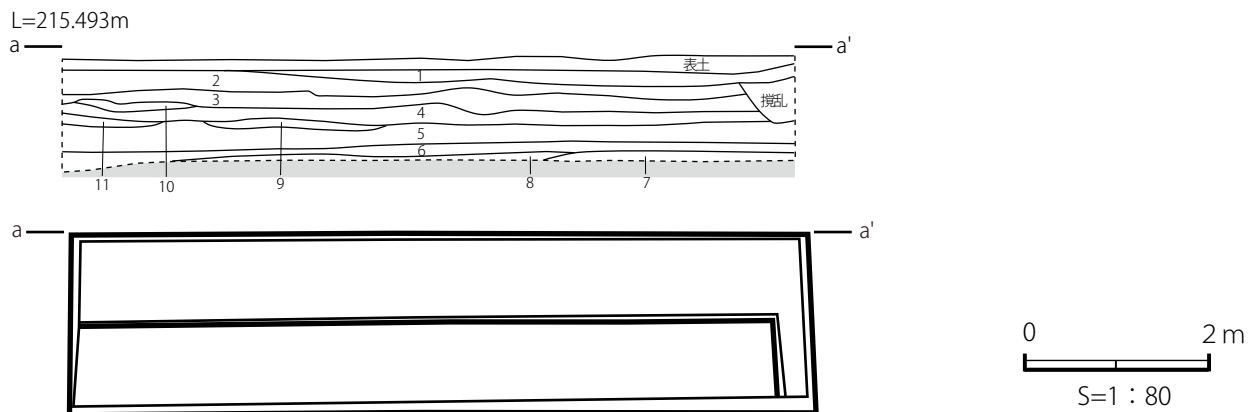
第135図 T1南壁(拡張前)断面図

- | | |
|--------------------------------|--|
| 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質粘土 (表土) | 10. 10YR2/3 黒褐色 粘質砂層 (ややしまるが13層より脆い) |
| 2. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (砂礫、土器片含む) | 11. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (粗砂、土器片、礫13cm含む) |
| 3. 10YR2/3 黒褐色 砂質粘土 (砂礫、土器片含む) | 12. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (砂礫疎らに混入) |
| 4. 10YR2/3 黒褐色 砂質粘土 (3層より粘土多い) | 13. 7.5YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (しまる。砂礫疎ら。旧表土) |
| 5. 10YR2/2 黒褐色 粘質砂層 | 14. 10YR2/3 黒褐色 砂質粘土 (かたくしまる。旧表土) |
| 6. 10YR2/2 黒褐色 粘質砂層 | 15. 10YR2/3 黒褐色 砂質粘土 |
| 7. 10YR3/1 黒褐色 砂混じりシルト | 16. 10YR4/4 褐色 砂混じり粘土 (少しくすむ。白色礫・明黄褐色粘土混入) |
| 8. 7.5YR2/2 黒褐色 粘質砂層 | 17. 10YR6/6 明黄褐色砂混じり粘土 (地山風化土) |
| 9. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (土器片含む) | |



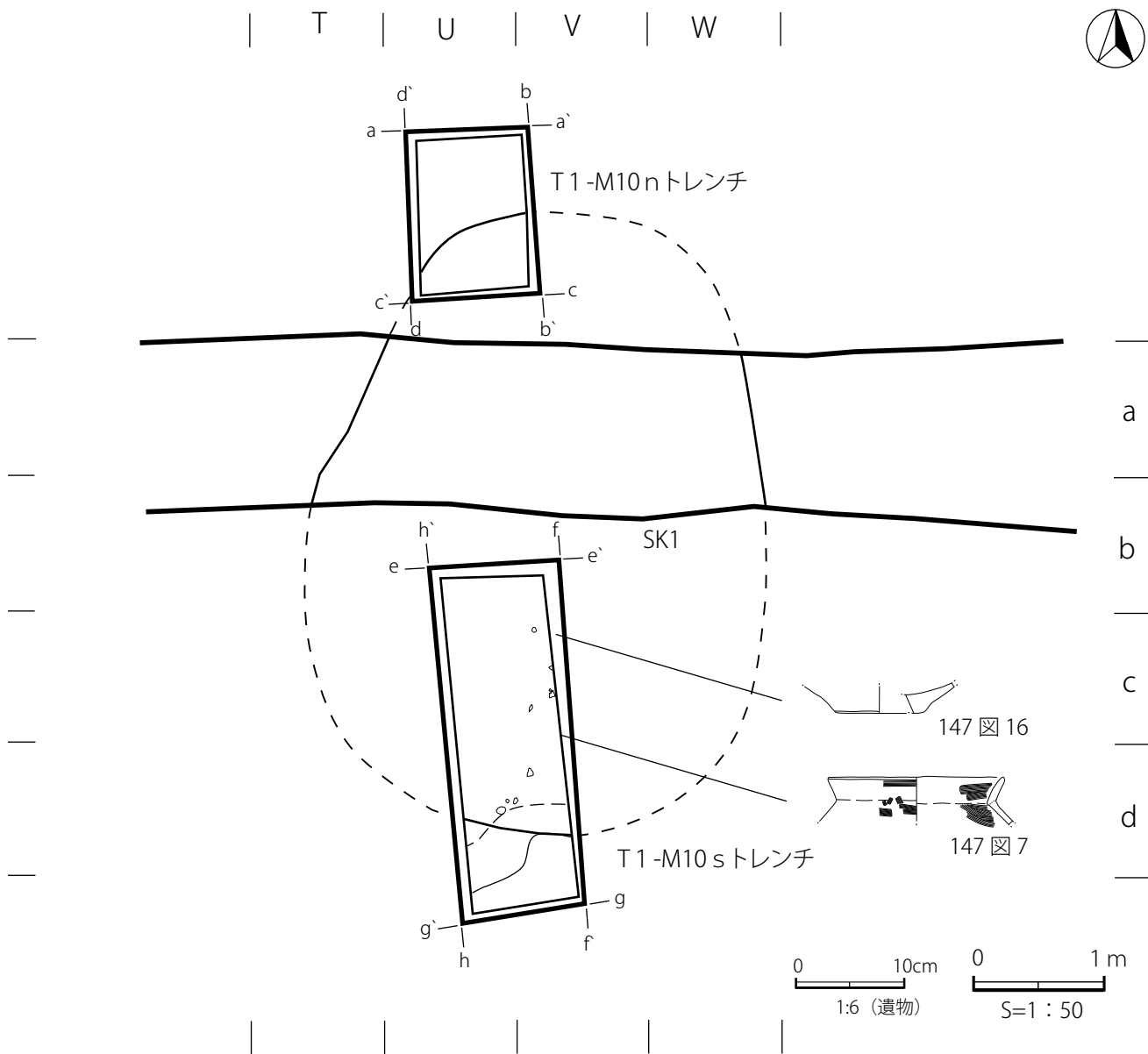
第136図 T1b南壁断面図

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 粘質砂層 | 5. 10YR2/2 黒褐色 粘質砂層 |
| 2. 2.5YR2/1 黒色粘質砂層 | 6. 10YR2/1 黒褐色 砂質粘土 |
| 3. 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色粘質砂層 | 7. 10YR3/3 黒褐色 粘質砂層 |
| 4. 10YR2/3 黒褐色 粘質砂層 (粗砂) | |



- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1.10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 (少し暗い) | 7.10YR3/3 暗褐色 砂質粘土 (しまる) |
| 2.10YR2/2 黒褐色 粘質砂層 (上半が黒味強い) | 8.2.5Y3/1 黒褐色 シルト粘土 (橙色斑混入) |
| 3.2.5Y4/1 黄灰色 粘質砂層 | 9.2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルト粘土 |
| 4.2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘質砂層 | 10.10YR2/3 暗褐色 質砂層 |
| 5.10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト粘土 | 11.2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルト粘土 |
| 6.2.5Y3/2 黒褐色シルト 粘土層 (橙色斑混入) | |

第137図 T1a 平面図・断面図



第138図 T1-M10s・T1-M10n 平面図・遺物出土図

遺構は、第2層から掘り込まれた柱穴を1ヶ所検出したが、遺物は伴わない。

第6節 T 1-M10s・T 1-M10n

第1次調査で検出されたS K 1について、確認調査委員会において溝跡の可能性を指摘されたことから、遺構の性格と範囲を確認する目的でM10グリッドのT 1の北側に幅1m×長1.5mのT 1-M10nを、南側に幅1m×長2.7mのT 1-M10sを設定・調査を行った。

発掘は遺構保存のため遺構面までとした。また、このトレンチ調査の結果S K 1は縦約4.7m×横約3.5mの土坑と判明した。

遺物は、土坑直上の流土層下部から底部が欠損した土師器甕底部（147図16）1点、土坑覆土からは9点の甕など（147図7ほか）の土師器が出土した。

第7節 第3・第3aトレンチ

T 3は丘陵北半部の東斜面の地形、成因、改変状況等を確認するため、T 1と対比可能な位置に調査地点を設定した。T 1東端部の南壁の延長線がT 3の北壁になるように幅4m×長50mのトレンチをG10～L10 Gに設定した。調査の進展に伴い段状斜面二段目の平坦面の状況を確認するため幅1m×長2mのT 3 aをJ11 Gに設定し、最終的にT 3と接続した。調査面積はT 3 aを含めて約202.7㎡である。

調査は、北壁沿いに先行してサブトレンチを設定して掘り下げ、グリッドをさらに1m×1mの小グリッドに分割し調査を進めた。

その結果、地形の現況は緩斜面であるが、斜面途中で2つの平坦面があり全体で3段になっていること、丘陵裾に浅い溝跡が廻ることが判明した。^(註2)

(1) 段状斜面三段目について

K10 Gにおいて、丘陵段状斜面三段目（頂上）、下段斜面の下端を検出した。

丘陵頂上における遺構は、T 1から続く柵列溝跡？（S A 1）1条と現代の農業に伴う円形の溝跡1ヶ所を検出した。S A 1は著しい削平を受けたとみられ底面近くのみ残存していた。円形の溝跡はS A 1がこの溝に切られていること、溝の覆土からはビニールなど廃棄物が出土したことから現代の攪乱と判断した。

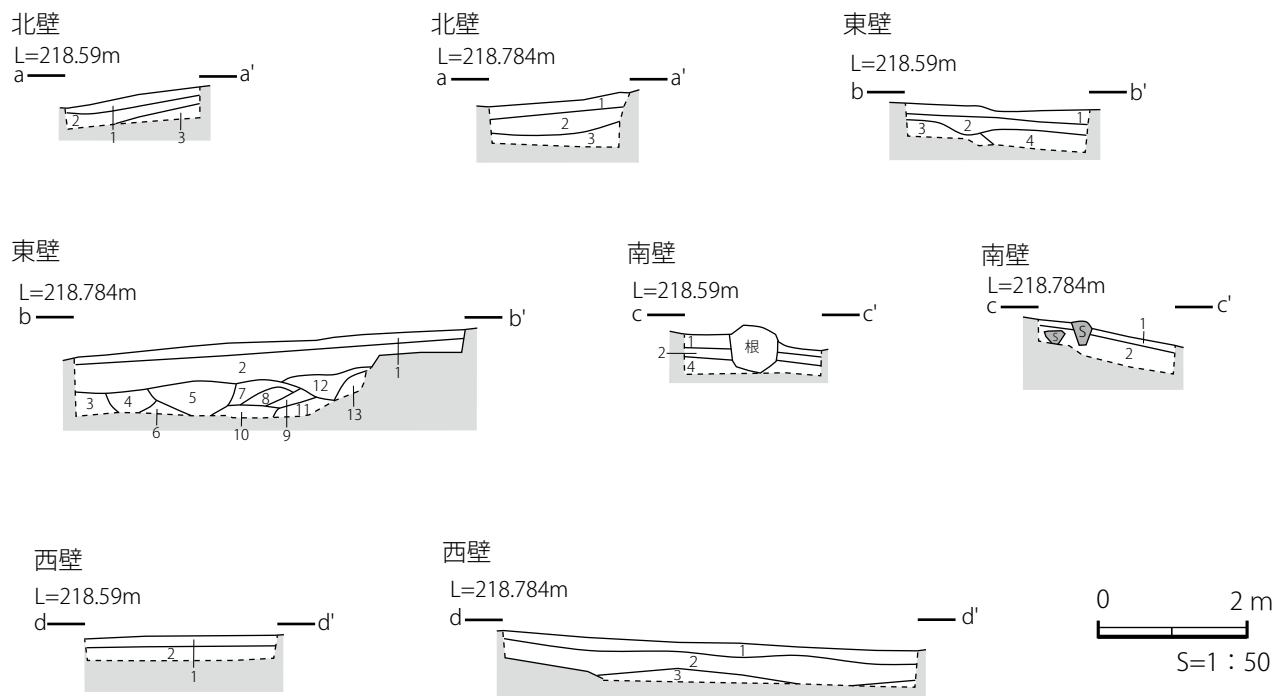
また地形を確認するため、北壁に加え南壁にもサブトレンチを設定した。丘陵斜面は現代の攪乱により西に後退していると判断された。丘陵の頂上部については、土層観察により盛土の可能性が高いと判断された。盛土範囲は円形の溝跡の半ば付近までと考えられる。盛土は斜面側では地山を削平したのち盛り土しているとみられる（北壁第32・37・38・40層、南壁第9・12～15層）。その内側は概ね水平な層になっている。

(2) 段築二段目について

K10 G～J10 G地点において、幅約4mの平坦面を段状斜面二段目の平坦面を確認した。

この平坦面上端から東側のJ10 Gにおいて地表下約1mで下段斜面の下端を検出した。下段斜面は改変が著しい。

遺構は、平坦面上で土坑1ヶ所（S K 2）と現代の暗渠管や農業用溝跡数条を検出した。土坑からは中世のかわらけが出土した。S K 2の覆土採取の炭化物は放射性炭素年代測定で2σ 暦年代範囲で682AD(83.3%)779ADを示した。S K 2が古い土坑を切っているためその炭化材が混入したとも考えられる。現代の暗渠管と農業用の溝跡の深さと傾斜角度等から、これらの農業用設備の使用時期にこの平坦面が今よりも地表に近い位置にあり、また平坦に近い斜度だったと判断される。追加したT 3 aからは土坑1ヶ所（S K 3）を検出した。S K 3は2段目を切土したのち、盛土を行う前に掘られたと思われる。



第139図 T 1-M10s、T 1-M10n 断面図

T 1 M 1 0 n

- 1.7.5YR3/2 黒褐色 シルト粘土
- 2.7.5YR3/3 暗褐色 シルト粘土
- 3.7.5YR4/4 褐色 シルト粘土
- 4.10YR2/3 黒褐色 砂質粘土

T 1 M 1 0 s

- 1.7.5YR3/2 黒褐色 シルト粘土
- 2.7.5YR3/3 暗褐色 砂質粘土
- 3.7.5YR2/1 黒色 シルト粘土（しまる）
- 4.7.5YR2/2 黒褐色 砂質粘土
- 5.7.5YR2/3 極暗褐色 砂質粘土（ゆるい）
- 6.7.5YR3/2 黒褐色 シルト粘土（礫混入）
- 7.7.5YR2/2 黒褐色 シルト粘土
- 8.7.5YR2/3 極暗褐色 シルト粘土
- 9.7.5YR3/2 黒褐色 シルト粘土（ゆるい）
- 10.7.5YR3/1 黒褐色 シルト粘土（ゆるい、粘性弱）
- 11.7.5YR2/2 黒褐色 シルト粘土（7.5YR3/4 暗褐色粘土混入）
- 12.7.5YR2/2 黒褐色 シルト粘土（粘性有り）
- 13.7.5YR2/3 極暗褐色 シルト粘土

1次調査と今次調査の北壁対比

今次調査	1次調査
3層	= 8層
4層	= 12層
5層	= 13層
6層	= 14層
7層	= 15層

表3 土層対応表

西壁と北壁の対比

今次調査	1次調査
3層	= 8層
4層	= 12層
5層	= 13層
6層	= 14層
7層	= 15層

西壁と南壁（拡張後）の対比

西壁	南壁
1層	= 1層
28層	= 12層
32層	= 5層
33層	= 8層
34層	= 10層
35層	= 3層
15層	= 6層

壁と南壁（拡張前）の対比

西壁	南壁
1層	= 1層
5層	= 6層
6層	= 8層
7層	= 10層
8層	= 15層
20層	= 7層

平坦面を面的に精査したところ、平坦面の肩に沿って黄褐色の地山が帯状に露出し、その内側に黒褐色の土が堆積する状況を確認した。一見すると溝跡又は竪穴住居跡にも見えるため、遺構の性格や範囲の把握及び地形の成因を調査する目的で北壁及び南壁にサブトレンチを設定し、範囲を調べるために T 3 a を追加した。

その結果、遺構の平面形や柱穴が無いこと等から一般的な竪穴住居跡とは考えにくく、段の平坦面の基盤となる地山を掘り窪めた幅 3.2 ~ 4 m の溝跡のような遺構であることが判明した。遺構は幅に比して浅く、その断面形状は逆台形状を呈する。土手状の掘り残しが段の上端に沿ってありこれは段の築造に関連する遺構である可能性が考えられる。遺構検出時に溝跡の覆土に見えた層は、基盤の地山層の上に平坦に積み重ねられた盛土層であるかもしれない。段築二段目に相当する段の平坦面は現状では南壁の 17 層、30 層、38 層の盛土上面である。

平坦面の造成方法は、地山を概ね平坦に削って平坦面の基底を造っているが、下段斜面の上端となる肩部は地山を土手状に掘り残し、地山由来の土で土手を嵩上げした後、その土手の内側に概ね水平に土を盛って平坦面を造成しているとみられる。盛土は、黒色層と地山由来の黄色粘土を多く含む褐色層の互層状の堆積が見られ、盛土中層（南壁第 22 層）から採取した炭化物の 2σ 暦年代範囲は 233AD(95.4%)342AD、盛土上層（南壁第 17 層）から採取した炭化物では 231AD(95.4%)341AD という結果が出ている。

平坦面上と盛土からは縄文土器と古墳時代の土器を検出した。盛土の縄文土器は元々の旧表土に含まれていたものと考えられる。底面に近い盛土には多くの古墳時代の土器を含む。器台の出土数が多い。

(3) 段築二段目について

J10 G の斜面は攪乱が著しいため、トレンチの北側半分、北壁から約 2 m の幅については地山まで掘り下げて土層を確認した。

J10 G において、地表下 0.9 ~ 1 m で幅約 4 m の平坦面を検出した。段築一段目の平坦面と思われる。この平坦面上端から東へ約 30cm の地点において地表下約 1.3m で斜面の下端を検出した。斜面の角度は 50 ~ 55° である。

平坦面は旧表土を削り造成している。段は残存状況が悪く、現状では盛土は確認できない。

旧表土層からは縄文土器や石器が出土した。平坦面上の攪乱層からは古墳時代の土師器、古代の須恵器が出土した。

(4) 周溝に相当する溝跡について

I10 G ~ H10 G で丘陵裾に深さ 10 ~ 50cm の溝跡が廻ることを確認した。溝跡は全体的に残存状況が悪く、その範囲については土層観察や面的な精査に加え、転石等の堆積状況からも検討した。溝の幅は 10 ~ 12m とみられる。

平坦面上と盛土からは縄文土器と古墳時代の土器を検出した。盛土の縄文土器は元々の旧表土に含まれていたものと考えられる。底面に近い盛土に多くの古墳時代の土器を含む。

(5) 溝跡東側の平坦地について

周溝に相当する溝跡の東側は平坦地になっている。黄褐色層上は攪乱層で削平されていると

思われる。この黄褐色土層はT 1でも低地状遺構の底面として検出されている。

黄褐色の土層の状況を確認するため北壁にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、深さ60cm程で丘陵の旧表土の上に堆積していることが、さらに黄褐色層上面から60～70cm下で白竜湖周辺の低湿地帯黒色粘土層を確認した。この泥炭土の放射性炭素年代測定結果は2σ暦年代範囲5645BC(95.4%)5554BCであった。黄褐色層は泥炭層を覆う形で水の流れによって堆積した層と考えられる。

この平坦地ではHGを中心に遺構、遺物が検出された。遺構は掘立柱建物、ピット、土坑で主に古代の遺構と思われる。遺物は須恵器の坏や大甕等が出土した。攪乱層からは古墳時代の土師器(壺等)も出土した。

(6) 遺物の出土状況について

丘陵頂上および同様に段築二段目も殆ど遺物が出土しなかったため丘陵斜面はすでに削平されたと思われる。

遺物は主に段築二段目に相当する段の平坦面上及び盛土内、丘陵裾部の周溝に相当する溝跡覆土、平地部から出土した。溝跡の土器の出土状況は、斜面からの転落や攪乱の影響等の二次的な堆積によるものと思われる。

縄文時代の遺物は、主に段築一段目に相当する段の平坦面からその下段斜面に残る旧表土層とその上層の攪乱層、周溝に相当する溝跡の覆土から出土した。

古墳時代の遺物は、主に段築二段目に相当する段の平坦面上及び盛土内と、段築一段目に相当する段の平坦面からその下段斜面にかけての攪乱層、周溝に相当する溝跡の覆土・攪乱層、平地部の攪乱層から出土した。段築二段目に相当する段では、盛土下層からの出土が多く、器台、小型丸底埴、二重口縁壺等が見られる。盛土最下層からは、147図9、10、11、16、18、19、21、23、24、26が出土した。最下層よりやや上からは、146図13、15が出土した。

平坦面上からは、147図8、19、20が出土した。平坦面上の土器は尾根方向から流れ込んだものとも考えられる。二段目の段の下段斜面では、攪乱層から147図9が出土した。周溝に相当する溝跡付近では、二重口縁壺、甕等が溝跡覆土や攪乱層から出土しており、溝跡覆土からは147図6、攪乱層からは147図2、18が出土した。東側の平地部からは高坏、器台、壺等が出土しており、攪乱層から147図14、17、20、148図1、17が出土している。

古代の遺物の出土状況は、段築一段目に相当する段の平坦面上の攪乱層と周溝に相当する溝跡東半の攪乱層から出土した。溝跡の東側にあたるHGでは遺構の数に比べ古代の遺物が少なく、逆に古墳時代の遺物が攪乱層に多く含まれることから、HG付近では古代の包含層まで削平を受けており、後に古墳時代の遺物が含まれる土で埋められているとも考えられる。

中世の遺物は、SK 2覆土から燈明皿として使用されたかわらけが2点出土した。

(8) G 10～110の遺構について

平地部で掘立柱建物2棟とピット群、土坑を検出した。

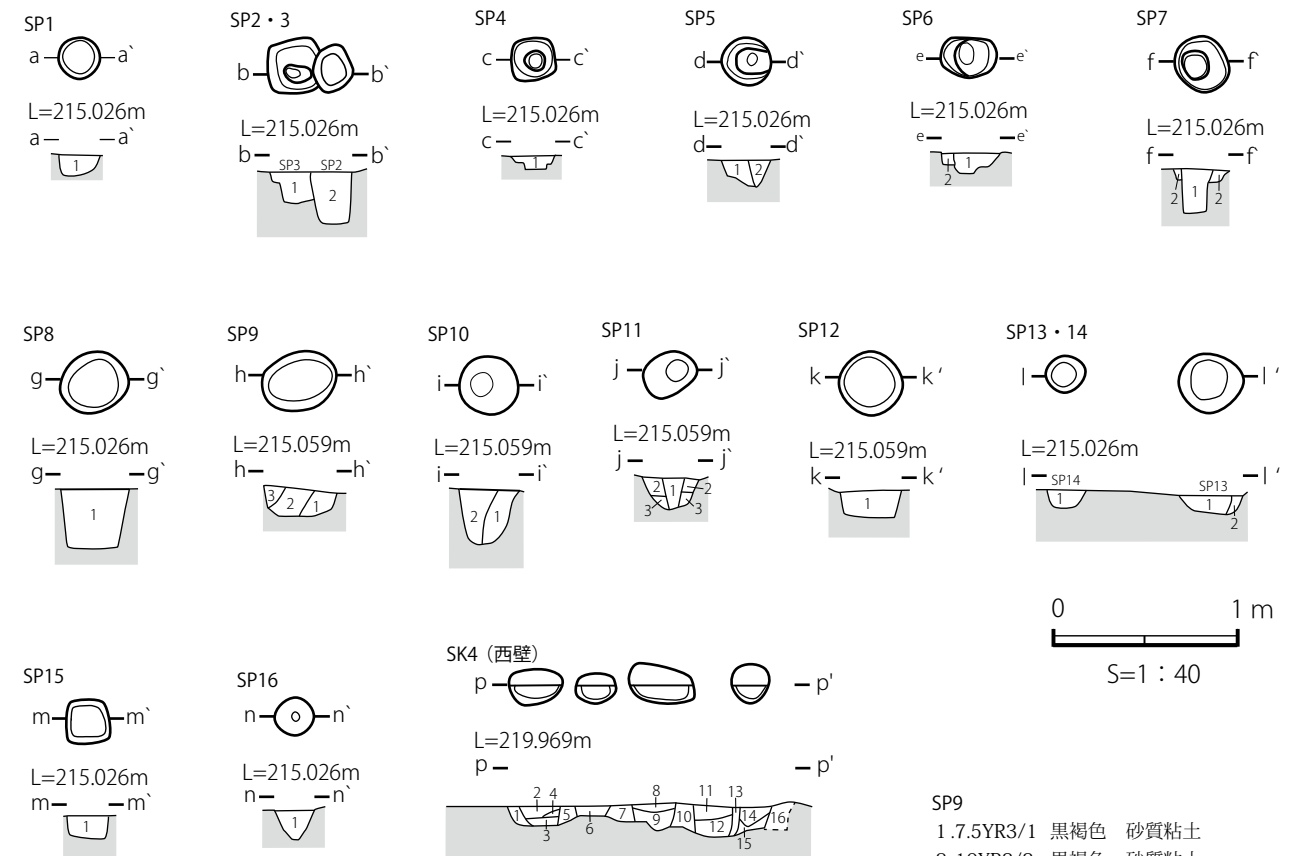
SB 1(S P 17、21、25)は柱間が芯々150～180cmで、S P 17とS P 25の平面形は隅丸の長方形である。側柱は調査範囲の南側に続くと思われるが規模は不明である。柱穴は溝

跡覆土の上から掘り込まれている。

S B 2 (S P 8、9、12、13) は柱間が芯々 100 ~ 200cm で、柱穴は円形及び楕円形である。建物は調査範囲の南側に続くと思われるが規模は不明である。

S K 4 は長軸 188cm × 短軸 100cm の土坑である。覆土中層に巨礫を含む。覆土から土師器片が出土した。S B 2 に先行する遺構と思われる。

S P 17 ~ S P 26 は、溝跡の覆土上面から掘り込まれており、溝跡より新しい遺構として捉えることができる。その遺構面のレベルは溝跡東側の S P 1 ~ 16 の遺構面とほぼ同一で、時期的に近い時代の遺構と考えられる。ピットの切り合いや S K 4 と S P 8 の切り合い等から複数の時期があると考えられる。



SP1
1.10YR2/3 黒褐色 砂質粘土

SP2・3
1.7.5YR2/1 黒色 粘質砂層
2.5YR2/1 黒色 砂質粘土

SP4
1.5YR2/1 黒色 砂質粘土

SP5
1.7.5YR2/1 黒色 粘質砂層
2.10YR2/2 黒褐色 砂質粘土
(黄褐色粒混入)

SP6
1.10YR2/3 黒褐色 粘質砂層
2.10YR2/2 黒褐色 砂質粘土

SP7
1.7.5YR2/3 黒色 粘質砂層
2.10YR4/4 黒褐色 粘質砂層

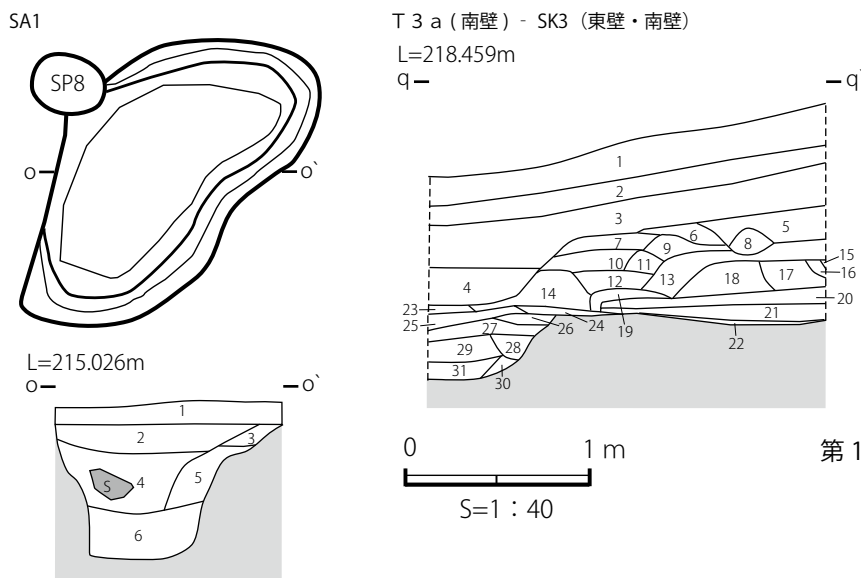
SP8
1.10YR2/1 黒色 砂質粘土

SP9
1.7.5YR3/1 黒褐色 砂質粘土
2.10YR2/2 黒褐色 砂質粘土
(黄褐色粘土塊多く混入)
3.10YR2/2 黒褐色 砂質粘土

SP10
1.7.5YR1.7/1 黒色 砂質粘土
2.10YR2/1 黒色 砂質粘土
(黄褐色砂質粘土混入)

SP11
1.10YR2/2 黒褐色 粘質砂層
2.10YR2/2 黒褐色 粘質砂層
3.7.5YR2/1 黒色 砂質粘土

第 140 図 G10 ~ I10 の遺構断面図 (1)



第141図 G10～I10の遺構断面図(2)

SP12

- 1. 10YR2/1 黒褐色 粘質砂層

SP13・14

- 1. 10YR2/3 黒色 粘質砂層
- 2. 10YR3/2 黒色 粘質砂層

SK4 (西壁)

- 1. 10YR2/3 黒褐色 粘質砂層
- 2. 10YR2/1 黒褐色 砂質粘土
- 3. 10YR2/1 黒色 砂質粘土
- 4. 7.5YR1.7/1 黒色 粘土
- 5. 10YR2/2 黒褐色 粘土
(黄褐色粘土が斑に混入)
- 6. 2.5Y2/1 黒色 砂質粘土

SA1

- 1. 10YR2/3 黒褐色 粘土 (橙色斑あり)
- 2. 7.5YR5/6 明褐色 粘土 (黒褐色粘土混入)
- 3. 10YR2/3 黒褐色 粘土 (明褐色粘土混入)
- 4. 7.5YR5/6 明褐色 粘土
- 5. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土
(10YR3/3 暗褐色粘土混入)
- 6. 10YR2/3 黒褐色 砂質粘土 (橙色斑混入)
- 7. 10YR3/4 暗褐色 砂質粘土
(明褐色粘土混入)
- 8. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土
- 9. 10YR3/4 暗褐色 砂質粘土
- 10. 10YR3/3 暗褐色 砂質粘土
(褐色粘土混入)
- 11. 10YR3/4 暗褐色 砂質粘土
- 12. 10YR2/3 黒褐色 粘土
(褐色粘土斑に混入)
- 13. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土
- 14. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土
(暗褐色粘土混入)
- 15. 10YR3/3 暗褐色 砂質粘土
- 16. 10YR3/3 暗褐色 砂質粘土
(褐色粘土多く混入)

SP15

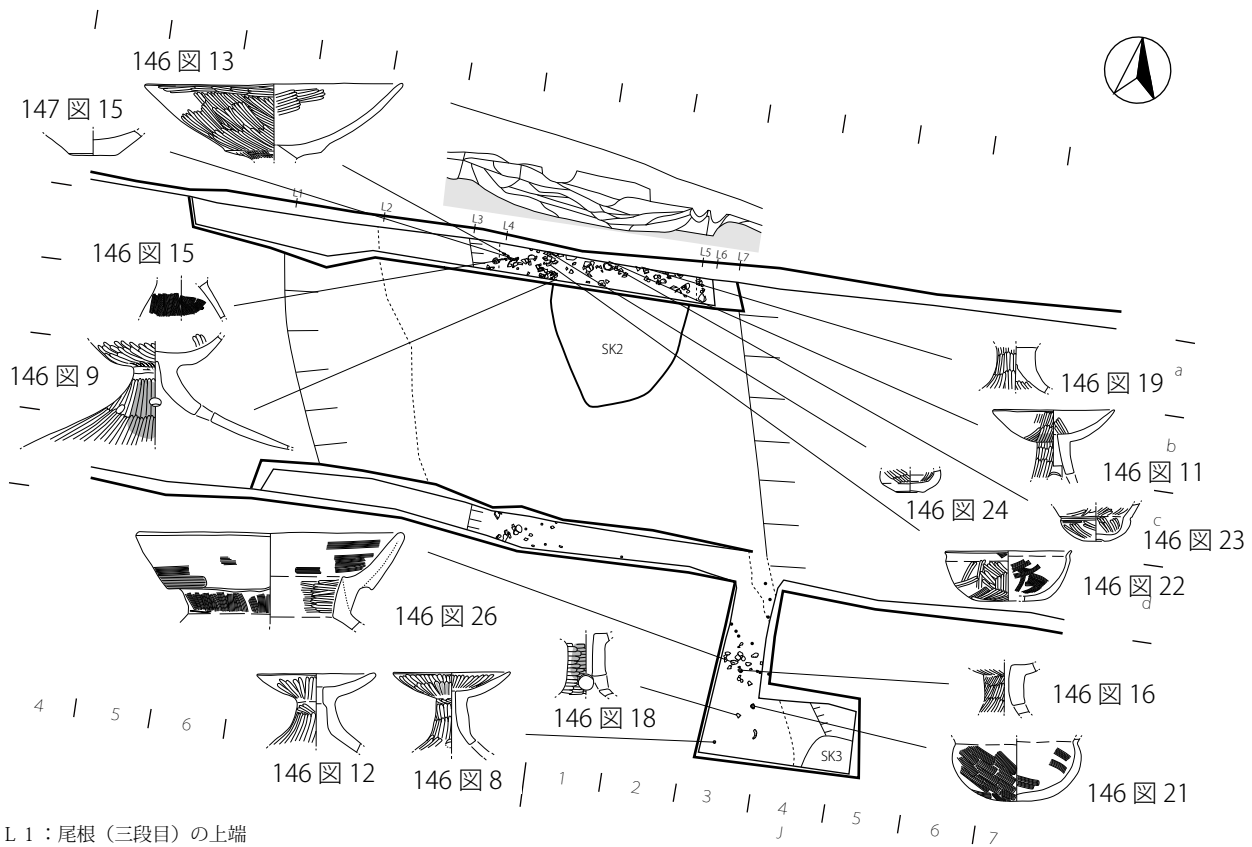
- 1. 7.5YR2/1 黒色 砂質粘土

SP16

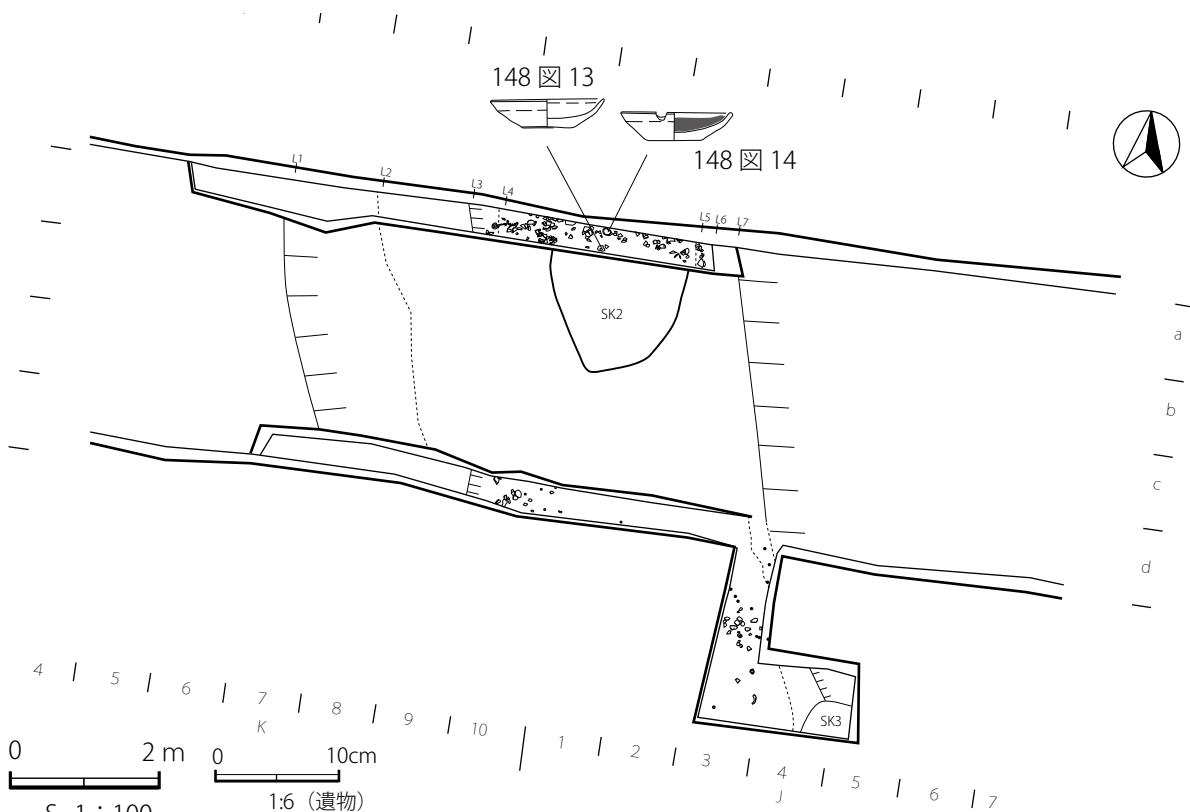
- 1. 10YR2/2 黒色 砂質粘土
(黄褐色粒少し混入)

T 3 a (南壁) - SK3 (東壁・南壁)

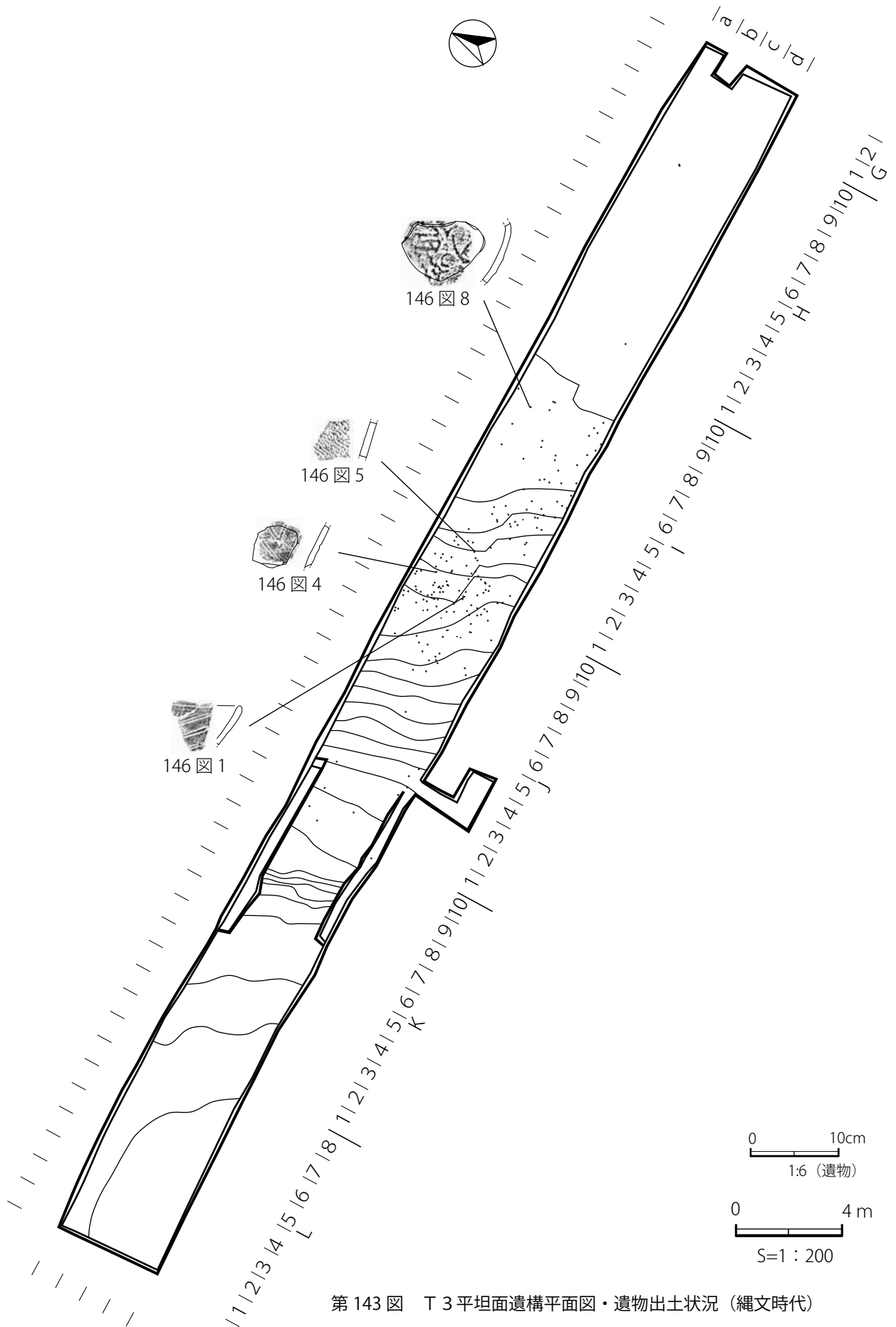
- 1. 表土
- 2. 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト (礫疎らに含む)
- 3. 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト (礫と炭化物斑に含む、粘性弱、しまる強い)
- 4. 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト (礫を斑に含む)
- 5. 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト
- 6. 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト
- 7. 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト (微細な礫を斑に含む)
- 8. 7.5YR3/1 黒褐色 砂質シルト (橙色粘土・土器片含む)
- 9. 7.5YR3/1 黒褐色 砂質シルト
(少しくすむ。暗褐色粘土混入)
- 10. 10YR2/2 黒褐色 砂質粘土 (礫少ない)
- 11. 10YR2/2 黒褐色 粘土 (ブロック状に地山の黄褐色粘土を含む)
- 12. 10YR2/1 黒色 粘土 (礫少量含む)
- 13. 10YR2/2 黒褐色 砂質粘土 (ブロック状に黄褐色粘土を含む)
- 14. 10YR2/1 黒色 粘土
- 15. 10YR2/2 黒褐色 粘土
- 16. 10YR4/4 褐色 粘土 (微細な礫混入)
- 17. 7.5YR3/1 黒褐色 粘土 (ブロック状に黄褐色粘土を含む。粘性やや強、しまるやや弱)
- 18. 10YR3/2 黒褐色 砂質粘土 (土器を含む)
- 19. 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト (かたくしまる。斑に礫を含む)
- 20. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (礫斑に含む)
- 21. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (礫含む)
- 22. 10YR4/4 褐色粘土 (細礫混入)
- 23. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (微細な礫を斑に含む)
- 24. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (ブロック状に黄褐色粘土を含む)
- 25. 7.5YR2/2 黒褐色シルト (細礫多く含む、地山の土少し含む)
- 26. 2.5YR2/1 黒色粘土
- 27. 2.5YR3/1 黒褐色粘土 (地山の土少し混入。粘性弱い)
- 28. 10YR2/1 黒褐色粘土 (地山の土少し混入。粘性弱い)
- 29. 10YR3/1 黒褐色粘土 (小礫・土器片含む。斑に地山の土混入)
- 30. 7.5YR2/1 黒色粘土 (地山の土少し混入。粘性弱い)
- 31. 7.5YR2/1 黒色粘土 (地山の土少し混入。少しくすむ)
- 32. 7.5YR2/1 黒色粘土 (地山の少し土含む、粘性弱い)



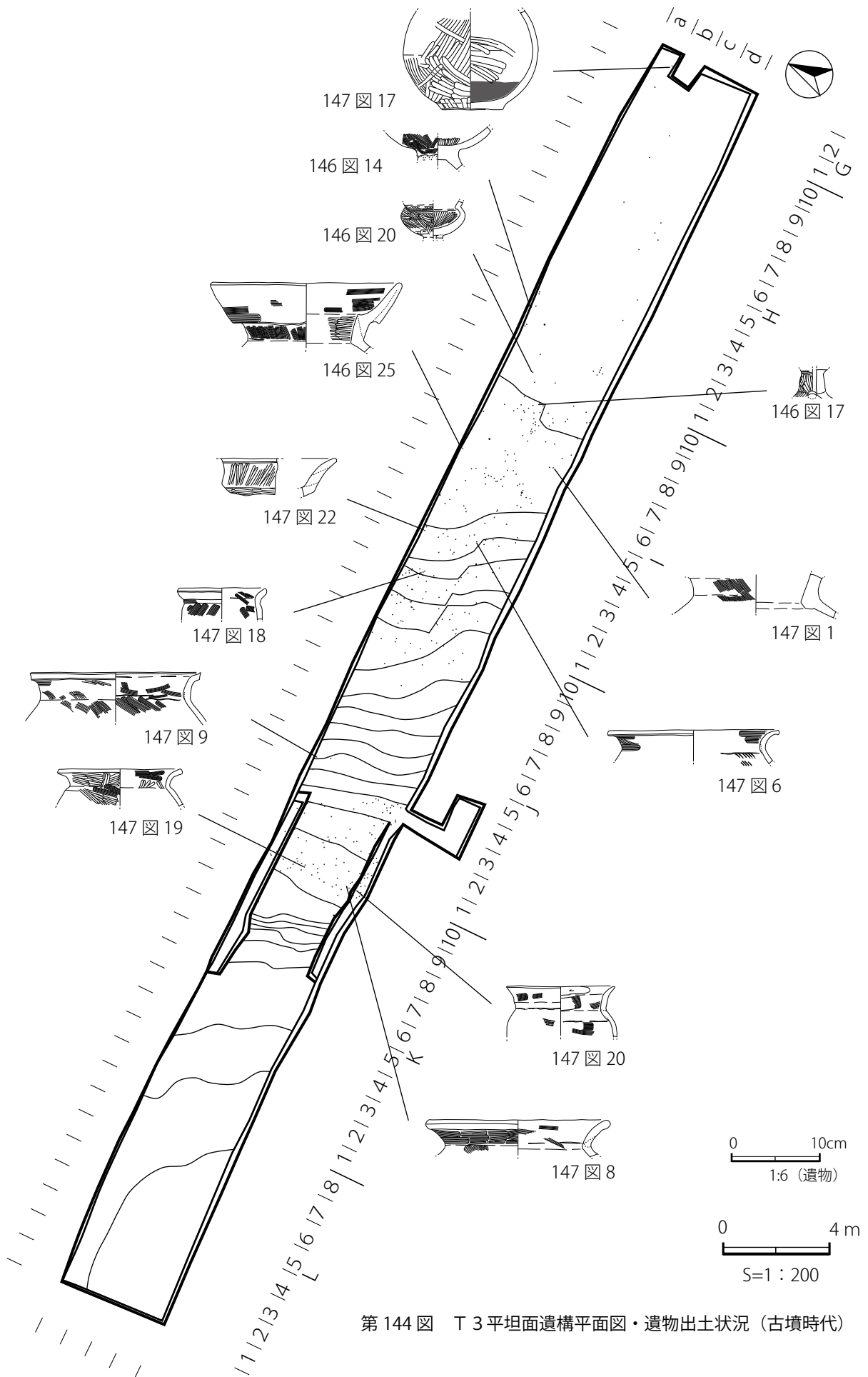
- L 1 : 尾根 (三段目) の上端
- L 2 : 尾根 (三段目) の下端
- L 3・L 6 : 平段波落込みの上端
- L 4・L 5 : 平段目落込みの下端
- L 7 : 平坦面上端 (二段目の肩)
- L 6-17 : 土手状の掘り出し上面



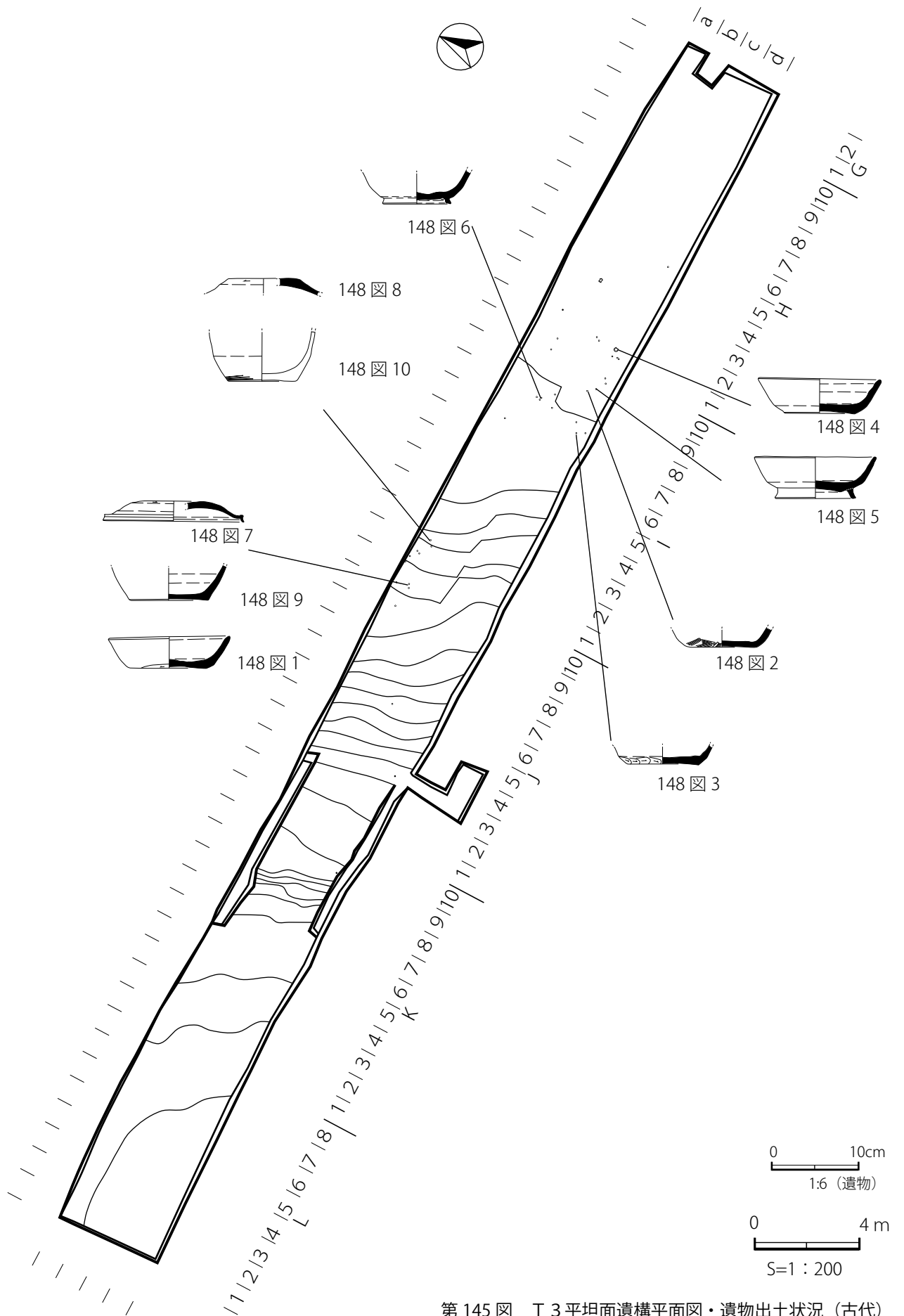
第 142 図 T 3 平坦面 (二段目) 遺構平面図・遺物出土状況 (古墳時代・古代)



第 143 図 T 3 平坦面遺構平面図・遺物出土状況（縄文時代）



第144図 T3平坦面遺構平面図・遺物出土状況(古墳時代)



第145図 T3平坦面遺構平面図・遺物出土状況(古代)

第8節 出土遺物

長岡南森遺跡から出土した遺物は概ね、縄文時代早期・古墳時代前期・奈良～平安時代・中世の4時代に分類できる。なおこの章では土器の特徴を述べるのみとし、大きさなどの詳細については観察表を参照にしていきたい。また、出土した土器の復元を行ったところ破片が大半で実測に至るまで復元できた遺物はごく一部である。

(1) 縄文時代

第146図1～8である。遺跡から出土した縄文土器は破片が大半で図化できたものは僅少であり、図化できたものでも器種等は不明である。しかし文様が確認できる土器を観察すると貝殻沈線文・沈線文・羽状縄文など縄文早期の様相が窺える。

(2) 古墳時代

古墳時代の土器について、器台・丸底碗・大型壺・甕・小型甕等を図化し掲載した。この遺跡の古墳時代の土器の特徴として比較的古い土器が出土していること、一般集落と比較して器台の比率が高いことである。

まずは高坏について脚部が中空で坏部まで貫通しているものと貫通していないものの二種類に分類できる。また坏部が深いものと浅いものに分類できるが、残念ながら坏部の形状がわかるものは半数以下である。

そしてもっとも特徴的な器台は146図9で坏部の口唇は欠損しているものの下方に段があり、裾部が大きく広がる形状で透孔がある。器厚が薄く表面は丁寧なミガキが施されたものである。この遺跡と同じ米沢盆地内に位置する米沢市横山古墳M1号(2000手塚孝ほか)より出土した器台と類似していることから、両遺跡の器台は同時期のものと思われる。また山形県外では福島県会津坂下町の宮東遺跡第1号周溝墓から出土した高坏も類似している。146図10・11は坏部が緩やかに内弯し器壁が薄く丁寧にミガキが施されている。脚部が中空で直線部分がやや長く坏部まで貫通している。12については若干器壁が厚いものの坏部に、また坏部のない146図16～19についても坏部まで貫通する中空脚をもつ。そして器台のうち数点には赤色加工が施されている。また、特殊器台(146図20)は、山形県内では山形市の服部遺跡・藤治屋敷遺跡(2004高桑弘美ほか)、米沢市の鎌倉上遺跡(2010山形県教委)、白鷹町の廻り屋遺跡(1995鈴木良仁)で出土している。

高坏について、146図13は大型坏の坏部で口縁はやや内弯しながらも直行気味に外に開いている。全体的に薄い器壁で丁寧なミガキが施されている。146図14は坏部の一部と脚部の一部しか確認できないが、坏部は丸碗状、脚部は「ハの字」状と思われる。

碗類について、有段大型碗2点、有段小型丸底碗4点を図化することができた。146図21は大型丸底碗で口縁が「くの字」状になっており、やや磨滅が目立ち使用感がある。146図22はやや平底気味の大型碗で口縁が「くの字」状になっている。146図23・24は小型丸底碗で体部が小さく内外面ともにミガキが施されている。サイズから考えて小型碗はミニチュア土器と思われる。

続いて壺についてである。壺と思われる土器は 146 図 25～26、147 図 1～5 で、いずれも有段の複合口縁など装飾口縁壺が出土している。146 図 25・26 は器壁が厚く重い。26 は口唇に細かな刻みが施されているものの、表面のハケメを消さずに棒状浮紋を簡略した細長いユビナデ（か？）の文様が確認でき、粗雑さが目立つ^(註3)。また頸部から体部まで残存しているのは 146 図 25・147 図 1 のみであるが、146 図 25 は頸部から体部にかけて鋭角的な「くの字」を描いている。147 図 1 は口縁部は欠損しているがおそらく有段の複合口縁を持つ壺の頸部と体部と思われる。147 図 10・11 は壺の体部と思われるが、器壁は薄く古いものと思われる。

甕について図化できたものを見ると、口縁の残存するものについてはそのほとんどが単純口縁で、その中でも「口唇部が大きく外反する口縁」（147 図 6・8・9）と「直行する口縁」（147 図 7）の二種類に分類できる。もっとも特徴的なのは 147 図 9 のいわゆる「能登甕」と呼ばれるタイプで、頸部が外反し口唇部先端をつまみあげ「コの字」状の口縁帯を持つ甕である^(註4)。肩の張りがやや弱い形状と想像される。

147 図 12～16 は甕もしくは壺の底部とみられる。全体的に底部径が小さく、くぼみを作っている。12 はススが外面の全面に付着している。また 14 は底部外面に火はねとみられる痕跡がある。16 について底部は火はねなど使用痕が顕著で使用中に何らかの衝撃により粘土の継ぎ目がはがれ欠損したものと思われる。

147 図 17～20 は小型壺あるいは甕とみられる。147 図 17 は小型壺で、内外面ともにコゲ痕がみられ、煮炊きなどに使用されたと思われる。口縁は外反しややつまみ出しがある。

(3) 古代

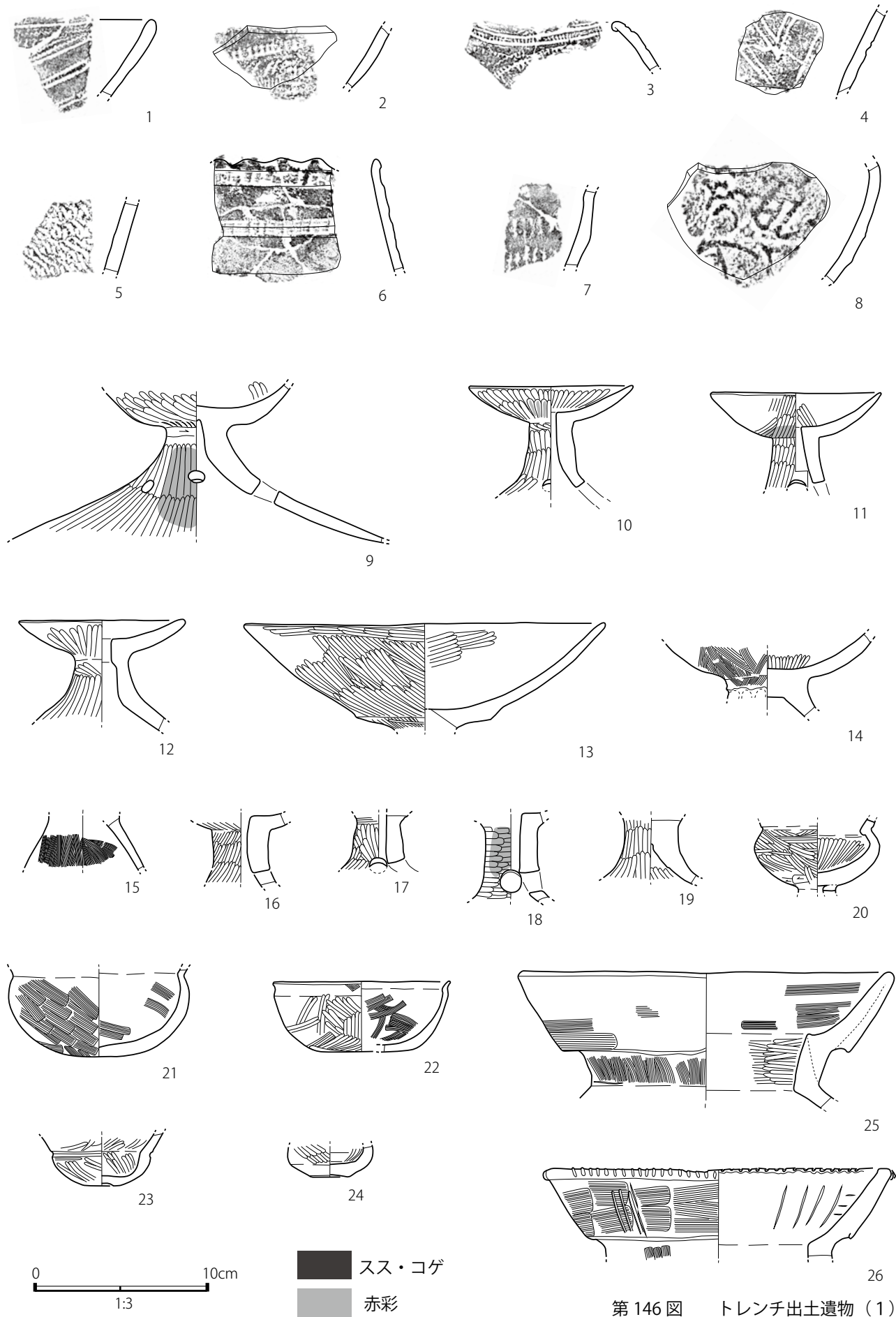
今回図化出来たのは須恵器の坏 4 点・高台坏 2 点・蓋 2 点、須恵器甕 1 点、土師器 2 点である。坏および高台坏の切り離しは回転ヘラ切・回転糸切ともに存在し、坏の形状から見ても 8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 1 四半期と思われる。南陽市内から出土する須恵器の時期とほぼ一致する。また須恵器蓋もほぼ同時期であろう。

(4) その他

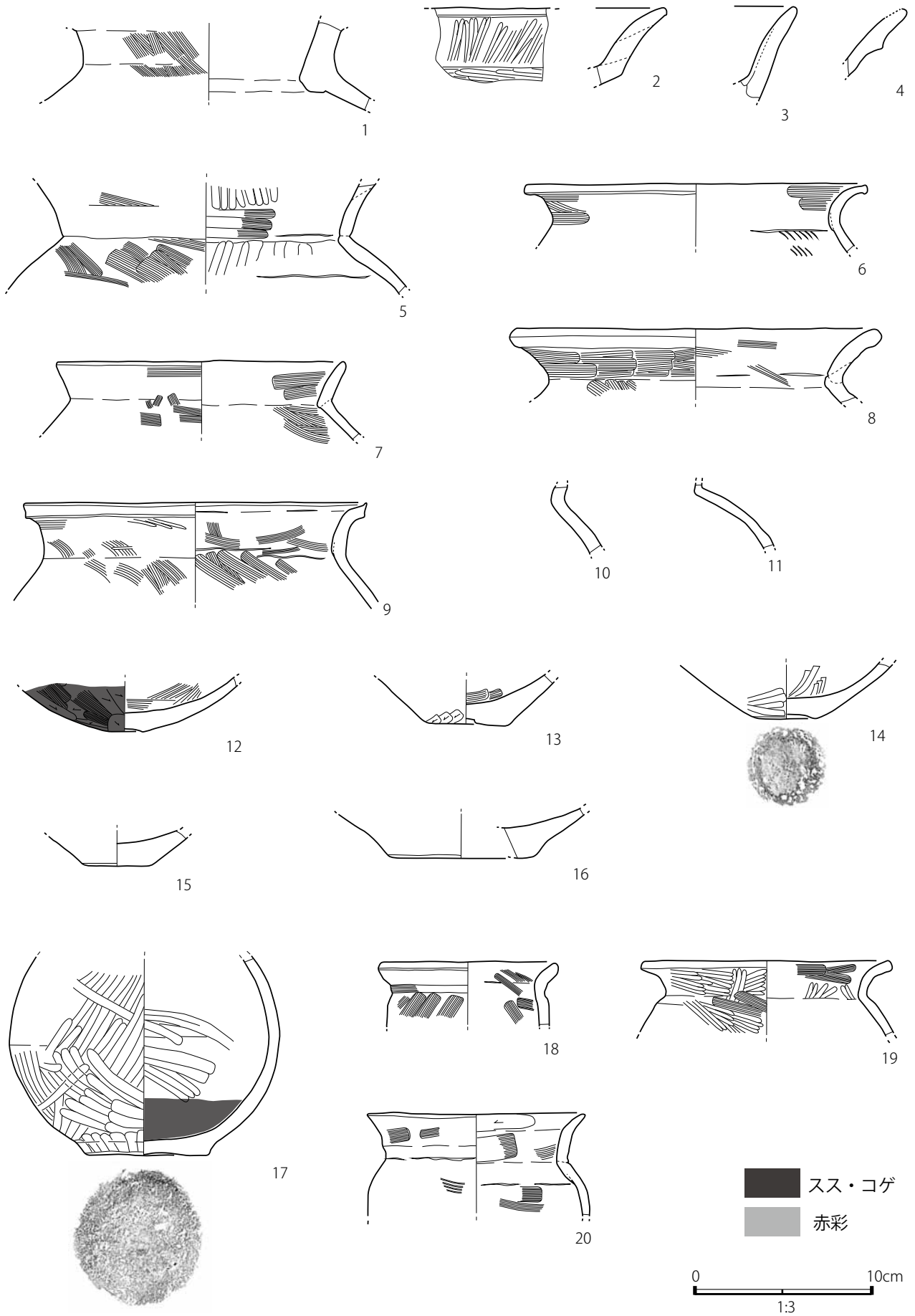
かわらけ 2 点と土錘 2 点が図化出来た。かわらけ 148 図 12～13 の内部にはススが付着し、12 については口唇に 1 ヶ所意図的な欠けがあることから燈明皿として使用されたことが窺える。中世のものと思われるが詳細は不明である。

以上、土器について時代および器種ごとに特徴を記述した。概ね縄文時代・古墳時代・古代・中世に属すると分類できると思われる。ここでは出土遺物の中心であった古墳時代の土器について考察したい。

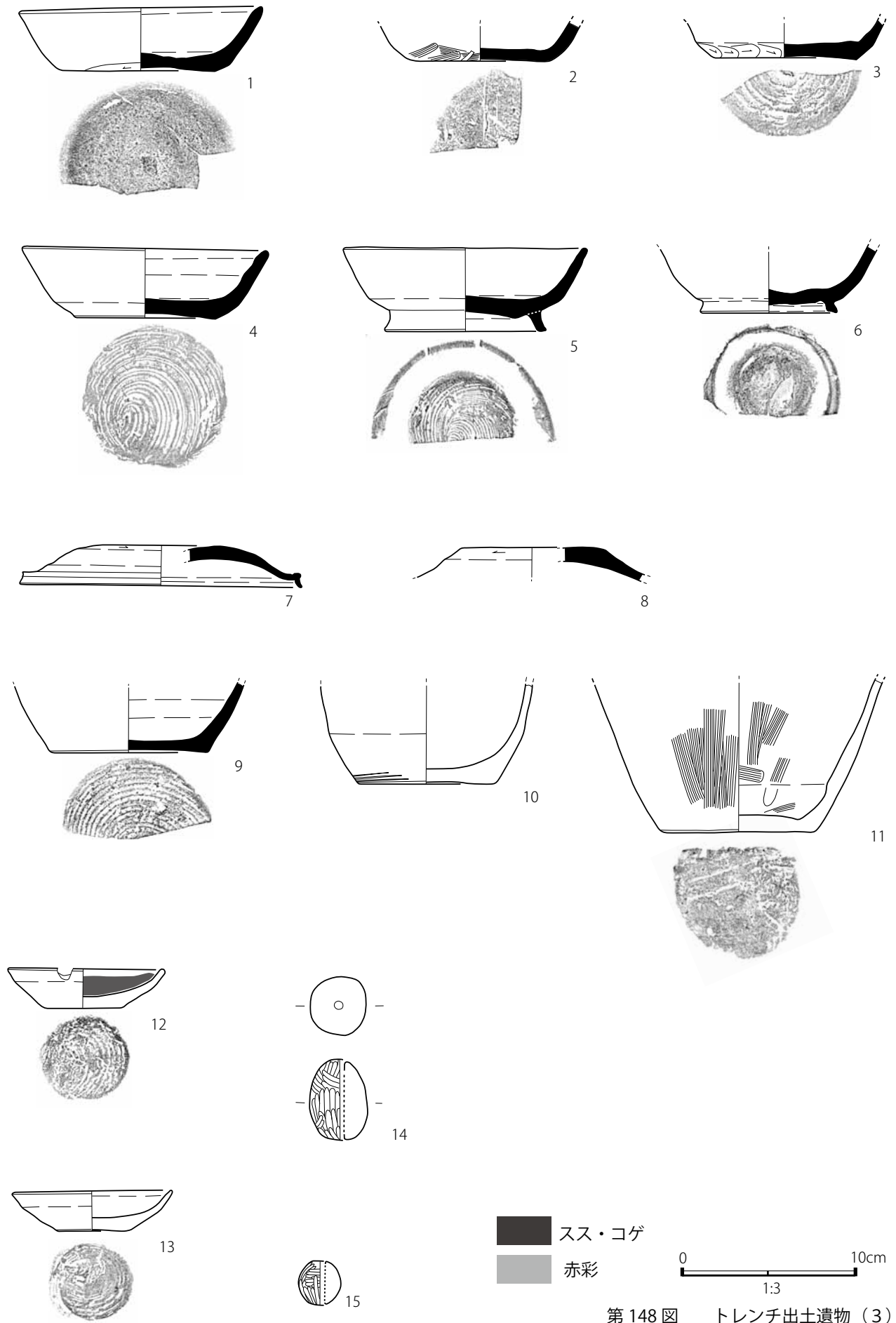
まず器台・高坏についてであるが、出土数が多く土器の年代が確定しやすい部分が残存しているものが多く、そこを足掛かりとして年代観を検討する。146 図 9 は先にも述べたように米沢市の横山古墳から出土している裾部が大きく広がる器台と類似しており漆町編年の 7 期並行時期にあたると思われる。146 図 10～11 の器台については前述のような特徴をも



第146図 トレンチ出土遺物(1)



第 147 図 トレンチ出土遺物 (2)



第148図 トレンチ出土遺物(3)

表4 遺物観察表(1)

図版 番号	挿図 番号	種別	器種	計測値 (mm)				調整			備考
				口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	
	1	縄文土器	不明	-	-	-	8				
	2	縄文土器	不明	-	-	-	6				
	3	縄文土器	浅鉢?	-	-	-	6				
	4	縄文土器	不明	-	-	-	7	沈線			
	5	縄文土器	不明	-	-	-	7				
	6	縄文土器	深鉢	-	-	-	5				
	7	縄文土器	不明	-	-	-	7				
	8	縄文土器	浅鉢?	-	-	-	6	貼付文			
	9	土師器	器台	-	-	-	5	ミガキ	ミガキ	-	内外面赤色加工、横山古墳器台並行期
	10	土師器	器台	96	-	-	7	ミガキ	ミガキ	-	外面に僅かに赤色加工痕あり
	11	土師器	器台	100	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-	外面に僅かに赤色加工痕あり
	12	土師器	器台	(96)	-	-	8	ミガキ	-	-	
146	13	土師器	高坏?	(206)	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-	
	14	土師器	高坏	-	-	-	7	ハケメ	ミガキ	-	
	15	土師器	器台	-	-	-	5	ハケメ	ハケメ	-	
	16	土師器	器台	-	-	-	8	ミガキ	-	-	
	17	土師器	器台	-	-	-	9	ミガキ・ハケメ	ハケメ	-	
	18	土師器	器台	-	-	-	10	ミガキ	-	-	外面に僅かに赤色加工痕あり?
	19	土師器	器台?	-	-	-	10	ミガキ	-	-	
	20	土師器	器台	-	-	-	7	ミガキ・ケズリ	ミガキ	-	鎌倉上遺跡等に出土例
	21	土師器	小型丸底碗	-	(20)	-	7	ハケメ	ハケメ	-	内面磨減著しい
	22	土師器	小型丸底碗	(100)	(58)	40	4	ミガキ	ヘラミガキ	ケズリ	
	23	土師器	ミニチュア土器	-	(14)	-	5	ミガキ	ミガキ	ケズリ?	
	24	土師器	ミニチュア土器	-	(20)	-	6	ミガキ	ミガキ?	ケズリ?	
	25	土師器	壺	(220)	-	-	15	ハケメ	ハケメ・ミガキ	-	
	26	土師器	壺	(200)	-	-	12	ハケメ	ハケメ	-	
	1	土師器	壺	-	-	-	12	ハケメ	-	-	
	2	土師器	壺?	-	-	-	7	ミガキ	ミガキ・ハケメ	-	外面赤色加工痕あり?
	3	土師器	壺?	-	-	-	10	ハケメ	ハケメ	-	赤色加工残っている
	4	土師器	甕 or 壺	-	-	-	7	-	-	-	
	5	土師器	壺	-	-	-	7	ハケメ	ミガキ・ナデ?	-	
	6	土師器	甕	(190)	-	-	6	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	-	内外面スス付着
	7	土師器	甕	(160)	-	-	8	ハケメ	ハケメ	-	
	8	土師器	甕	(200)	-	-	8	ハケメ	ハケメ	-	
	9	土師器	甕	(190)	-	-	7	ハケメ	ハケメ	-	能登甕か?
147	10	土師器	甕?	-	-	-	6	-	-	-	
	11	土師器	小型壺?	-	-	-	5	-	ユピナデ	-	赤色加工痕あり?
	12	土師器	壺	-	18	-	7	ケズリ・ハケ	ハケメ	火はね	外面に火はね・スス
	13	土師器	壺 or 甕	-	44	-	6	ケズリ	ハケメ	磨減顕著	使用痕顕著
	14	土師器	壺 or 甕	-	30	-	6	ヘラケズリ	ヘラケズリ	火はね	火はね顕著
	15	土師器	甕	-	38	-	8	-	-	-	
	16	土師器	甕	-	(40)	-	5	ハケメ	ハケメ	欠損か?	内外面スス付着、焼成後底部欠損
	17	土師器	小型丸底壺	-	70	-	6	ミガキ	ハケメ	-	内外面にコゲ
	18	土師器	小型甕?	(140)	-	-	5	ミガキ	ハケ・ミガキ	-	
	19	土師器	小型甕	(100)	-	-	6	ハケメ	ハケメ	-	
	20	土師器	小型甕	(120)	-	-	6	ハケメ・ケズリ	ハケメ	-	
	1	須恵器	坏	(138)	(90)	45	6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラケズリ	底部ヘラ切後調整・側面ヘラケズリ
	2	須恵器	坏	-	(80)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラケズリ	底部ヘラ切後調整・側面ヘラケズリ
	3	須恵器	坏	-	(80)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラケズリ	底部ヘラ切後調整・側面ヘラケズリ
	4	須恵器	坏	140	80	40	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
	5	須恵器	高台坏	(138)	90	48	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	高台内に墨痕、転用碗か?
148	6	須恵器	高台坏	-	77	-	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
	7	須恵器	蓋	(160)	(66)	23	5	ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転糸切	内面に自然釉
	8	須恵器	蓋	-	(76)	-	4	ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転糸切	
	9	須恵器	壺?	-	(90)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
	10	土師器	壺	-	(78)	-	4	ハケメ	ロクロ	回転ヘラ切	
	11	土師器	壺	-	(90)	-	5	ハケメ	ハケメ	不明	

表5 遺物観察表(2)

図版 番号	挿図 番号	種別	器種	計測値(mm)				調整		備考	
				口径	底径	器高	器厚	外面	内面		底部
148	12	かわらけ	-	90	46	22	3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	内面スス多量付着・口縁にカケ。燈明皿に転用?
	13	かわらけ	-	90	42	22	3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	内面スス付着
	14	土製品	土錘	46	-	-	33	ミガキ	-	-	
	15	土製品	土錘	24	-	-	22	ミガキ	-	-	

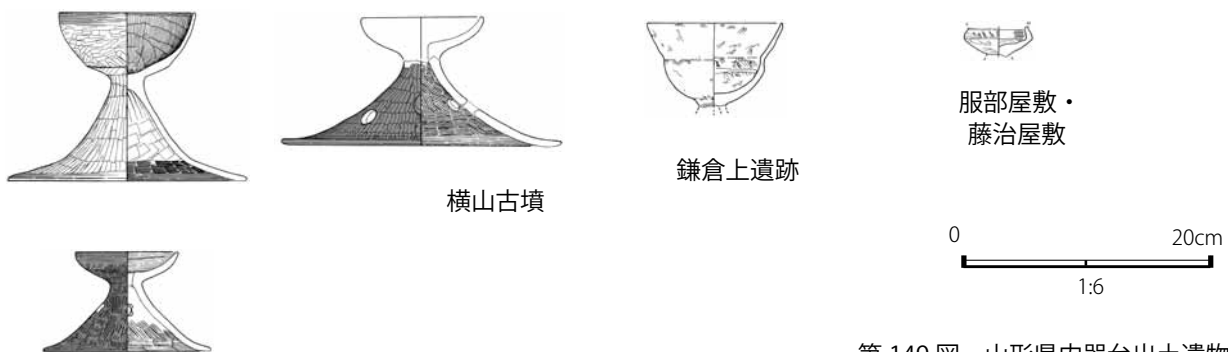
つことから漆町8群期に属すると思われる。146図13の高坏の坏部について今塚遺跡ST702(1994須賀井新人ほか)・高嶺南遺跡ST201(2004長瀬えみ子)などに類例が出土しており、概ね漆町9群期に属すると思われる。146図20について前述のとおり山形県内での出土例があり、概ね漆町10群期のものと考えられる。15～19の脚部についても推測ではあるが漆町9～10群期の範疇に収まるとと思われる。

続いて年代特徴的を持つ土器として注視したいのが147図9であるが、前述のとおり口唇部先端が「コの字」状の『能登甕』と呼ばれる北陸系の土器であり、概ね漆町7群期もしくは8群期の早い段階と思われる。

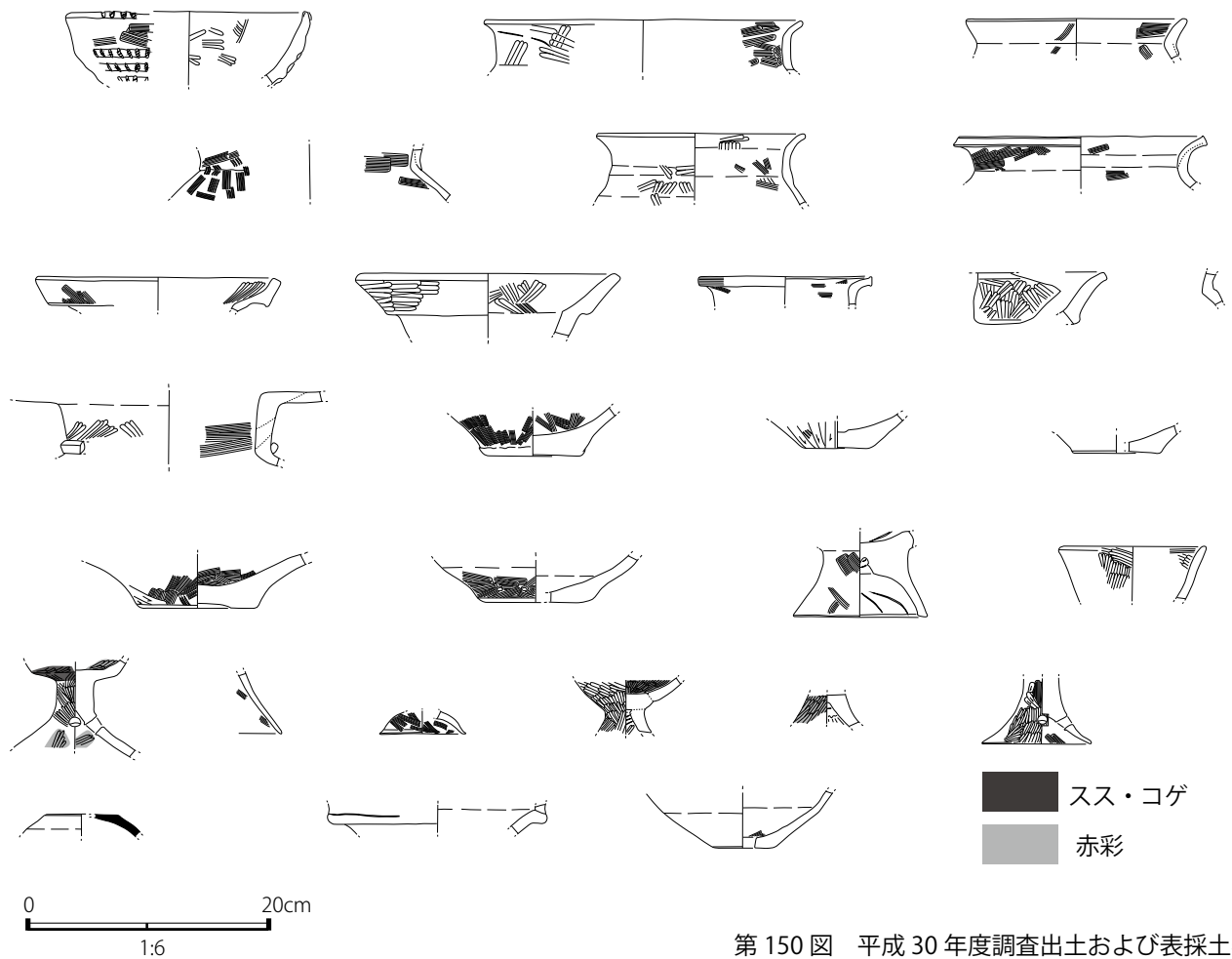
また埴類についても146図21・23・24は漆町9～10群に属すると思われる。

特徴が顕著な土器についてのみ土器の年代を検討してみたが、今年度調査にて出土した古墳時代の土器は概ね漆町7～10群並行期の範疇(3世紀半ば～4世紀後半)に収まると考えられる。

ところで、昨年発刊した「南陽市遺跡分布調査報告書(7)(2019角田朋行)」の遺物について(150図)土器年代の考察がなかったため本報告で簡単に時期を記しておく。古墳時代の土器について器種構成はやや今回と異なり壺・甕類がほとんどで時期の確定は難しいものの器台・高坏などの特徴から漆町8～10群期の特徴をもつなど今回出土した土器とは時期的には大きく変わらないと思われる。ただし、左上の壺(粘土紐を横に並行に貼り付けたもの)は類例等を見つけることはできず時期不明としておく。



第149図 山形県内器台出土遺物例



第 150 図 平成 30 年度調査出土および表採土器

引用・参考文献（第 8 節）

- 田嶋明人ほか 1986 『漆町遺跡 I』 石川県立埋蔵文化財センター
 吉野一郎ほか 1986 『南陽市須刈田大野平遺跡第 2 次調査報告書』 南陽市須刈田大野平遺跡調査団・南陽市教育委員会
 佐藤鎮雄ほか 1987 『南陽市史 考古資料編』 第三章 南陽市史編さん委員会
 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年」『東北学院大学論集』 歴史学・地理学 26 号
 須賀井新人ほか 1994 『今塚遺跡発掘調査発掘調査』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 7 集
 戸沢充則 1994 『縄文時代研究辞典』 東京堂出版
 佐藤鎮雄ほか 1995 『年表・写真でみる南陽市史』 南陽市史編さん委員会
 手塚 孝ほか 1995 『廻り屋遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集
 鈴木良仁ほか 2000 『横山古墳』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 72 集
 高桑弘美ほか 2004 『服部遺跡・藤治屋敷遺跡第 2 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 119 集
 長瀬えみ子ほか 2004 『高榑南遺跡遺跡・菖蒲江 1 遺跡・菖蒲江 2 遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集
 吉田江美子 2008 「山形県内の古墳時代前期土師器について」『研究紀要第 5 号』 山形県埋蔵文化財センター
 長橋至ほか 2010 『分布調査報告書 (36)』 山形県埋蔵文化財調査報告書大 212 集
 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北杜』 辻秀人先生還暦記念論集刊行会
 阿部明彦 2015 「出羽軟飯における古墳時代のはじまり」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 15 資料』
 角田朋行 2019 『南陽市遺跡分布調査報告書 (7)』 南陽市埋蔵文化財調査報告書第 15 集

IV 理化学分析

1 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

資料は、T3の段状二段目に相当する平坦面において、南側サブトレンチの盛土層（第17層、第22層）から2点、同北側サブトレンチのSK2覆土から1点の炭化物を採取した。IGのa-7からHGのa-1に設定したサブトレンチの最下層（第30層、泥炭層）から泥炭土のサンプルを採取した。採取した計4点について放射性炭素年代測定を行った。

南陽市社会教育課-埋蔵文化財係様試料4点の年代測定

2019年8月7日

山形大学高感度加速器質量分析センター

1. はじめに

南陽市社会教育課-埋蔵文化財係様よりご依頼頂いた試料4点（写真1）に対して、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と測定方法

表1に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析装置（NEC製1.5SDH）を用いて放射性炭素濃度を測定した。

3. 結果

表2に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った放射性炭素年代、較正曲線データを使用して放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。試料の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

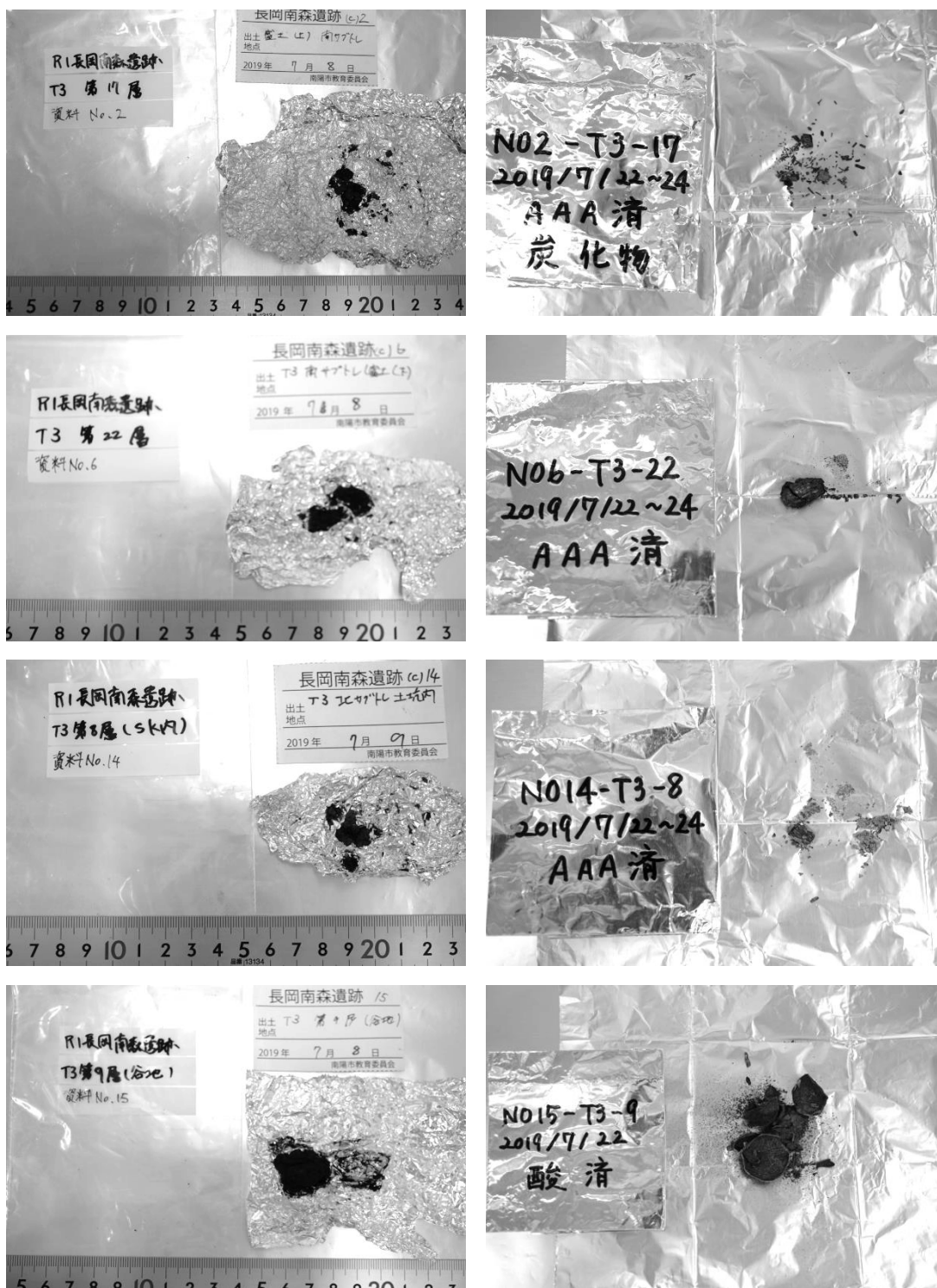


写真1. 試料情報

表1. 試料情報

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-9893	No2-T3-17	南陽市社会教育課 埋蔵文化財係試料 2019/07/22受取 R1長岡南森遺跡 T3 第17層 資料No.2 炭化物試料 南サプトレ 盛土(上) 2019/7/8 No2-T3-17	前処理後の試料 13.690mgから2.323mg使用	AAA処理 1M HCl 80度 1時間 0.001M NaOH 80度 1時間 (2回) 0.01M NaOH 80度 1時間 (10回) 1M HCl 80度 1時間
YU-9894	No6-T3-22	南陽市社会教育課 埋蔵文化財係試料 2019/07/22受取 R1長岡南森遺跡 T3 第22層 資料No.6 炭化物試料 南サプトレ 盛土(下) 2019/7/8 No6-T3-22	酸処理後250umのフルイを 通過したものを回収・乾燥 前処理後の試料 77.380mgから2.360mg使用	酸処理 1M HCl 80度 1時間 (3回)
YU-9895	No14-T3-8	南陽市社会教育課 埋蔵文化財係試料 2019/07/22受取 R1長岡南森遺跡 T3 (SK2 覆土) 資料No.14 炭化物試料 北サプトレ 土坑内 2019/7/9 No14-T3-8	前処理後の試料 95.570mgから2.329mg使用	AAA処理 1M HCl 80度 1時間 0.001M NaOH 80度 1時間 (2回) 0.01M NaOH 80度 1時間 (1回) 1M HCl 80度 1時間
YU-9896	No15-T3-9	南陽市社会教育課 埋蔵文化財係試料 2019/07/22受取 R1長岡南森遺跡 T3: 113層 資料No.15 土壌試料 第9層(谷地) 2019/7/8 No15-T3-9	酸処理後250umのフルイを 通過したものを回収・乾燥 前処理後の試料 885.000mgから12.256mg使用	酸処理 1M HCl 80度 1時間 (3回)

表2. 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	試料名	d ¹³ C (‰)	放射性炭素年代 (yrBP ± 1σ)	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
YU-9893	No2-T3-17	-26.56 ± 0.55	1758 ± 20	245AD (16.9%) 260AD 280AD (51.3%) 325AD	231AD (95.4%) 341AD
YU-9894	No6-T3-22	-27.33 ± 0.50	1756 ± 20	247AD (15.4%) 260AD 280AD (52.8%) 325AD	233AD (95.4%) 342AD
YU-9895	No14-T3-8	-23.88 ± 0.53	1246 ± 20	695AD (6.6%) 703AD 708AD (50.4%) 746AD 764AD (11.2%) 773AD	682AD (83.3%) 779AD 791AD (7.0%) 829AD 837AD (5.1%) 865AD
YU-9896	No15-T3-9	-15.87 ± 0.60	6683 ± 25	5632BC (35.6%) 5613BC 5588BC (32.6%) 5567BC	5645BC (95.4%) 5554BC

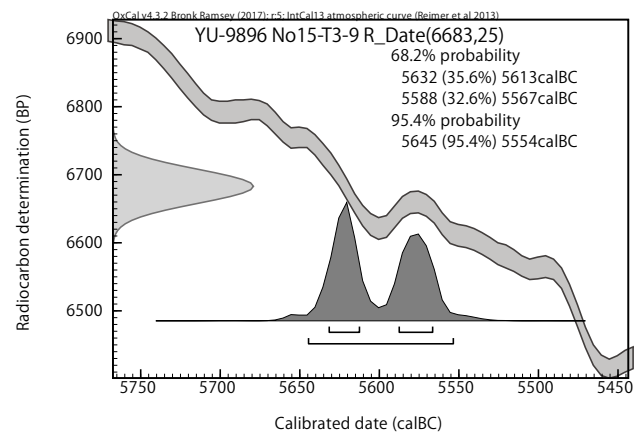
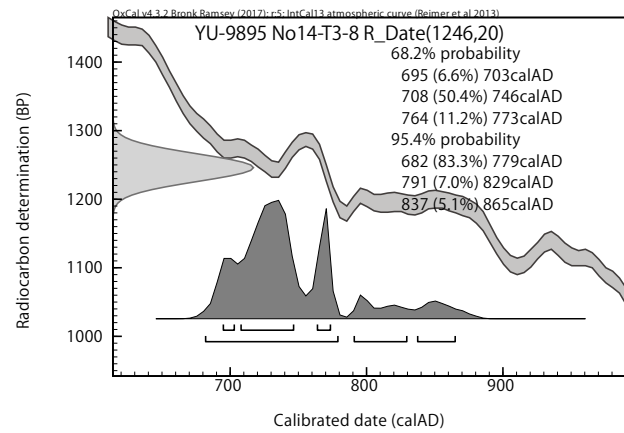
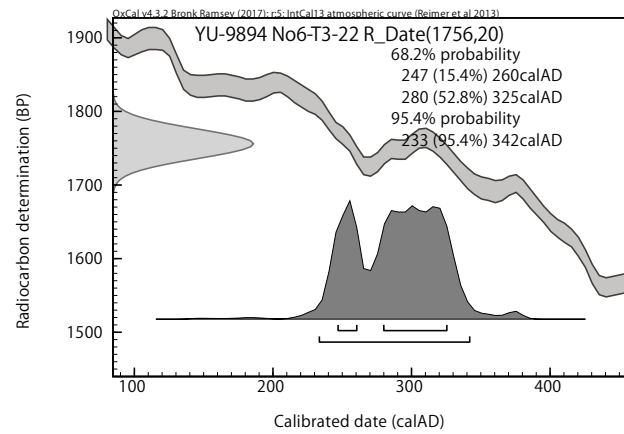
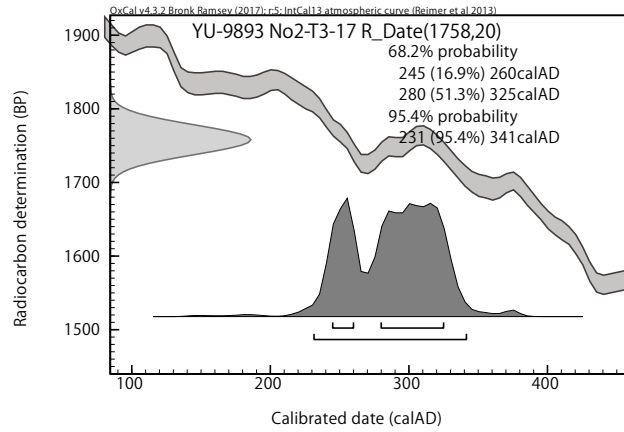
==== 年代測定のおえ方 ====

放射性炭素 (^{14}C) 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3.2¹⁾ (較正曲線データ: Int Cal13²⁾) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

- 1) C Bronk Ramsey, (2017), Methods for Summarizing Radiocarbon Datasets. Radiocarbon, 59 (2), 1809-1833.
- 2) Paula J Reimer, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Caitlin E Buck, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Hafliði Hafliðason, Irka Hajdas, Christine Hatté, Timothy J Heaton, Dirk L Hoffmann, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, K Felix Kaiser, Bernd Kromer, Stuart W Manning, Mu Niu, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Richard A Staff, Christian S M Turney, Johannes van der Plicht, (2013), IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.



V 調査結果

第1節 調査地の地形について

発掘調査で判明したこと及び想定される特徴等を以下にまとめる。

(1) 丘陵東斜面 (T 3) の地形及びその成因について

- ・東斜面には2つの段が構築され、計3段になっていたとみられる。
- ・段状一段目は、地山及び旧表土を削り出し構築しているとみられる。
- ・段状二段目は、切り土により肩部を土手状に掘り残しつつ基底となる平坦面を削り出し、その上に盛土を行って構築している。
- ・段状三段目は、上端から下段斜面にかけて一部盛土を行って構築しているとみられる。
- ・段状一段目に相当する最下段の外側に周溝に相当する溝跡が廻ると思われる。
- ・全面的に後世の攪乱が見られ、特に溝跡から段状二段目に相当する段の下段斜面までの範囲では攪乱の影響が大きい。これは丘陵を改変したとの地権者の話と一致する。

(2) 丘陵西斜面 (T 1、T 2) の地形及びその成因について

- ・西斜面には2つの段が構築され、計3段になっていたとみられる。
- ・最下段の丘陵北半部では基本的に地山及び旧表土を削り出して構築しているとみられ、くびれ部付近では旧表土上に盛土を行って構築しているとみられる。
- ・段状二段目の段は、T 1では基本的に地山削り出しで、T 2では部分的に盛土している可能性がある。
- ・段状三段目の上端は、肩部から下段斜面まで地山削り出しで構築されており、盛土は確認できない。尾根の東斜面側の様相とは異なる。
- ・最下段の外側に周溝に相当する溝跡が廻る。
- ・T 1の南辺より南側では、地権者によれば畑の造成による削平を受けているとみられる。

(3) 墳端やくびれ部に相当する地形について

- ・西斜面では段状一段目に相当する段の下端線が墳端に相当するとみられる。
- ・東斜面では段状一段目に相当する段の周辺は攪乱を受けており、面的に明瞭な墳端は確認できなかったが、土層断面や溝跡との位置関係から下端線が推定される。
- ・丘陵西側でくびれ部に相当する地形を確認した。段状一段目に相当する段の上端・下端が西へ大きく屈曲する。地表面では216.5 mの等高線に屈曲の影響を見ることができる。

(4) 周溝に相当する地形について

- ・西斜面側では、段状一段目に相当する段から12～13 mの地点で、溝跡西側の立ち上りを検出した。これにより、これまで低地状遺構としていた遺構は周溝に相当する幅12～13 mの溝跡と判明した。
- ・東斜面側では、攪乱の影響を大きく受けているが、段状一段目に相当する段の外側に幅10～12 mの窪地が確認された。西側同様の溝跡と考えられる。
- ・後円部に相当する丘陵南半部の南側には上記溝跡に対応する窪地が山裾を巡っており、丘陵

北半部から南半部まで溝跡が続くことが推測される。

(5) 丘陵の東西斜面の段の形状と位置について

- ・段状一段目、二段目に相当する段の標高は、西斜面では一段目は約 216 m、二段目は約 218 m である。東斜面では一段目は約 215.9 m、二段目は約 218 m である。
- ・段の平坦面の幅は、西斜面では一段目は 4.03 m、二段目は 5.19 m で、東斜面では一段目は 4.01 m、二段目は 4.52 m である。
- ・周溝に相当する溝跡の幅は、西側と東側でほぼ同規模である。
- ・現況で尾根頂の東西幅を 2 分の 1 にしたラインを中軸（基準線）とした場合の各傾斜変換点までの距離と各部位の幅を下記の表に示す。尾根の中央を中軸として溝跡から尾根頂まで東西の地形は概ね対称を成していると言って良い状況と思われる。基準線からの距離を東西で比較すると東斜面側は各地点で共通して 2.5 ～ 3.2 m（平均約 2.9 m）程短く、基準線のずれ（現況と本来の尾根中軸とのずれ）を思わせる。

第 2 節 遺構・遺物について

(1) 古墳に伴う可能性のある遺構について

- ・前方部に相当する丘陵北半部では、段状に相当する段が東西斜面にそれぞれ 2 段あり、全体では 3 段に造られている。平面形や断面は東西でほぼ対称となっている。

(2) その他の遺構について

- ・S K 1 は、東西 3.5m、南北 4.7m の大型の土坑であることが確認された。
- ・S K 2 は、燈明皿が出土したことから中世の土坑とみられる。
- ・S K 3 は、遺物は出土しなかったが切り合いから考慮して盛土開始前に掘られた土坑と見られる。
- ・古代の遺構は、平地部においピット、土坑 S K 4 が検出された。
- ・S A 1 は、尾根から西斜面にかけて検出された。柵列の遺構と思われる。

(3) 遺物等について

- ・尾根頂から尾根の下段斜面の範囲では東西斜面ともに遺物は出土しなかった。
- ・段状二段目に相当する段では、西斜面側では主に S K 1 覆土から古墳時代前期の土師器が出土した。東斜面側では盛土内及び平坦面上から古墳時代の土師器が出土した。盛土出土の土器は器台、小型丸底碗、二重口縁壺等が見られる。
- ・段状一段目に相当する段では、西斜面側では平坦面上から縄文土器と古墳時代の土師器、旧表土層から縄文土器及び石器が出土した。東斜面側では、平坦面上と旧表土から縄文土器及び石器が出土した。攪乱層からは古墳時代の土師器や古代の須恵器が出土した。
- ・東西の溝跡覆土からは縄文土器と古墳時代の土師器が出土したが、床面や床面近くからの遺物の出土は確認できなかった。
- ・T 3 の溝跡東側の平地部では、攪乱層から古墳時代の土師器や古代の土師器・須恵器が出土した。

表6 尾根中軸から傾斜変換点までの距離（北壁計測値）

傾斜変換点		溝跡（平地側）		溝跡（丘陵側）		（m）					
						1 段目		2 段目		尾根肩	中軸
		上端	下端	下端	上端	裾	上端	裾	上端		
中軸（基準線）から の距離	西斜面	39.93	39.24	27.65	27.12	23.09	19.07	13.88	10.06	0	
	東斜面	36.72	36.23	24.54	24.37	20.36	15.86	11.34	10.06	0	

表7 各部位の幅比較表
(m)

	溝跡		1 段目		2 段目		3 段目（尾根）	
	上端間の幅	下端間の幅	下段斜面幅	平坦面幅	下段斜面幅	平坦面幅	下段斜面幅	1/2 の幅
西斜面	12.81	11.59	0.53	4.03	4.02	5.19	3.82	10.06
東斜面	12.35	11.69	0.17	4.01	4.5	4.52	1.28	10.06

昨年度の第1次調査の成果として、遺跡範囲のうち丘陵部北半部については主に縄文時代と古墳時代の時期の遺跡であること、古墳時代の祭祀に関連する可能性のある遺跡であること、人工的な造成地形が確認されたこと等が挙げられる。一方で古墳かどうかという観点からは、くびれ部の有無、低地状遺構が外側で立ち上って溝になるかどうか、盛土があるかどうかなどが特に大きな課題として残った。

VI まとめと課題

今次調査では、昨年度に引き続き古墳かどうかを含め、遺跡の性格把握と丘陵の地形成因の把握を主たる目的とした。

T1のくびれ部については形状としては緩慢としている。周溝の立ち上りと思われる掘り込みが確認できたものの、最下層もしくは底面近くから古墳時代の遺物の出土が確認できないことから古墳時代に属する溝であると断定することは難しい。

そして、炭素年代測定の結果と出土遺物の土器年代との誤差は今後検討が必要な点である。

また、今回の調査では西側斜面と東側斜面で覆土が逆転するような相違がみられるため、次年度調査においてはT1とT3を連続させて再度土層観察を行う必要がある。

註

- 1) 2) 地山と盛土や溝跡の範囲の確定にあたっては阿子島功氏（山形大学名誉教授）にご指導いただいた。
 2) 北野博司氏のご教示による。
 3) 阿部明彦氏のご教示による。阿部明彦氏が提唱している天童市高揣遺跡・菖蒲江1遺跡の器種構成から「高揣南編年」（2015 阿部明彦）によると、漆町7～8群の甕類に北陸系の特徴を留めているとしている。

引用・参考文献

- 長井政太郎 1968 『赤湯町史』 赤湯町史編さん委員会
 吉野一郎 1984 『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 郡山 矢ノ目館跡遺跡』 南陽市教育委員会
 佐藤鎮雄・佐藤庄一 1987 『南陽市史 考古資料編』 南陽市市史編さん委員会
 金関怨・佐原真 1987 『弥生文化の研究 弥生土器Ⅱ』 雄山閣出版
 吉野一郎・茨木光裕 1988 『南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集 稲荷森古墳』 南陽市教育委員会
 吉野一郎・茨木光裕 1989 『南陽市埋蔵文化財調査報告書第4集 稲荷森古墳』 南陽市教育委員会
 佐藤鎮雄・佐藤庄一 1990 『南陽市史 上巻』 南陽市市史編さん委員会
 佐々木洋治ほか 1990 『向畑C遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会
 石野博信他 1992 『古墳時代の研究7』 雄山閣出版
 松本洋明 1994 『赤土山古墳第3次調査概報』 天理市教育委員会
 加藤次郎右衛門ほか 1995 『山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集（置賜地域）』 山形県教育委員会
 古屋紀之 2007 『古墳の成立と葬送祭祀』 雄山閣出版
 渡辺貞幸他 2008 『普段寺古墳群Ⅰ』 普段寺古墳群調査団
 佐藤鎮雄ほか 2010 『平安初頭の南出羽考古学』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
 佐藤鎮雄 2011 『やまがたの古墳時代—最上川流域のムラの古墳—』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
 青山博樹 2011 『土師器の編年 ⑦東北』 『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』 同成社
 佐藤鎮雄 2012 『中世やまがたの城館 - そこに城館がある理由 -』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
 吉田江美子・山田 渚 2012 『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群』 南陽市教育委員会
 山田 渚・吉田江美子 2013 『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 長岡山遺跡・長岡山東遺跡』 南陽市教育委員会
 角田朋行・吉田江美子 2014 『南陽市遺跡分布調査報告書（1）』 南陽市教育委員会
 植松暁彦 2014 『山形県の様相』 『東生第3号』 東日本古墳確立期土器検討会
 角田朋行 2015 『南陽市遺跡分布調査報告書（2）』 南陽市教育委員会
 角田朋行・吉田江美子 2015 『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 清水上遺跡』 南陽市教育委員会
 角田朋行 2016 『南陽市遺跡分布調査報告書（4）』 南陽市教育委員会
 角田朋行 2017 『南陽市遺跡分布調査報告書（5）』 南陽市教育委員会
 手塚孝他 2017 『館山城ハンドブック』 館山城保存会
 藤沢 敦 2018 『弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布』
 『国立歴史民俗博物館研究報告 第211集』 国立歴史民俗博物館

長岡南森遺跡発掘調査写真図版



長岡南森遺跡作業風景（西より）



T1 調査前風景（南より）



T3 調査前風景（北西より）



T1a・T1b 調査前風景（東より）



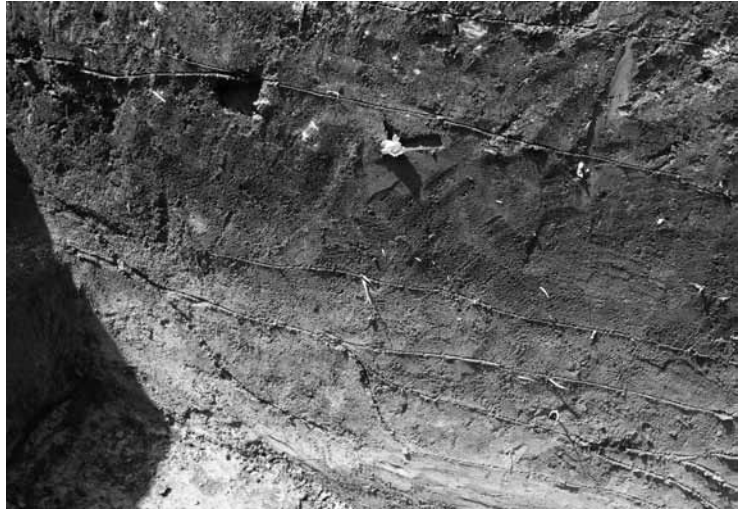
東拡張部トレンチ（西より）



北西角延長部トレンチ（東より）



くびれ部の状況（北より）



T1 溝跡西側端部断面 (東より)



T1 南西角断面 (東より)



T1b 完掘状況 (西より)



T1a 完掘状況 (西より)



T1-M10n 完掘 (西より)



T1-M10s 完掘 (西より)



K10 G内出土遺物 (南より)



K10 G内出土遺物 (南より)



T3 完掘全景 (西より)



H G完掘全景 (東より)

トレンチ3 (1)

写真図版5



SA1 検出状況（東より）



JG遺構検出（東より）



JGの平坦面南面（東より）



JGの平坦面北面（東より）



南壁尾根斜面盛盛土断面（東より）



北壁尾根斜面盛盛土断面（東より）



T3 溝跡検出（東より）



SK3 調査状況（北より）



ST3 掘立柱建物跡調査状況（南西より）



147 図 17



146 図 9
トレンチ出土遺物(1)
写真図版 9



146 図 10



146 図 11



146 図 12



146 図 14



146 図 13



146 図 15



146 図 16



146 図 17



146 図 18



146 図 19



146 図 20



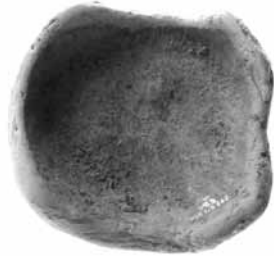
146 図 21



146 図 22



146 図 23



146 図 24



146 図 25



146 図 26



147 図 1



147 図 2



147 図 3



147 図 4



147 図 5



147 図 6



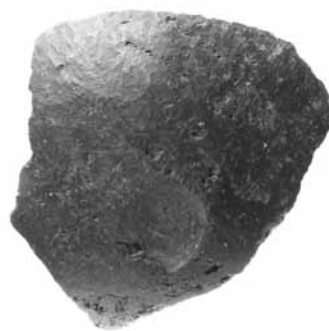
147 図 7



147 図 8



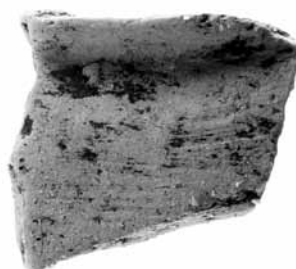
147 図 9



147 図 12



147 図 10



147 図 11



147 図 13



147 図 14



147 図 16



147 図 18



147 図 19



147 図 20



148 図 1



148 図 2



148 図 3



148 図 4



148 図 5



148 図 6



148 図 8



148 図 9



148 図 11



148 図 10



148 図 14



148 図 15



148 図 12



148 図 13



146 図1～8
トレンチ出土遺物 (10)



平成 30 年度調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なんようしぶんぶちょうさほうこくしょ							
書名	南陽市遺跡分布調査報告書(8)							
副書名	市内遺跡分布調査・第二次長岡南森遺跡確認調査(概報)							
巻次								
シリーズ名	南陽市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	角田朋行 吉田江美子							
編集機関	南陽市教育委員会							
所在地	〒999-2292 山形県南陽市三間通436番地1 TEL 0238-40-3211							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。 ’ ”	。 ’ ”		m ²	
市内遺跡	山形県 南陽市 地内	6213	—	—	—	2019	—	—
ながおかみなもりいせき 長岡南森遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 ながおかあざみなもり 長岡字南森 1650-1 他	6213	052	38° 02' 13"	140° 9' 28"	20190507 ～ 20190730	364	遺跡確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
市内遺跡	—	—		—	—	—		
ながおかみなもりいせき 長岡南森遺跡	散布地	縄文時代・古墳時代・ 古代・中世		溝跡	縄文土器・ 土師器・須恵器・ かわらけ	長岡字南森の墳丘においてトレン チ調査を行い、遺跡の性格・時代 等を確認した。		
要約	<p>市内遺跡：市内における各種開発事業に伴う踏査、試掘調査、立会調査及び広域調査。</p> <p>長岡南森遺跡：本遺跡は南陽市内の国指定史跡の前方後円墳・稲荷森古墳から南東へ130mに位置する独立丘陵に位置する。長岡南森遺跡は、南森と呼ばれる独立丘陵地を中心とする遺跡である。丘陵の形状が前方後円墳に似ていることから昭和53年に稲荷森古墳調査団が確認し、平成5年度に南陽市教育委員会で踏査を続けてきたが、平成28年度に市教育委員会遺跡の現状把握と今後の調査及び遺跡保護の基礎資料を得ることを目的に測量調査を実施した。今年度調査においては階段状の盛土・周溝の確認などを行うために丘陵に対して東西それぞれにトレンチを入れたが、遺跡が古墳であるかの明確な調査結果は得られなかった。また縄文時代・古墳時代・古代・中世の遺物が出土した。</p>							

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 20 集

南陽市遺跡分布調査報告書（8）

市内遺跡分布調査

第二次長岡南森遺跡確認調査（概報）

2020 年 3 月 31 日

発行 南陽市教育委員会
〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地の 1
電話 0238-40-3211 (代)

印刷 有限会社文進堂印刷
〒 999-2221 山形県南陽市柵塚 811 番地の 3
電話 0238-43-2116

